川柳塔

令和二年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一一九号

日川協加盟

No.1119

八月号

おしらせ

第26回川柳塔まつりは誌上大会に変更いたします

新型コロナウイルス感染予防のため、10月3日に予定していました【第26回川柳塔まつり】は、誌上大会に変更させていただきます。ご予定いただいていました皆さまには申し訳ございませんが、ご容赦下さいますよう、お願い申し上げます。

投句要項等は下記の通りです。同人誌友に限らず結社を超えてご応募できますので、皆さまのご参加をお待ち申し上げます。

なお、山本進氏の「おはなし」につきましては、来年度の「川柳塔まつり」に、演題はそのままで延期させていただきます。

課題と選者（各題二句）

「プライド」	栃尾奏子 選	（川柳塔社）
「しっかり」	鈴木いさお 選	（川柳塔社）
「織る」	永見心咲 選	（川柳塔社）
「元気」	竹村紀の治 選	（川柳塔社）
「混ぜる」	西美和子 選	（番傘川柳本社）
「扉」	小島蘭幸 選	（川柳塔社）

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などをご使用いただいても結構です。

投句料　１０００円（切手は不可）

投句締切　**9月30日（水）消印有効**

送付先　〒543—0052　大阪市天王寺区大道１丁目14—17—201
川柳塔社　誌上大会係　宛
TEL／FAX(06) 6779—3490

賞及び発表　各題特選２句に賞呈。発表は川柳塔誌十二月号誌上。
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈。

川柳塔社

雨の尾道　雨の句碑

小島　蘭幸

小雨が降り続く中、私は尾道へと車を走らせていました。実は今年も尾道の川柳会の皆さまと麻生路郎句碑まつりを開催する予定でしたが、大雨の予報が続いていましたので中止にしたのです。

7月10日、路郎忌誌上句会、「階段」の選をしていたのですが、居ても立っても居られず、急遽車を走らせたのです。

麻生路郎の文学碑の前に立ったのは、1月1日以来でしたが、また一段と風格を増したように思いました。ただ一つ変わっていたのは句碑の前に湯呑みが置いてあったことです。その湯呑みにお酒をなみなみと注いで、句碑にお酒を注いで、私は自然と手を合わせていました。句碑の横には、句碑の説明板があります。紹介致します。

麻生路郎・葭乃川柳句碑

おれに似よ俺に似るなと子をおもい　路郎
飲んで欲しやめてもほしい酒をつぎ　葭乃

麻生路郎（本名幸二郎）一八八八―一九六五
尾道市十四日町に生れる
一九一四年、河盛葭乃（一八九四―一九八一）と結婚。
一九二四年、川柳雑誌（現「川柳塔」）創刊。
戦後の川柳界をリードした六大家の中心となった。

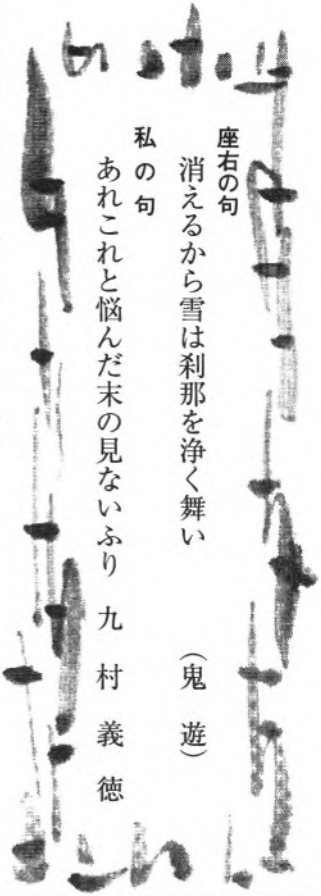
文字　自筆
建立　二〇〇一年七月七日
建立・寄贈者　句碑建立実行委員会

二〇二一年は、句碑建立二十周年になります。尾道の川柳会の皆さまと句碑まつり、そして記念句会を開催したいと密かに思っています。この機会に路郎のふるさと尾道を是非訪れていただきたいと願います。

令和二年七月豪雨は、列島各地に甚大な被害を齎しました。

犠牲者の方々に衷心より哀悼の意を捧げますと共に、被害に遭われました皆様には一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

川柳塔社



座右の句

消えるから雪は刹那を浄く舞い　（鬼遊）

私の句

あれこれと悩んだ末の見ないふり　九村義徳

川柳塔　八月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「万座毛・沖縄」

■巻頭言　雨の尾道　雨の句碑……小島蘭幸…(1)
ネット川柳……森山盛桜…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌⑱……木津川計…(40)
橘高薫風句抄……(41)
自選集……(42)
句集の森……河村日満…(45)
温故知新……(45)
水煙抄……川上大輪選…(46)
英語 de Senryu ⑭……吉村侑久代…(65)
誹風柳多留一二篇研究 86……(66)
愛染帖……新家完司選…(68)
檸檬抄「浅　い」……水野黒兎・鴨谷瑠美子共選…(72)

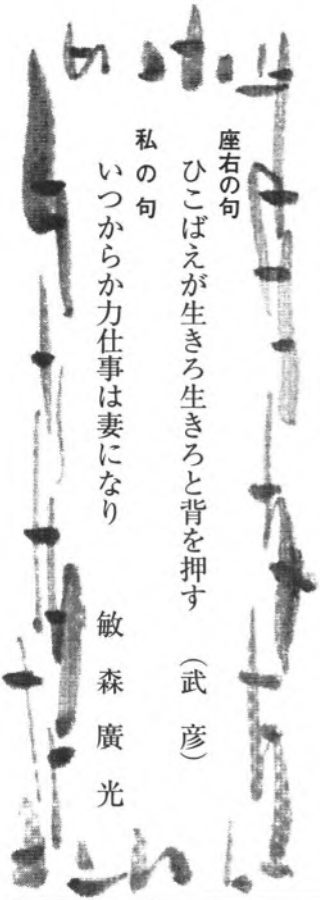
ネット川柳

森出盛桜

右手の人差し指でポチヨポチヨとカーソルを叩いてパソコンをいじる。ブラインドタッチなど夢のまた夢なのだが　最早どうでもいい事。ステイホームの所為というかお陰というか兎に角パソコンに向かう時間が多くなった。専ら、小説の朗読を聴いている。藤沢周平・山本周五郎・江戸川乱歩・松本清張・太宰治等であるが、中でも藤沢・山本作品に魅力を感じる。コロナ禍のギスギスした世の中にはもってこいだと思う。

そのうちに、自然と川柳関係を見る事になる。例えば「川柳募集」をクリックすると、驚くほど出て来る。しかし、中にはこれが大賞かと思うような句もあり又、中八が氾濫している。十万円という高額賞金もあり「パチプロ」ならぬ「センプロ」で食っていけると思った。「○○川柳募集」などの所謂企業川柳は往々に

一路集（「招　く」……松岡　篤選……(76)
「散　歩」……松原寿子選……(77)
初歩教室「仕掛け」……高瀬霜石……(78)
川柳塔鑑賞……古久保和子……(80)
水煙抄鑑賞……米田恭昌……(82)
■追悼文（海老池　洋さん）……伊達郁夫……(83)
『麻生路郎読本』余滴(59)……桒原道夫……(84)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世……(86)
路郎賞・川柳塔賞　選考規定……(88)
せんりゅう飛行船(116)……新家完司……(90)
各地柳壇（佳句地十選／村上　玄也・安土　理恵）……(91)
八月各地句会案内……(98)
柳界展望……(100)
■編集後記（ひとこと／中村伸子）……朱夏・勝弘……(102)



座右の句

ひこばえが生きろ生きろと背を押す　（武　彦）

私の句

いつからか力仕事は妻になり　敏森廣光

してこの傾向にある。

しかし、これ等とは全く性質を異にする、文芸性を有した川柳（以下、ネット川柳）もネットにはあるようだ。作者は三十代、四十代が多く、六十代は若いと言われる川柳界と比べ物にならない。

彼等は選考によって優劣をつける事には殆ど関心が無い。ひたすら自分の思いを世に出す。一般的にはネット川柳は訳が解らんという話を聞くが、それで打っ棄ってしまっては失礼であるという気がする。そこで解ろうとしながら何度か読み返してみる。するとある一瞬、閃く物がある。ひよっとしたらこれかもしれないという事になる。間違っているかもしれないし、結局解りませんというのもあるが、クロスワードを解くような気持である。こういう過ごし方もありか。

ネット川柳と川柳界の乖離というのが言われている。一部は融合を図ろうと努力するとは思うが、ネット川柳を知らない人も多いし、もつと言えばパソコンをやらない人も沢山居る。この距離を縮めるのは難しい。

川柳塔

小島蘭幸選

ユーモアのふりかけ持っていた父だ　大阪市　古今堂　蕉子
覇気のない毎日ゴロンゴロンゴロン
もういいよ言うが未だにする自粛
コロナ禍に見えた国柄お人柄
鬼は外あの頃上陸したコロナ
学校再開待ちに待ってたのはママだ　鳥取県　斉尾　くにこ
ぽこぽことひととき庭の木陰カフェ
尊敬をもって引用する言葉
わたししか書けぬわたしの個性文字
筆圧の濃淡にある今日の色
逢えるまでひとり見送られてひとり
「元気でね」「またね」と呪文かけました　箕面市　中山　春代
テレビ消す不安をあおるワイドショー
お針箱マスクで五歳若返る
スニーカーぬらす朝露三千歩

山寺の苔にそまっているひとり
胸奥につつむふる里の海鳴り
お賽銭マスクを捨てる日を祈る　大阪市　谷口　義
筆順も分からぬままに粛と書く
帽子にマスクサングラス一般人です
自粛して昔の服を着ています
おばあさんという立場もむつかしいものよ
一人分のほこりとゆらり移動する
夏が来ると思っただけで息苦し　鳥取市　岸本　宏章
虎キチに三月遅れの春が来る
少しずつ実ってほしい夏野菜
一〇万円貰った付けはきっと来る
幸せな犬だベンツに乗っている
自画像に皺を描き足し生き延びる
コロナ禍も戦時思えばまだ軽い

負け犬の足跡濡れたまま続く
笑い合う泣くのは一人でもできる
眼の力抜いて相槌打っている
お噂はかねがねと片頬が笑う
キオスクで買ったビールは風の味
無縁墓雨が洗って陽が温め

橿原市　居谷真理子

待っていたと言う人がいた定年後
喋ったら消え去りそうな小さい幸
しらふで見る花も時にはいいものだ
女性皆美人に見えているマスク
同じ文字を昨日も今日も引く不安
惚け防止だと運転を止めぬ友

唐津市　坂本蜂朗

暗黙の掟やぶったのはアナタ
向き合って食べてるだけの仲ですね
別人の顔で飲みます喋ります
雨の日は雨のリズムのステップを
バリアフリー優しい父と母でした
子猫ちゃんの仲間入りから笑い声

桜井市　安土理恵

思いきりショートカットに自粛あけ
いただけるならいただいておく平和主義
踊り場は画廊ほっこり落ち着ける

米子市　吉田陽子

安心の一つと思う姉の声
何事も新規加入はもうしない
せせらぎでいよう努力をしていよう

松山市　柳田かおる

あの時の恥がわたしの芯になる
削除キー元に戻ってほっとする
ほんとうの度胸静かに生きている
もういちど戻ってほしい当たり前
巣ごもりで振り子時計の音を聴く
かがやいて蛍やさしい闇がある

大阪市　栃尾奏子

ワタクシと前世をつなぐ大花火
酣なワタシ齧ってみませんか
永遠を信じてみたくなる素肌
奔放な愛され方で良い猫科
声紋は一致だ本能が騒ぐ
来世では添い遂げましょうシャボン玉

大阪市　髙杉力

図書館の本が一冊出て来ない
めいめいが好きな酒飲むオンライン
断捨離が迫るお宝レコードに
放物線のピークは過ぎてから分かり
さよならが言えそう柔らかな雨だ
憧れはキリギリスかも知れぬ蟻

尼崎市　山田耕治

一瞬のとろりに亡妻が笑ってる
チンして下さい留守に娘が来たようだ
墓にのぼればカッコーが鳴いている
ケアハウス母が体操していたよ
母の踏むミシンの横で本を読む
ひとり住む朽ちた葡萄の棚の家

奈良市　大久保眞澄

アベノマスク口封じにも事足りぬ
検問突破病院の敷居は高い
アルコールで臓器消毒する夫
死の告発までも黙殺する政府
テレワーク横目に今日も町工場
そう言えば桜はチラ見だけだった

岡山市　工藤千代子

シャネルより自由が欲しい初夏になる
解除されやっと守宮がうちに来た
夫以外話相手もなく暮れる
扇風機愚痴など聞いてくれますか
解かない方が良かった縺れ糸
外出は生ゴミの日と物干しと

西予市　西田美恵子

ゼロという力で生きてみませんか
千の窓千の人間物語り
余命宣告雨の匂いのする窓辺
最初から許してましたのよあなた
月を見て堪えたあの時の涙
灰になるまであなたとここで暮らしたい

東大阪市　西村哲夫

馴れてきた疲れてきたか自粛道
したくない噂ばなしを聴いている
お片づけ不要不急の事とする
子に投資損得尽くを言うで無し
芸能ニュースいつしか自己を見失う
本当の話こころが痛くなる

大阪市　大川桃花

知らぬ間にサボテン子孫殖やしてた
おしゃれやなあ日傘でソーシャルディスタンス
一億が皆神経過敏になるコロナ
ソーシャルディスタンス木戸銭倍にして欲しい
申請書てんやわんやの老いふたり
もっと緩く生きよと亡母の声がする

羽曳野市　吉村久仁雄

あみだくじで決めて行く道つつがない
リハビリの一歩一歩に満つ命
千手観音抱き締められた痛かった
罪の味混じって美味い朝の酒
詫びる気と許す気鍋をつつき合う
生き恥を晒す熱血教師いた

令和二年長い童話のはじまった
優しさに囲まれとても惨めです
お針箱母の夢とわたしの夢
幸せは網の目くぐりやって来た
一番星につらい話を打ち明ける
子離れは親離れよりむつかしい

藤井寺市　太田扶美代

観客のいない舞台のわが人生
許す裏に大きな愛があるのです
約束を背負って今日も旅続く
雑踏はとっても赤い息の河
方言の霧を大事にもっている
窓という家一軒の目鼻立ち

鈴鹿市　小河柳女

嫌な世になってしまったコロナ菌
大阪は負けまへんでと頑張って
第一歩踏み出す勇気鍛えねば
可も不可もあるからこの世面白い
好き嫌いみんな違って楽しいね
難しい理屈は抜きで先ず動く

大阪市　坂裕之

涅槃像見なれし胸の高さかな
菖蒲すっくと青春の彩で立ち
桜過ぎ躑躅過ぎてもコロナ鬱
カルメンの紅で薔薇の美極まれり
病床の君へ届ける花だより
ゆるゆるもいいなわたしのはしご酒

熊本市　杉野羅天

三密という印籠をちらつかす
コロナ禍で年金減らぬこと願う
控え目がいいな餡こもオバチャンも
癒やしの曲流れる中で抜歯され
地下街を出ると真夏の立ちくらみ
淋しいが再婚だけはやめておく

尼崎市　藤井宏造

来世では長生きすると言った母
生まれた時こころ真っ白だったのに
戒めの笛が忘れた頃に鳴る
現実から逃げてスマホに縛られる
遺伝子の濃さ喜びと戸惑いと
触れるものみな味方とは限らない

大阪市　小野雅美

運不運飛んで綿毛の着地点
幸せの欠片を拾う回り道
愚痴小言妻は笑って聞いている
非常事態川柳さえも引きこもり
ひまわりの海で遊んでいるゴッホ
ワイングラスに哀が澱んでいる別れ

松山市　栗田忠士

三密は無くても固い血の絆
新聞を隅の隅まで読む自粛
円形脱毛きっと自粛のせいだろう
長寿日本古希還暦にある不安
スマホ横目にガラケイの意地っ張り
刀折れ矢尽き鉛筆ちびたまま

奈良市　米田恭昌

動かない山を一途に押している
傷ついたところへ母の愛を塗る
褒め殺しされて神輿に乗せられる
大切に生き抜くいただいた命
感謝するこころが失せた自由主義
躊躇している間に茶柱が沈む

三原市　鴨田昭紀

紫陽花の雨に喜ぶ気をもらう
金婚をすぎて介護の手をつなぐ
赤子じゃない大人と対座する介護
夜は明けて君さえいればパラダイス
たからもの愛の記録を持つ柱
タイトルに挑む少年茶を含む

河内長野市　森田旅人

密避けるための一人は味気ない
古手紙しみじみ読んでコロナ鬱
起こしてほしい時間主人に頼られる

越谷市　久保田千代

川柳の都離れて下手したか
その内に履く靴並べ小さな幸
洗濯機ここの借家に慣れた音

鳥取市　田賀八千代

仲良しごっこしてます小指さむいから
友達ごっこするのは嫌で輪を抜ける
働けるっていいなコロナに教えられ
ときどき嫌になってときどき好きな人
仲良しの振りがだんだん重くなる
猪がお鍋になって和ませる

大阪市　横山里子

飼い犬に吠えられました黒マスク
越してきた隣の素顔見ていない
三密になれて人混みがこわい
おうちご飯エンゲル系数高くなり
思い出の闇が蠢く家ごもり
お薬手帖の重さ命の重さ

箕面市　出口セツ子

間違いを絶対認めない夫
体力も足も弱くになる自粛
優しい子二人居るから生きられる
子はちゃんと祝ってくれる誕生日
思い出が消えそう遺品手をつけず
オンラインできずメールでする会話

弘前市　稲見則彦

ねぶた囃子聞こえぬ夏のもどかしさ
冷房も暖房も皆コロナ製
父さんを通せんぼしちゃいけません
ゴーヤ植えコロナを避けているのです
国中がオリンピックのはずだった

弘前市　今　愁女

春のさくら林檎の花も見ずに夏
籠もり日の里山恋し真夏日は
春はなし生きられるのか夏の暑さ
昼は寝て夜は星空語り合う
十六夜の月との逢瀬楽しみに

塩竈市　木田比呂朗

夏休み今年は無理ときたメール
外出の自粛に休肝日の無視
カラオケのマイクが夢に出て来そう
忠告にすぐ反論の悪いクセ
憧れは白いマスクというカラス

男鹿市　伊藤のぶよし

大丈夫うまい涌き水飲める郷
空耳だろかアジサイの私語うるさすぎ
身の丈を知り二番手を追う
失敗は失敗いい薬でした
ナマハゲも仮面をかえる夏がくる

横浜市　川島良子

若き日の記憶をたぐるレモネード
面会も途絶えたままで夏になる
柔らかな瞳優しい嘘が好き
一句詠むここから展開するドラマ
コロナ　コロナ　君の正体掴めない

横浜市　菊地政勝

コロナ禍に頼みの医者もいのちがけ
神様も見えない敵に音をあげる
時事川柳いっぱい浮かぶ不穏な世
自粛して縁切れたまま縄のれん
保険には入れぬ歳で不調気味

さいたま市　星野育子

アラートで赤い都庁舎仁王立ち
下り坂になり人はやさしくなる
暗黙の中に順位がある格差
今はまだラストダンスは踊れない
朗報に泣いた笑った甲子園

上尾市　中村伸子

紫陽花はいつも気付かぬうちに咲く
ストロベリームーン見そこねた六月
コロナ収束祈る花火が空に咲く
マスク越し確認できた目の力
手を洗おうマスクしようはコロナ後も

老猫を腹の呼吸でたしかめる
考えているのに頭がらんどう
威張るなやコロナ人には知恵がある
巣ごもりで友よ私も肥えたのよ
巣ごもりでジャージーに甘やかされた

朝霞市　前田洋子

ドラマ化で故郷湧く日待ち遠し
故郷のほたるいずこへ消えたやら
ごめんねが言えず失う友ひとり
廃屋がお隣さんを遠くする
介護士は減量こそが幸せと

日高市　根岸方子

娘の宇宙物語から科学へと
人気者になる前からのカピバラ派
尺取虫空への足がかり無くて
一騎討最後はやはりそうくるか
新しいフェーズ響きは未来型

東京都　川本真理子

亡き人をふと思い出す誕生日
解除なりうれしく弾むランドセル
日本人真面目できれい好きという
うたた寝のはずが西日の中にいる
パソコンスマホなし友と長電話

八王子市　川名洋子

今年またシャクナゲははの顔で咲く
原因の解らぬ八つ手枯れはじめ
グリーンアスパラ十年つづく庭の隅
ジュウヤクの花の白さに憧れる
免疫力上げる玉葱メニュー増え

富山市　島ひかる

コロナ禍も田舎は気楽野鳥啼く
日程はずっと白紙の交通費
天国に行くまで何度立つ厨
天国に行く日はバッハ聴きながら
ライバルはもういりません生きるだけ

可児市　板山まみ子

買物へ帽子にマスクサングラス
貰うまで信用できぬ給付金
関わりのない争いに口出さぬ
禁止され余計行きたくなる飲み屋
人さまに迷惑かけて生きている

愛知県　早川遡行

賑やかに花を飾って巣に籠もる
黙黙と暮らし孤独に慣れてくる
自粛生活体重だけが増えてくる
健康器具買って足腰叱咤する
電報のようなメールが息子から

犬山市　金子美千代

犬山市　関本かつ子

駅ピアノ矢張り嬉しい日本製
空港ピアノイマジンを弾く老紳士
大学へ巣立った孫はすぐバイト
両親へ孫が巣立ちの置手紙
スーパーを往復だけはまだ続き

奈良県　安福和夫

巣ごもりをテレビで癒やすことできず
イベントのリモート出演もうひとつ
人見えぬ中で句作りに呻吟
奈良の鹿せんべい離れで快便
覚悟きめウイズコロナの長旅へ

奈良県　谷川憲

人種差別民主の国の根は深い
愛犬の死いつもいた場所に目がいく
生きてる証と年会費振り込む
歴史に見るパンデミックは二波三波
愛犬と歩いた道を日々なぞる

奈良県　中堀優

振り向いてくれる地蔵をさがす旅
選ぶという難しさ知る独り立ち
前向いてりゃノラリクラリもいいじゃない
どの花も散り際という時期がいい
怒らない丸い心の爺だから

奈良県　長谷川崇明

最近の地球うるさいことばかり
無神論しかしコロナは神頼み
カードです初おしゃべりはレジの人
断捨離を妻はせかせる自粛中
自粛明けベルトの穴が足りません

奈良県　渡辺富子

忘れ上手笑い合ってる午後のモカ
行間から老いの悲しみにじみ出る
アングルを変えても老いに突き当たる
弟の末期ガン知る五月闇
波よ波さらっておくれ哀しみを

奈良市　宇賀史郎

日本に黄砂北京の民知らず
YES　NOあえて答えず微笑んで
いきなりの出会い名前の出ぬ会話
道場の竹刀が響く夜八時
将来はままよコロナ禍の対応

奈良市　加藤江里子

もういいかい三密回避まだ続く
小さきものに心惹かれる自粛の日
足音も声も静かな登校日
巣ごもりが柵さえも忘れさせ
自粛解除夫は嬉々と家を出る

奈良市　高橋敬子

日焼け止め兼ねて大きなマスク付け
解除宣言夏のブラウス欲しくなる
リモートに磨きのかかる上半身
通学路子の声戻りほっとする
地元民には軽い礼さえしない鹿

奈良市　辻内げんえい

コロナ祈願に県内神社はしごする
3ケ月ぶりに乗った電車は空いている
県境に住み散歩はいつも県跨ぐ
現役でしてみたかったテレワーク
自慢話聞いてくれるの妻ひとり

奈良市　山本昌代

休校の孫に揉みくちゃされる昼
どっこいしょ孫と遊んだ脳回路
何のその娘らと互角の息遣い
耳元の一言明日へお膳立て
23時ニュース見ながら床に就く

生駒市　飛永ふりこ

信貴山の緑しゃきっと夏の顔
出かかった言葉奥歯で食い止める
かなわんなマスクはずせぬ玉の汗
万歩計ランチメニューが弾ませる
所作ひとつ京の芸子の嫋やかさ

香芝市　大内朝子

薫風へ師の面影をまた偲ぶ
人間の生とペチャクチャ喋りたい
夕焼けは亡母の懐癒やされる
自粛する心海月に憧れる
モノクロの暮らしに艶っぽい電話

香芝市　山下純子

巣ごもりに料理の腕を上げました
ステイホーム主婦に戻って手が荒れる
三密避け心も窓も開け放つ
外出自粛電話とメールフル稼動
宝物励ましあえる友がいる

和歌山市　上田紀子

その先をまだ抜け出せず梅雨になる
人情に触れたハートがまん丸い
本閉じて疲れた脳を休ませる
火の輪水の輪潜って未来不透明
挫折して人間らしい温か味

和歌山市　柏原夕胡

四コマ目辺りで幸せになろう
日溜りの縁側猫と奪い合い
立ち向かう精神力は持っている
当たり前の事など何もない平和
反面教師にはなってくれました

和歌山市　喜田准一

解決へ頭が冴えるいい男
朝ドラに昔の恋が甦る
終の章ゆとり残して五七五
チャンスだと見たか素早く攻めて来る
納得が行くまで二人直談判

和歌山市　坂部紀久子

緑々々我が庭のファンファーレ
これ程のきれいな空に何故コロナ
人生逆転今日も子供に叱られる
結果まだ出せぬ八十路の道程よ
私一人消えれば更地だけ残る

和歌山市　土屋起世子

休む理由考えなくてもよい休み
休園の曾孫手洗い監視する
客用の器で孤食なぐさめる
梅雨晴れ間馴染んだ店が消えていた
アナログ人だけど懸命生きている

和歌山市　福井菜摘

人が好き門戸はいつも外開き
眉きりり描き新たな風を呼ぶ
予告のない人生だから楽しめる
まだ翔べる手足ゆっくり捻子を巻く
傘寿越え父母の知らない道を行く

和歌山市　古久保和子

整理整頓こっそり捨てるものばかり
日本語を忘れてしまいそうメール
民放のニュース三時のティータイム
缶ビールおひとりさまの音と泡
お手付きもあって生きざま面白い

和歌山市　堀冨美子

夏の陽のマスク私を喋らせぬ
体温計今日も私を保証する
ウイルスが娘との逢瀬を遠ざける
ストレスが午後の間食倍にする
呆けぬよう海馬を叩く日が続く

和歌山市　松原寿子

手作りのマスクで日々を切り抜ける
輪の中で聞かれて困ることはない
狭い庭花に囲まれ土と生き
馬鹿でいいひたすら祈り鶴を折る
花々に満たされ籠る日々を織る

岩出市　藤原ほのか

ウイルスに負けないように塩をまく
マスクして声だけ聞いて頷ける
コロナ禍で家族の意味を問い直す
一日を大切に生き舞い上がる
筋力をつけて歩幅を広くする

海南市　小谷小雪

影までも背骨のあたり小さくなる
自粛自粛空の電車の窓開ける
少年の未来を繋ぐ海がある
わずかでも今わたくしのできること
巣籠りの四月五月は分岐点

紀の川市　山東日出男

健康な人から学ぶ処世術
トランプにレッドカードを突き付ける
外出は何はなくともまずマスク
ロックダウンの街をメールがすり抜ける
肩で息している真夏日のマスク

橋本市　石田隆彦

登山道一期一会の花笑う
卒寿までやって見せます野良仕事
年一の出番に勇む武者振い
耳かきにのせるぐらいの夢を持つ
少しだけ借りたお金で友なくす

京都市　清水英旺

誕生日年々気鬱増してくる
いとおしく何度もなでる運命線
地獄絵に俺によく似た亡者おり
夏用のマスクが欲しい衣替え
何もせず遺憾ですます拉致問題

京都市　藤井文代

くしゃみひとつ今では視線どっと浴び
冗談ぼく本音を混ぜて晴らす憂さ
隣の犬マスクの私吠えまくる
コロナ禍にてパスポート手に無い予定
コロナ自粛寝て過ごすには長すぎた

長岡京市　山田葉子

自粛緩和待ってたバラに会いに行く
当たり前じわじわ変わる中にいる
週二回外出許可の自己管理
暇だから医者に行ったら満員だ
しなやかな糸で今日一日を織る

八幡市　今井万紗子

予定表みんなコロナでまっくろけ
この所バスも電車も乗ってない
老いの春脈の乱れが邪魔をする
食べ頃ですがわたしのハート如何です
誌上句会頑張る気力もろてます

大阪府　米澤俶子

夕焼けに通天閣はみどり色
外出の自由はいいな雲よ雲
つまずいた石にもらった神の声
充電に戻るお掃除ロボけなげ
ありがとうビタミン剤になる言葉

大阪市　磯島　福貴子

ハグは我慢友と再会距離おいて
新しい生き方せよとコロナ禍で
自粛解除埋まって来たぞ予定表
自家製の梅干かじり夏季躱す
語彙不足辞書道連れに四苦八苦

大阪市　井丸　昌紀

何曜日か分からないけど大丈夫
本当は紫陽花雨が大嫌い
専門家に紛れてにわか評論家
ＳＮＳは剣より強し
忘れてました川柳の作り方

大阪市　岩﨑　玲子

ステイホーム解けたらあれもこれもする
ステイホームすてきな本に巡り合う
脳トレは孫と時時謎解きし
健康はこのスニーカーと組んでから
亡母の歳なってわかったこの辛さ

大阪市　内田　志津子

ミニバンに採れ立て乗せて道の駅
自粛解除少し派手めの靴を履く
枝道を歩く私に千の風
予定表白紙のままで割烹着
アラームが点る私の羅針盤

大阪市　宇都　満知子

暑い日だったね突然のお別れ
早いものです今年二十五回忌
息子それぞれ四人家族になった今
あなたはきっと空の上から見てるはず
あなたに集う会えなかった孫たち

大阪市　江島谷　勝弘

爺ちゃんは怒りすぎだと孫がいう
コーヒーはどこで飲んでもアメリカン
コロナ禍で三食昼寝太っちゃう
コロナ禍でちょっぴり備蓄お小遣い
十万円何に遣うか思案中

大阪市　榎本　日の出

コロナにははまれば駄目よこの体
毎日を若い時代と同じ量
女の子育てて良いと今感謝
オンライン何時かパソコン使うだろ
コロナには気をつけてても貰いそう

大阪市　榎本　舞夢

春風と共にコロナが舞い降りる
三密禁止自粛生活強いられる
学校会社施設旅行と閉鎖され
六月は自粛解除で活気付く
都会は戻るマスク姿が闊歩する

大阪市　大治重信

菜の里に花を増やして蝶も乗せ
堪忍とつぶやいて行く墓参り
転びなや無理しなさんなと枕元
百までは生きていたいと預金見る
朝飯に妻がポロリと国訛り

大阪市　奥村五月

シングルの母の苦労で咲くサクラ
甲子園ビールカチ割り声もなし
夫婦岩嵐の時は喧嘩する
歯医者さんやばいと思う顔と顔
パスポートやばいコロナをお土産に

大阪市　笠嶋恵美

コロナ対策仰山買うて無駄にして
いやしんぼお腹が空くとへたります
アイスクリーム食後に食べてプチ優雅
機嫌良く動く手を見て有難う
老いたとて祈る事ならまだ出来る

大阪市　金川宣子

雑草の生きる力が向う見ず
腕振るう三度三度の孫の飯
父の日はなぜかスルーをしてしまい
医師からの断酒宣告受け入れる
ヤキモチもほどよく焼けばいい仲に

大阪市　川端一歩

口で絵を天才でない血の努力
スランプをやっと抜けたらコロナ禍に
こんな時も文化芸術後になり
切ないね夫婦ゲンカもマスク越し
言い勝って鏡にバカを叱られる

大阪市　近藤正

新入生登校したら夏休み
電車内スマホをいじる癖がつき
コロナとも癌とも共に生きる身に
習近平シルクロードの夢を追う
賭け麻雀検事総長棒に振る

大阪市　髙杉千歩

九十四歳まだ生きる気の服を択る
駄々っ子を見ない屋上遊園地
車椅子押してあげると満五歳
年齢だ年齢だと納得させて車椅子
冷暖房四季を知らない母娘連れ

大阪市　田中廣子

悲しみを心に秘めて天国へ
淋しさで心を広くさせました
足弱り歩く姿が情けない
三密で友と会えないもどかしさ
断捨離が進まぬ脳であともどり

伝わってこない首相の空気感
親切にされて益々孤独感
人間の匂いが消えて好好爺
勝手にせよは父の愛情だと思う
梅雨がきた膝痛腰痛お静かに

大阪市　田中ゆみ子

低頭をモットーにして生きてます
まだ元気大きな声で喋ります
つましくも鯖缶で良いひとり膳
羅漢寺の羅漢と遊ぶ小半日
住吉さんの由来で渡る太鼓橋

大阪市　津村志華子

音声は消して昔のテレビ見る
下戸ですと人の二倍は食べている
大丈夫ガン細胞も老いました
物忘れだけで急場は切り抜ける
静寂が怖くてラジオつけている

大阪市　寺本実

給付金孫の世代にまた負担
かと言って寄付する程の度量なく
サクソフォン自粛の孫の指疼く
意地悪な菌が貴方を遠ざける
穏やかな夫婦にコロナごときなど

大阪市　中井朋

3m欲しい夫とのディスタンス
皆マスク挨拶をする人が減る
何着てもマネキンと別物になる
しなければならぬ仕事に救われる
他人ならその頑固さも笑えるが

大阪市　原田すみ子

たこ焼きで済ます独りの夕ご飯
想定外が飛び出してきた玉手箱
諦めていないあたりへ貼る湿布
衣更え済んだし窓も磨いたし
終りから始まる朝の第一歩

大阪市　平井美智子

自然からの警告だろうウイルス禍
巣籠もりして楽しみましたチャップリン
人生に励ましくれるチャップリン
子の家族ビデオ通話で帰省する
コロナ禍を転じて期待新たな世

大阪市　平賀国和

イケメンも等身大を知っている
カップ麺いつも季節のトッピング
唇の動きも混ぜて喋る手話
乙姫の土産包んだレジ袋
オアシスに集う命の無限大

大阪市　藤田武人

大阪市　宮﨑　シマ子

夫とは行きたくはないディナーショウ
生きてるうちに宇宙船には乗れぬだろ
大切な物見つけても手が出せぬ
引越しても元の町医者頼りにし
大人でも夜店で金魚すくいたい

大阪市　山本　加お里

最後かも姉と手をとり離さぬ手
父母に似てわたしの歯ですありがとう
マスクせず近付かないで怖いです
わたしじゃ言う人からの電話くる
三密を守り茶花に癒やされる

堺市　奥　時雄

自転車は自信ないから捨てました
ママチャリのうしろに乗せて貰いたい
くいだおれいづもやそしてずぼらやも
ずぼらやのお手柄フグの大衆化
ずぼらやは昼定食もあったのに

堺市　柿花和夫

許されよ借り物じゃないわが命
湯上がりの天使を囲む三世代
わが妻のマスク姿も捨て難い
花時計きっちり夏を連れて来る
わが人生清く正しく腑甲斐なく

堺市　源田　八千代

自粛解除胸いっぱいに五月風
信頼する山中教授言うてはる
久々の孫さわやかな白い服
感謝感激牡丹芍薬百合が咲く
給付金税額納期間に合わず

堺市　齋藤　さくら

コロナ禍で尊い命思い知る
相談もうかつに出来ぬ羽はえる
好き勝手何を言うたか忘れてる
病気ですだけで済まないこともある
病院に命預けて早五年

堺市　坂上　淳司

芋蔓も食べ生き抜いた日本人
がむしゃらに生きた証しの向う傷
がむしゃらに生きてた頃が懐かしい
がむしゃらに稼いだ僕は若かった
がむしゃらに演じた僕は馬の脚

堺市　澤井　敏治

新鮮な空気ただよう四時起床
黙祷にたぎる思いの敗戦忌
先達を偲び見上げる雲の峰
生新な措辞が秘めてる訴求力
傘寿こえ新鮮味知る未知の日日

感動のこころがいつまでも若い
むかしなら燃えたであろう使命感
人間が新たな暮らし取り戻す
あのベルが別れだったに違いない
過去ひとつ自分の甘さゆるせない

堺市　遠山唯教

カメラが見抜くステイホームの幸福度
言い訳を整理しながらする遅刻
お買得チラシ選ってる朝の僕
ピカソみて脳の空気を入れかえる
忘れるという能力だけが伸びてくる

堺市　内藤憲彦

何度目のスタート地点師の句集
悪友と呼ばれる立場にたどりつき
負け犬の顔は妻子に見せられぬ
水飲んで水の味だと病み上り
君の割り箸もきれいに割ってあげ

堺市　矢倉五月

サプリマニア初回限定次々と
ブランドの傘は雨の日使わない
初孫へ8Kカメラ大出費
色艶は模造真珠が長続き
体裁にこだわる試し刷り五枚

池田市　太田省三

息子からスマホの返事素っ気無い
恙無い暮らし感謝の梅漬ける
可能性信じてまずは歩くこと
財産は無いが感謝の遺言書
眼科医の笑顔に自信頂いた

貝塚市　石田ひろ子

巣ごもりに見つけた古いラブレター
巣ごもり中古き映画にはまり過ぎ
巣ごもりにスタート切ったスクワット
ステイホームやってみました大掃除
ステイホーム手作りマスク大好評

河内長野市　大島ともこ

50年陽気な妻と2人旅
ウイルスが無けりゃ文句のない日和
孫はテレワークバアバは靴磨く
ライムライト泣かせてくれるチャップリン
あごのマスク忘れて上にもうひとつ

河内長野市　梶原弘光

扶養家族二十五匹のメダカたち
つつき合い追っかけ合いを飽かず見る
生きてるって素晴らしいねェあなたたち
がむしゃらに動けば涙乾いてる
多くのものもらったことに今気付く

河内長野市　木見谷孝代

河内長野市　黒岩靖博

コロナ禍で医療現場が疲弊する
何故アジアの死者が少ないコロナ菌
三密でストレス溜まり内輪もめ
マスクせず生活できる有難さ
代名詞だけで通じる夫婦仲

河内長野市　辻村ヒロ

週一でデイケアに行くだけの日々
自転車に油をさして病院へ
愛撫き酔わせてくれる赤いバラ
還暦は若かったなと懐かしむ
手を引かれ孫頼もしくなっていた

河内長野市　中島一彌

この風はどこから来たのどこ行くの
直球で言ってよ厭な遠回し
白黒をつけぬ生き方否定せず
吹っ飛んだ令和2年の春恋し
施設から母の近影届く幸

河内長野市　藤塚克三

自粛中のずぼらに打った句読点
対応が鼬ごっこで苦杯嘗め
難局を乗り切る知恵が浅すぎる
揉め事も笑いで包み波立てず
知らぬ間に悩みが消える呆けはいい

河内長野市　村上直樹

人の波絶えて新鮮戎橋
老犬の散歩に明日の身を重ね
追い越されまた追い越され諦める
謎解けてそのまた奥に謎の謎
練りに練って遺書はひと言「ありがとう」

河内長野市　山岡冨美子

賑わいは街に道路にデパートに
通勤車ようやく密になってきた
車内みなそれでもマスク外さない
もう少しほんの一歩にきっと罠
閉めないでくれて嬉しい花屋さん

岸和田市　岩佐ダン吉

踏み締めた大地信じていいだろう
反論を浴びてじっくり温いもの
寡黙だがここ一番は前に出る
傷に触れる言葉を避けてぎこちない
隅っこがなかなか筋を譲らない

岸和田市　宮野みつ江

コロナ禍に鳴らぬスマホと猫わたし
三密になりようもなし猫わたし
それなりの明日を思う夕焼ける
梅雨入りヘイソヒヨドリの甲高く
入梅宣言と同時に豪雨警報と

四條畷市　吉岡　修

なにごとも二人で決めたのはむかし
適当に吐かぬと腹がパンクする
ラストダンス次はもう無い予感する
思いきり笑ってみたいのが仁王
コスト高の一番は社長あなたです

吹田市　太田　昭

年功序列そろそろ黄泉を予約する
抽出しに昔の嘘を閉じ込める
句読点打ち毒舌の棘を抜く
一日一善やっと仏の顔になる
オーケストラを大胆に斬る佐渡裕

吹田市　野下之男

西郷どんの最後はあまり触れたくない
台湾の子らと仲良くサトーキビ畑
よくやった写真の妻が笑っている
見た事ない高いビルだよああつらい
クーラーに教えてもらう事もある

高槻市　片山かずお

傘傾げスルリと躱す路地の知恵
雨上がり借り物の傘重くする
並の人優しそうねと褒めておく
この先は愚痴だと話すのを止める
隅からの大声会議踊らせる

高槻市　島田千鶴子

書棚整理古い雑誌に座り込む
打ち明けてひとりでないと知る安堵
コロナ禍にご近所さんも遠くなる
夏来たる薄い衣が干してある
カタカナ語溢れ海馬を刺激する

高槻市　初代正彦

板についた自粛の紐を緩めまい
明後日になれば私も光ります
直筆の封書いただき畏まる
水無月の猛暑にキュッとワンカップ
コロナ禍の球児励ますプレゼント

高槻市　杉本義昭

一隅を照らして逝った日本医師
二人三脚よく頑張った横田さん
終い風呂ぽかんと命休ませる
破壊された自然神話が遠くなる
末席の雑草にある自己主張

高槻市　富田美義

初孫の面会閉ざす新コロナ
ヤッホーと孫子が叫び山青き
コロナ等に狭い病室追い出され
善人の装いなのかマスク達
桜散り世界を変えた新コロナ

八月の宝物です青い空
お手本と教えてくれた父の背な
旅に出てタンス預金が気にかかる
お日さまのエールで育つこぼれ種
年金やまだまだ減るかこの先も

高槻市　富田保子

巣ごもりの外はカラフル夏舞台
マスクさえあれば何とか化けられる
ウイニングラン馬も冷めてる無観客
登校日二重丸するカレンダー
コロナとの共存覚悟ニューライフ

高槻市　原洋志

墓参りまでも邪魔するコロナ菌
マスクして互いに迷子する夫婦
心配は飲み過ぎだけと医者は言い
一万円当たって二万円おごり
夫婦共音痴で特に困らない

高槻市　松岡篤

梅雨の入り苔むす庭にひとり立つ
鏡の中で美人になってゆくわたし
友が逝きたっぷり泣いた風呂の中
しんどさを隠す派手目のイヤリング
ペディキュアをすれば足取り軽くなる

高槻市　安田忠子

止めてみることを学んだステイホーム
解除後はそっと手を出し足を出し
行って来ますパパは二階へご出勤
さあ開店張り切っている招き猫
三歳が今日はお利口何かある

豊中市　池田純子

ステイホームコピーのような日々送る
金メダル数えていたらコロナ来た
解除後に社会そろりと動き出す
ワクチンを今か今かと待つ世界
妻と僕コロナ前からディスタンス

豊中市　上出修

小さいマスク安倍さんだけがご満悦
マスク縫うだいじな人を想いつつ
アベノマスクきっと付けない安倍昭恵
嘘つくのが下手な私の長い舌
私にも春の野菜も強い灰汁

豊中市　きとうこみつ

せっかちにもゆっくり効いてくる薬
電線では隣を空けて鳴くカラス
練り上げるほどに進まぬ遺言書
のんびりと見えて覇気あるシテの舞
夢に出た人とばったり会うまさか

豊中市　藤井則彦

豊中市　松尾　美智代

振り返ればいくつかあった崖っ縁
コロナ禍に四国が遠い墓参り
田舎に籠もり一人で散歩欠かさない
弟が兄 姉 私おいて逝く
喜寿すぎて時計の針のなお早く

豊中市　水野　黒兎

ウイルス去れワインの栓をポンと抜く
酒飲んでスイッチオンとオフの人
傘寿過ぎなおも悟れぬことばかり
遺言もつい七五調出てしまう
未熟さを初々しいとほめられる

富田林市　片岡　智恵子

さくら散る来世を信じ切りながら
五分間の花火師の愛ありがとう
生きる手段さまざまコロナを避けて
眼を閉じれば逢えた人遠くへゆきぬ
遊びから水の深さを知ってゆく

富田林市　中村　恵

達成のよろこび体突き抜ける
こだわりを捨てると多数派のひとり
対極でバランスとっている阿吽
ずぶ濡れの言い訳雨脚が速い
私がわたしを貶めてはならぬ

富田林市　山野　寿之

ちびた鍬遣い込んだり二十年
桜去り静かな花見呼ぶさつき
朝堀りの筍届き木の芽和え
コロナ景気郵便局に長い列
おはようのマスクマスクの目が笑う

寝屋川市　伊達　郁夫

ひまわりが汗にまみれて立っている
諦めぬたったひとつの夢だから
温かい情けに腰をかけている
リハビリの歩幅で雑草を愛でる
神様の都合で今日も負けました

寝屋川市　冨山　ルイ子

不眠症断捨離をする二時三時
不眠症友に手紙を二時三時
不眠症マスクを作る二時三時
不眠症二時や三時に塔誌読む
不眠症廊下を散歩一時間

寝屋川市　平松　かすみ

コロナには魔法使いも困り果て
淋しいなイコカも欠伸しています
六月にアベノマスクが届かない
腹巻きの温いお金がなつかしい
いざ用に太いローソク五・六本

寝屋川市　森　茜

当たりまえのことつくづくとありがたい
自粛中たくさんはがき書きました
妹が元気になった誤字脱字
不完全燃焼らしい長電話
考えあぐねて空を見上げている　ぽかぁん

羽曳野市　磯本洋一

七福神茶の間に集めコロナ除け
商売も笑顔で迎え声控え
残る世は感謝感謝で送る日々
四季咲きのバラ訪ね来て仏壇へ
卒寿まで気ままを許す妻が居て

羽曳野市　宇都宮ちづる

知人逝く他人事だったコロナの死
どうせマスク眉だけ描いてお買物
都知事にも負けず可愛いマイマスク
ONとOFF切り替える程仕事ない
えんどう豆一年分を旬に買う

羽曳野市　徳山みつこ

万緑のグラデーションに身を濯ぐ
前向きにとらえストレス溜めません
コロナまで加わりました政争に
ヘソ曲りは立派芯のある男
助け合いお隣さんも隣国も

羽曳野市　藤原大子

花は咲き鳥鳴き人は閉じこもる
たわいないお喋りしたい自粛中
バラの香りマスクはずしてそっと嗅ぐ
100歳の私へ残す今日あした
嫌われているとカラスは思わない

羽曳野市　三好専平

コロナ禍のさ中階段からころげ落ち
笑顔まで打撲の傷に似てきたか
コロナ菌ウラの社会が好きらしい
いくたびも死をくぐりぬけ生きてきた
こだわってこだわらないという悟り

東大阪市　北村賢子

生き延びてコロナウイルスめぐり遭う
家ごもり朝昼おやつ晩ご飯
終息の明日へ耐えている自粛
故郷の友電話をくれるコロナ禍
巣ごもりの日日こころ触れ合える便り

東大阪市　佐々木満作

プラス思考昨日のミスは忘れ去る
一端の顔して見得を切るゲスト
反骨の欠片も持たぬ天の邪鬼
投句より呼名が響く句会場
柳友に会えぬ邪険なコロナ菌

枚方市　丹後屋　肇

消毒撒布観光ガイドもろともに
二波三波警報アラート鳴り止まぬ
天竜寺の門びっしりと閉じたまま
百年目のパンデミックに遭う卒寿
ワクチンに命運賭ける凌ぎ合い

枚方市　藤村亜成

願いが叶うエレベーターに乗る如く
老化が進み優しさに飢える
疫病へ蛹のように閉じ籠もる
不都合な真実述べぬマスメディア
死の輪郭おぼろげながら見えてくる

枚方市　山口弘委智

子との距離年年とおく新学期
白という色の力はゆるぎない
渾身の昭和平成生きぬいた
多忙こそ生き甲斐となる母の背
還暦も古希も序の口仕舞風呂

藤井寺市　鴨谷瑠美子

電子辞書から艶めいた言葉出る
憎み合うことになるから愛さない
見逃してあげよう朝の蜘蛛だから
ひまわりが赤や白なら落着かぬ
コーヒーが濃過ぎて話聞こえない

藤井寺市　鈴木いさお

呑ん兵衛とあんたに言われたくはない
反省はするがお酒はやめません
酒のない食事は義務で食べている
もう免許返納せよと天の声
鑑定に出したい壺があるのです

藤井寺市　吉田喜代子

引算の命に手足まだ動く
コロナ休止ご近所さんと花談義
畑仕事気付けばこれはスクワット
糠床の用意万端ナスを待つ
暑い日は拭き掃除して大の字に

松原市　森松まつお

自粛警察何とも嫌な響きだな
値崩れをした頃やっと来たマスク
巣ごもりへメニューの数が足りません
よく笑う妻で助かる自粛の日
今日もまた通天閣は緑なり

箕面市　大浦初音

一日に一度は心から笑う
めぐり会う本は心の糧となる
飲み会が終れば主婦の顔になる
一日は長い人生は短い
隠してた角もつき出し五十年

世界中コロナとんでる自己管理
日々新た残り時間は五七五
銀河にはあなたがいます手を翳す
花筏のせてください銀河まで
白地図にわたしの世界走りだす

箕面市　酒井紀華

自粛明け先ずはスカッと髪を切る
賑わいが嬉し恐ろし交差点
体操の再開シニア活気づく
熱中症コロナにマスクするしない
クリーニング髪一本のミステリー

箕面市　広島巴子

崖っ縁コロナにもがく小商い
広角打法うまい女房に隙がない
球児らの涙に折れた甲子園
趣味の数ビタミン剤にして傘寿
百歳時代終着駅は程遠い

八尾市　寺川はじむ

また会おう　またはとてつもなく遠い
もったいないもったいないとしまいこむ
自粛要請しても雑草知らん顔
仲よしがコロナ疲れで仲違い
胸はって今ひきこもりですと言う

八尾市　村上ミツ子

速報に球児の夏が甦る
若き棋士つばめ返しの駒で勝ち
コロナにもめげずすっくと花菖蒲
旅延期つもり貯金の使い道
広島忌合わせて祈るコロナ禍を

八尾市　山根妙子

コロナ籠り行き処ない虎ファン
大阪弁でぼやくと一寸元気でる
不安と期待心はいつも忙しい
葉桜が五月の風を呼び寄せる
立ち話だまって聞いているカラス

神戸市　上田和宏

客五人バスの採算考える
ウイルスに閉じ込められる五十階
言いなはれ法に情けはおまへんで
雲見てる横で一人でしゃべる妻
もう少し座っていよう青葉風

神戸市　奥澤洋次郎

ふわりふわり風に行き先聞いてます
もういいかい聞けど答えぬコロナ菌
青空がもっと生きろと背を押す
老眼鏡はずし遠くの夢を見る
予定表書けばうなずき笑う妻

神戸市　敏森廣光

神戸市　冨永恭子

暑さ増し磨きがかかるおじさん化
雲水の修行番組寝てながめ
凜としてつましくあろうカキツバタ
むりやりに言わせた感の褒め言葉
バラ満開ドクダミに目が止まります

神戸市　能勢利子

ステイホーム妻は全然怯まない
ステイホームすぐにウロウロする夫
ばあちゃんは家でもマスクつけたまま
小四は手を洗う時歌うたう
句会まで首を長くしスクワット

神戸市　山口光久

浅知恵のその場凌ぎが仇となる
飛び乗った車輌はスマホ競演中
道草を食って雑学掻き集め
無駄じゃない流した汗の応援歌
決断をさせた言葉へありがとう

神戸市　山口美穂

どのマスクにしようか鏡に問うてから
風邪花粉のマスク堂堂歩きます
自粛じゃない脚が言うときかんので
口だけが元気でたわいない電話
電話で昨日喋った姉の訃報受く

神戸市　山﨑武彦

うるそうてかなわん妻がいる安堵
尻尾ふるためにしっぽがあるのです
わたくしのハートに小石投げた人
半額に弱い妻だがいとおしい
ウエストは何処にあるのと孫が聞く

明石市　糀谷和郎

散歩から始める今日のプラニング
今日のこと明日は忘れているきっと
アバウトもいい風まかせ波まかせ
生きているせいか台詞が生くさい
ウイルスに見染められないようマスク

尼崎市　近兼敦子

ポケットにぎゅっと握った嘘一ツ
プライドはもたないほうが楽でいい
とぼけ顔そんなとこまでそっくりで
初孫にはじめて見たな甘い顔
スマホ置き話聞いてよ息子たち

尼崎市　永田紀惠

全没にだんだん慣れて行く怖さ
日本中マスク仮面が闊歩する
嬉嬉としてメディアが撒いているコロナ
文春に追われてみたい人もいる
越えられぬ私を映す水たまり

尼崎市　藤岡りこ

コロナの後に熱中症が待っている
脳トレに子供クイズが丁度いい
こどもの日子らの声なくカラス鳴く
久し振り力んでマスク縫うミシン
指一本の怪我で全部がぎこちない

尼崎市　藤田雪菜

血圧が高いと声も高くなる
ガンバレと言っているよなバラが咲く
思いがけない出合いをくれる散歩道
たらの芽が届いて里を恋しがる
眠っていたミシンを開きマスク縫う

加西市　山端なつみ

新型コロナカタカナ言葉増やし過ぎ
ここは日本カタカナ語より日本語で
ソーシャルディスタンスで漫才出来ぬ
年末の第九みんなで歌えるか
コロナ後は三密避けて故郷へ

川西市　山口不動

旅したきところ増えつつ歳をとり
ふる里の友の訃続く夏隣
鶯の声遠くなる昼寝かな
おまえらの思惑通り死ぬものか
安倍首相アベノマスクで通してる

三田市　足立つな子

限定品はやばや届くお中元
田舎料理お粗末なんて言わせない
二波がこわくて闊歩できないネオン街
コロナ禍は深刻よりも真剣に
街路樹の五月の空に匂い立つ

三田市　上田ひとみ

どんと来い負けないつもりだったのに
寡黙なりただ美しい寡黙なり
目を見て話す手を握る抱きしめる
鈍感ドンカンどんかん目を覚ませ
こんな時こそ父ちゃんの力こぶ

三田市　大西重男

背伸びしてやっと届いた孫の肩
街中で皆の目線はノーマスク
どの局もコロナ一色ワイドショー
自粛明けどうぞと言われ当ても無い
外出の自粛で増える酒タバコ

三田市　尾﨑一子

仏様里の新茶と豆ごはん
孫の友みんな元気に社会人
君達をみんな覚えている客間
手術待つ息子しみじみ亡夫に似て
ウイルスで様変りする暮らしぶり

三田市　九村義徳

何時からか舌に仏も鬼も住む
孫脱皮広い空へと飛び立った
弁解に疲れて貝になりました
おしどりの夫婦を演じ疲れ切る
入り婿にやっと合格長かった

三田市　多田雅尚

動画見てワハハウフフと暮らす日々
ステイホーム昼寝の時間長くなる
他府県を跨がぬように乗る電車
総合的判断便利な言葉
世界的指導者未だ現れず

三田市　谷口修平

噴火する兆しか今朝の妻無口
父の座に父がどっかり居た昭和
一波乱あって絆が強くなる
ゆるキャラの流れる汗を子等知らず
花道にリストラという落とし穴

三田市　野口真桜子

舷灯ともすレッドカードを背負いつつ
冴える六感巨大地震がきっと来る
芽の時代将来の夢てんこ盛り
口達者嫉妬と愚痴をくりかえす
会いに来てくれたのですか流れ星

三田市　福田好文

三密を守るデートが続かない
引きこもる術をニートに教えられ
五七五趣味で良かった引きこもり
勝手気ままに生きた男が知る孤独
秒針の余命どんどん食べる音

三田市　堀正和

後期です不要不急の用ばかり
自粛して落語で一人笑ってる
三食がちゃんと出てくるアリガトウ
来し方をしみじみ語る自粛の夜
スニーカー厚底ピンク買ったけど

三田市　松本ゆかり

さなぶりも死語に早苗田水ひかる
給付金知ったかスマホが壊れます
新茶飲む旨味に梅雨の気配して
閉じこもる人いて庭の白いばら
昼食べた鯖の匂いを身に纏う

三田市　村田博

暇持て余しドタバタドタと締め切り日
目立つのが嫌で順番替えてみる
コロナ禍の我慢で酒量増えました
隠すから探す話の裏の裏
電車乗るリュックに自粛詰め込んで

高砂市　松尾柳右子

2メートル開けて収束待つコロナ
施設での入浴ありがたい老後
元気よい姉の電話は手厳しい
遠慮ない娘夫婦に感謝する
水やりもせぬ坪庭に花が咲く

宝塚市　丸山孔一

魔女かもね潤い満ちたあのルージュ
カラスには夜の世界は無いらしい
有馬川人影も無く躑躅咲く
有馬の湯人恋しいと泣いて湧く
高層マンションあんた停電どうするの

丹波篠山市　北澤稠民

農良仕事来年もまだできるかな
夢ひとつ追いかけながら生きている
待合室生きる執念皆もって
今米寿あとの命は儲けもの
使いすぎ貧乏神に笑われる

丹波篠山市　酒井健二

咳をする人は睨まれ下を向く
バンカーにこびり付いてる僕の影
今さらに媚びは売らない売り切った
ｉｆｉｆで今年半年暮れました
密避けてフーテンやってやめられぬ

丹波篠山市　長谷川善輔

また書こう三日坊主の終活日記
パスポート眺めため息若き日よ
日だまりでお餅のように伸びる猫
景気悪し新装ビリケン困り顔
ボーッと生きボーッと死んでも己の任

西宮市　緒方美津子

できる事一生懸命することに
この急場知恵がつぎつぎ湧いてくる
父の口ぐせ貧乏人は夏がいい
野仏ポツリ紅葉まつりを待っている
孫達と歩くとやせてゆく財布

西宮市　亀岡哲子

刈られても負けずミニバラ天を指す
南十字がきれいと葉書着いた切り
お三時が欲しいばあちゃん孫曾孫
誰か来る今日は第三日曜日
経済を廻す役にも立てません

西宮市　福島弘子

幸いにもコロナを知らず逝った父母
お互いの本音がぽつり家ごもり
気兼ねない散歩もマスク手放せぬ
ブルーベリー十粒にかけるプランター
雑草もピンクの小花除けて抜く

意地張ったあの一時が命取り
ＡＩはコロナ情報無く静か
右往左往乱れる心生きている
地球には人の非情が満ちている
新緑にマスク外して香り飲む

西宮市　福田正彦

大丈夫いや大丈夫でも不安
令和二年歴史に大き一ページ
インタビュー微妙に編集されて載り
スマホ見て電車の客は虹を見ず
走れ走れついて来いよの世の流れ

南あわじ市　萩原狸月

ステイホーム写経で心整える
あれかじりこれかじりしてボケ予防
官邸に蔓延る悪のクラスター
老けたなあ鏡の僕が言っている
我が心初夏の緑に洗われる

広島市　岸本清

梅雨しとど紫陽花菖蒲皆無口
あともどりしたくないのでマスクする
和やかな暮らしに感謝茄子漬かる
娘とライン終ってからの静けさよ
八月のヒロシマ泪乾かない

竹原市　石原淑子

よく遊びよく遊び春が来たんだよ
ある時は妻の長所をほめておく
変わったのは私一人ぽっちなの
パプリカの歌が私をとりかこむ
五十年同居のピアノありがとう

竹原市　岩本笑子

夢舞台球児夏の灯甲子園
手作りのマスクは貴重友からの
ひばりを偲ぶりんご追分深夜便
独り居の友は専らラジオだけ
迷ったら仏間の笑みの母に聴く

岩国市　上村夢香

一強の政治へ国が歪んで来
空腹が何にも勝る調味料
昭和一桁の絆はゆるぎない
腹八分ではすまされぬバイキング
日本の未来眉間に皺が増え

宇部市　平田実男

蝶愛でる毛虫潰した足の裏
意を決し今日は爪切る愛し猫
猫語しか話していない自粛の日
乳を飲む仕事忘れぬ拾い猫
ひと季節飛んだ夏日のマスク汗

下松市　有海静枝

防府市　坂本加代

発散の仕方いろいろコロナ禍に
平凡にメリハリ付けて美をつくる
ウ～ムウ～ムと脳みそが暴れています
種明かしされて萎んだ片思い
捨てきれず倉庫の奥に父の和書

鳥取県　門村幸子

丹念に「中村哲」の記事を読む
うつくしい思い出になるまでの距離
アンケート実年齢を記入する
耳鼻科歯科眼科通えどまだ元気
褒められて素直に力湧いてくる

鳥取県　竹信照彦

おそるおそる暮らしているのがヒト科
マスクして帽子かぶってのっぺらぼう
丁寧に消毒中か来ぬマスク
マスクせず出入り自由は畑だけ
三密を避けて句会の再開だ

鳥取県　細田裕花

控え目に雑草の花自己主張
久し振りの外食勇気出して行く
マニュアルを踏んでいたのに転けました
恋人はアジサイ色のハートです
まだ来ないマスク道草しています

鳥取県　山下節子

友のエール一歩踏み出す気をもらう
そっくりと出来ぬレシピのままなのに
新学期元気に揃うのが一番
後少しあなたの知恵を借りてみる
不意の客妻はなんなくおもてなす

鳥取市　池澤大鯰

夫婦仲今のところはベストカップル
主夫卒業免許返納止むを得ず
どっぷりと季節にとけこむ散歩する
知りびとと出合うことなし散歩する
なりゆきまかせ深入りしないでいる

鳥取市　奥田由美

コロナから天井知らず光熱費
だからだね強行させるカジノ法
村半分同じ名字の家探し
蕎麦を打つ手が頼りない三代目
二時間でも待たせる人の待ちぼうけ

鳥取市　加藤茶人

勝てぬはず泣く子と妻で四面楚歌
人様の不幸が好きなワイドショー
貴女の目借りて試歩への息遣い
値を聞いてさすがに美味い舌鼓
嘘吐きは昔泥棒今総理

鳥取市　岸本孝子

老い二人同じ会話で巣にこもり
二波三波あばれないよう祈ります
休業の貼り紙消えて気も晴れる
二千万なくても揺れず生きていく
鯖を読む歳でもないが若く言う

鳥取市　倉益一瑤

背を押してもらえば跳べた水たまり
深入りをしすぎ重たい荷を担ぎ
知事さんの鉢巻本気だと思う
すき間風吹いて呪文がかけやすい
巣ごもりのドアを叩けば冬の音

鳥取市　棚田大

難題はコロナ理由に逃げて行く
不安な世チェンジするのはあんただよ
大人こそ教育力問われるよ
飲み会で三密忘れべろべろに
忘れぬぞコロナの喝をいつまでも

鳥取市　谷口回春子

里帰り京都訛りの孫三つ
センセイと呼ばれ振り向く誰だっけ
爺こっち婆はあっちと孫の顎
亡父と亡母足して二で割る今の顔
身の回りマスク美人が無礼講

鳥取市　永原昌鼓

ウォーキング止まると汗がドッと出る
ふる里はコロナ流行らぬ田舎町
冥土への道ゆるゆると近くなる
長風呂を案じて覗く人もなく
あと少し描く人生ままならず

鳥取市　中村金祥

一人でもマスクしている農作業
介護受け有料だって有難い
パスワード打つたび君の顔浮かぶ
回避したつもりの役が板につき
そこは春長いトンネルただ歩く

鳥取市　夏目一粋

線香花火に生きざまを教えられ
野の花の生き甲斐風雨かも知れぬ
つつましい暮らしは絶え間なく流れ
貧乏に耐える力は持っている
線引きを水と油の人がする

鳥取市　副井ゆたか

免許更新認知検査を掻い潜る
図書館で乾いた脳に水をやる
マドンナの吐息がかかる際に居る
懐メロが昭和の私呼び戻す
帰省せずＬＩＮＥしながら籠り酒

鳥取市　前田楓花

戻らない一瞬だから価値がある
きみの隣にいるとだんだん甘くなる
イエスマン殿の回りに寄ってくる
またいつか会えると信じ縫うマスク
どくだみは地下で繋がる大家族

鳥取市　山下凱柳

一期一会積み重ね生き喜寿祝う
奥深い柳に魅せられ日に十句
外出禁止ゆったりできたのは三日
オンライン飲み会時間エンドレス
眼力が試されてますマスク越し

鳥取市　吉田孔美子

ついで以上の愚痴聞くも務めだと
立ち直った恩師の幸便であった
豆大福に失恋の涙止まらず
督促状読むべきは同居人 ハイ
着せ替え人形を真似ている自粛

鳥取市　吉田弘子

ブラタモリ思い出偲ぶ旅気分
たまの夢話す間もなく消える夫
初物は仏と賞味自家野菜
予報士を信じ段取りする畑
サングラスにマスク驚くことでない

倉吉市　猪川由美子

森友自死も拉致も吹っ飛ぶコロナ禍だ
ペンの力人をも殺し恐ろしい
物々しいガード辟易対コロナ
コロナとは当分共存するのね
埃目立つが見えぬ事にし身を休め

倉吉市　岡﨑美知江

草取りに負けてしまった足と腰
三つ聞き一つ忘れて波にのる
情報の海に溺れた人の群れ
青い鳥さがしに飛んでいったまま
火の鳥をやさしく抱いて風を読む

倉吉市　田中紀美恵

庭の花芽吹き楽しく草をひく
考えて物言う人はやさしさが
食べる事忘れた母に白湯そそぐ
生きるためおいしく食べて米寿まで
郁夫展平山ブルーにくぎづけだ

倉吉市　牧野芳光

仕事ならまだある草は伸びていく
知らぬ間に縛られている葛の蔓
コトコトと記憶のピース手繰り出す
山小屋に籠りコロナを遠く見る
僕を見て笑った人についていく

倉吉市　山中康子

世界中火になり騒がせたコロナ
老いの広場にすんなり解け込もうか
一部始終打ち明けすっきりしたいな
ひ孫からバァーされもてあそばれてる
この苦境すっかり乗り越えられるか

米子市　池田美穂

年金で仙人ならば飼えそうだ
三密をはずされ会話ちぐはぐに
買った服お披露目なしで衣替え
八百万の神は五輪を見捨てない
国産のウナギにするわ今年だけ

米子市　伊塚美枝子

蕗わらび自然が育て春の卓
雨の日のステイホームの長電話
畑仕事マスクはずして生き返る
手帳の予定バツバツバツで黒くなる
目覚しは庭の小鳥のさえずりで

米子市　後藤宏之

昔みた夢はどこかに置いて来た
覚えたてあのさこのさの江戸ことば
粉飾決算我家の得意技
しまい湯は主人ついでに風呂掃除
話のつづきはおにぎり食べてから

米子市　後藤美恵子

日本丸民の船酔い止まらない
軽軽と子を持ち上げた腕細る
子の筆跡亡夫と見紛いきゅんとする
争わぬ天から下りる蜘蛛の糸
きっかけをコロナに負わす離婚劇

米子市　竹村紀の治

出来立てが何より旨いひとり飯
社会的距離は充分独り者
コロナ禍のお陰で逢えるチャップリン
八十を超えて水平飛行中
何日か何曜日かも無いコロナ

米子市　中原章子

飛ぶほたるネオンの如き風物詩
移りゆく時代静かに見つめてる
梅ラッキョウ買ってその後が忙しい
当り前と思う日常感謝する
かるがもの泳ぎニュースになる平和

米子市　成田雨奇

澄んだ目で話があると子が言った
捨てるのに百円かかるフラフープ
石鹸がカタカタ鳴った若かった
きっかけが掴めないまま黙ってた
得手不得手なんて言わないことにする

米子市　野川宣子

体温も味覚も異常ありません
自粛中外はすっかり夏衣
老人会仲間に入る歳になり
お金より元気一番じじとばば
マスク越し人間違いで近寄られ

島根県　伊藤寿美

空港ピアノタブリンで聞く「花は咲く」
秋霜烈日歳月人も法も変え
人生は長いパンデミックに遭う節目
コロナの街でイマジン聞いている自粛
昭和一桁我慢強いと鉤括弧

松江市　石橋芳山

うなだれた直線濡れた跡がある
耐えがたくラセンに落ちていく涙
干からびた沼から泥臭く帰る
人差し指尖らせ人を刺しに行く
ぬかるみを歩いて人をたぶらかす

松江市　栂瀬みちを

人生の重石無くなりよく転ぶ
疎外感よりはまだまし孤独感
バイキング目の毒僕は糖尿病
無職でも映画は雨の日曜日
鯉のぼり確か二人暮らしのはず

松江市　藤井寿代

たこ焼を食べて女は丸くなる
コラーゲンたっぷり塗ったハートです
気まぐれな隣のネコは男前
マスクには人間の奢りと印す
コロナ禍のドミノ倒しが止まらない

松江市　松本知恵子

花菖蒲見つけた雨の野菜市
したたかさ持てと夏草よく伸びる
やっと来た孫コロナからもう梅雨に
姑逝って五年あじさい咲く季節
厳しさと我慢を姑よ有難う

出雲市　伊藤玲峰

青い海夏が海からやって来た
米寿の集いチェリーセイジの祝う如
学校も元気な声が競いだす
神在(かみあり)す街ですコロナ風に乗る
過疎もよし緑の森が唄ってる

出雲市　岸桂子

主逝って時計ばかりは生きている
出来るだけにぎやかに振る神の鈴
世に疎く割れた鏡を抱いている
歳月に戻れぬ橋が多くなる
伝えたいことは忘れて長電話

芽をあげた畑が一句くれました
一つだけ忘れて足らぬ味になり
現況を知らせに友が来てくれる
親友が寂しかろうとばらの花
風に乗り亡夫の声がしたような

雲南市　菅田かつ子

押入れのミシンに陽の目マスク縫う
久し振り顔合わすだけで安らげて
10年前写した遺影が見つからぬ
人の名を二日もたって思い出し
トイレにもカレンダー貼り落ち着けた

岡山県　高岡茂子

青リンゴ右も左もなく進む
怖い物なにもなかった花の頃
若い日のわたしを知っているカメラ
叩いても振っても種が出てこない
大丈夫今朝も自分に言い聞かす

岡山県　田中恵

風がキスするほめられたグレイヘア
コロナ禍が商店街にビンタくれ
嵐の日花の日ありて歳重ね
万緑を詰めた新茶の贅を飲む
バッテリー組みリリーフのない夫婦

岡山県　藤澤照代

元気かと回覧板がノックする
歳重ね欲ボケしては笑わせる
生きている今日一日のドラマ描く
ぐうたらを遺影の夫に睨まれる
怪しいぞ本が家出をしたまんま

岡山県　山縣のぶ子

半袖でぷよぷよの腕さらしだす
おのずから二重人格マスクして
想定外もすこし生きてみたいのだ
痒い所はそこじゃないアベノマスクよ
目の前を小蠅うろつき元気ですか

岡山市　大石洋子

友死んだ日も晩酌を欠かさない
相性はいいはずなのによく揉める
額の花雨が止むとも止まぬとも
絵手紙のあじさい何色にすべき
美人予報士の明日の天気よく当たる

岡山市　丹下凱夫

しがらみを外した空の無限大
苺ぽいぽい食べて外している小言
独りだけのシーソーいつまでも浮けぬ
白黒はつかぬが雨はもう小降り
互角だと思うが微笑だけ返す

岡山市　永見心咲

芯のある人になりたく腰伸ばす
終日マスク帰宅の孫に補水液
コロナウイルスお金持ちにも遠慮なし
冷えマスク高いが売れる令和の世
コロナ禍についに神様アマビエ様

岡山市　前田　恵美子

ピアノ線宙吊りになる愛でした
黒歴史わざと修正液溢す
婚活の珍プレーから結ぶ縁
外出自粛要請は大掃除
僕の嫁ですと天狗の三回忌

笠岡市　藤井　智史

満足のレベル下がっていく老化
カタカナ語ばかり訳解らんコロナ騒動
難病が妻にすらすら喋らせぬ
ヘルパーになったりなってもらったり
台風に日本が好きなDNA

松山市　古手川　光

お隣が金持と知る被害額
ウイルスと共生せよと言われても
ムチ打って我が運命に立ち向かう
せめてもの夏を迎える花を植え
知事さんの人気投票さすコロナ

松山市　宮尾　みのり

料亭の炎受け継いでるかまど
花背の里まだ活躍の火吹き竹
陶工の耳が逃さぬ土の声
表情を土に与える陶芸家
埴輪みな心で見ると美しい

西予市　黒田　茂代

開け放つみどりの風が抜けていく
怠けるとポキリコキリという身体
聖書は書斎　経机に経本
筋トレを横で見ている蜘蛛がいる
一葉の写真と今日も生きている

土佐清水市　辻内　次根

天網恢恢真実だけが浮き上がる
早ばやと敬老会の中止来る
金平糖噛めば昭和の味がする
給付金浮き足だってきた財布
ステイホーム寝るか食べるかテレビ見る

東かがわ市　川﨑　ひかり

バス停にひまわり植えて風丸い
息子二人時にむなしくなるのです
続編は書きませんさみしくて
コロナのせいにしている肥満
考えた亡母ならばどうしただろう

北九州市　小松　紀子

臨幸の陛下ひとりが手を振られ
妃殿下の姿見えぬと憂う民
十字切る指が知ってる深い傷
百均で値切るお方は誰も居ず
我が家でも二対一の多数決

唐津市　山口高明

理容院コロナ怖くて入れない
コロナ閉鎖髪をまとめて夏に入る
三密で患者少ない刻選ぶ
震度7怖さ消えない四年目
初筍友の親切身に沁みる

熊本県　岩切康子

ネジ一本緩み笑いが止まらない
字余りに僕の個性が少し出る
大器晩成柩はゆとりあるものに
都落ち人間性をとり戻す
コロナはコロナカッコーが鳴き種を蒔く

札幌市　小沢淳

小島蘭幸川柳句集
『再　会Ⅱ』　領価　千円（送料共）
ご希望の方は川柳塔事務局まで
TEL 06-6779-3490

第91回　奈良県川柳大会（誌上大会）

今年度は、集会型を避け、誌上大会として実施し致します。

◎宿　題

〔傾　く〕　前年度優勝者　西川　國治　選
〔たっぷり〕　川柳天平の会　土田　欣之　選
〔半　熟〕　五條あかね川柳会　那須　鎮彦　選
〔　頭　〕　やまと番傘川柳会　福尾　圭司　選
〔虚しい（空しい）〕　生駒番傘川柳会　細野　半六　選
〔ほのぼの〕　奈良番傘川柳会　吉富ひろし　選
〔な　ぜ〕　川柳塔なら　渡辺　富子　選

◎投句要領

各題2句
所定の用紙をご使用ください。入手できない場合は他の用箋も可。住所、氏名、電話番号、所属柳社の記入をお願いします。

◎投句締切　**令和2年9月30日（水）（消印有効）**

◎会　費　一〇〇〇円（切手不可）発表誌呈（11月下旬発送予定）

◎送付先　〒631-0078　奈良市富雄元町一丁目一-七-一一四
大久保　眞澄　宛
（☎0742-44-8425）

（主　催）　奈良県川柳連盟　（担　当）川柳塔なら
（後　援）　奈良県　㈱奈良新聞社

川柳塔の川柳讃歌 ⑱⑥

上方芸能評論家　木津川　計

似顔絵の正直すぎは嫌われる

古久保　和　子

写真が発明された昔、肖像画は絶滅すると言われた。が、生き残った。私の友人に絵心の持ち主がいて、祭りの片隅で似顔絵描きを副業にしている。普段はかぶらぬベレー帽で構えるといっぱしの画伯に見えるから衣装の効果は馬鹿にならない。「どんなつもりで描くのか?」と聞いたことがある。「男も女も実物よりちょっとイケメンと美人に描く。これがコツや」。なるほど、上げ底の心得だ。和子さん、あなたは素面のままで上等です。

父の日はもう済んだのかにて終わり

川　端　一　歩

母の日は祝われ、感謝されるが父の日はぞんざいに扱われるか忘れられるかだ。河合隼雄さんの定義に納得したことがある。「母性原理は包含するが、父性原理は切断する」。だから父は遠ざけられる。それに、女は饒舌だが、男は無口だ。父と息子は黙って酒を飲むばかりで会話がない。すると「父の日の父は黙って飲みに行き」で孤独な後ろ姿に同情はされるが「俺も一緒に」とは言ってくれない。一歩さん、残念ながら、もう済みました。

昨晩のメニューを妻が答えよと

松　岡　篤

昔、11PMという番組があった。楽しんでよく見た。いまはとても、という私は、毎晩10時に寝て、9時に起きるからだ。大阪の司会だった藤本義一は79、東京の大橋巨泉は82で逝った。84の私はおだやかでない。なにしろ近ごろ右手でステッキに頼って歩くから、上体が右に傾いてきた。朝起きたら曜日を新聞で確かめる。出向く日を忘れぬよう絶えず手帳を見る。漢字を忘れるようになった。記憶力も…。篤さん、お互いがんばりましょう。

歓声を聞きたかったと散る桜

川　和　洋　子

春の選抜が中止になった。夏の甲子園も、となって選手だけではない。日本中のファンががっかりした。八月、私は高校野球を命懸けで見てきた。古関裕而の「栄冠は君に輝く」のマーチに乗って優勝選手が場内を一周する。来年もこの場面を見ることができよう、か。夏の甲子園は私の命の一里塚だった。来年も見るために生き延びよう。それが私の励みになった。ところが、今年は中止。目標の手掛りがない。洋子さん、残念な春夏ですね。

ここだけの話になると連帯感

原　洋　志

「囁く」のは小声だから三つの耳で聴くほど耳を働かせる。離れては囁けない。「ここだけの話」は大方内緒話だから密接して話す。そこに連帯感が生まれる。コロナで大騒ぎの当節、「密閉・密集・密接」がよくないと指示された。コロナ以後、人間の振る舞いはどうなるか。〝三密〟を避けるほどに人はバラバラになる。〝群集の中の孤独〟はまだ群集に包まれていた。〝孤独の中の孤独〟に人が陥ると洋志さん、内緒の連帯が壊されるかも。

一心に夢追いかけてまだ傘寿

藤　井　則　彦

若い頃、一心に追いかけた夢だったが叶えられず、傘寿になった。「もう」と捉えるか、「まだ」と見るかで悲観派と楽観派に分かれる。アフリカヘズック靴を初めて売り込みに行ったセールスの一人は「ダメだ。みな裸足で靴を履く習慣がない」と諦めたが、もう一人は「有望な市場だ。大儲けできる」と喜んだ。夢を追いかける人間はいつも楽観的で前向きだ。則彦さん、まだ傘寿、これからです。

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

悼　林荒介兄

いっしんに昨日を明日にした男
革命さはじめてコーラ飲んだ日は
ローソンへグランパパをゲットして
合格は大祖父さんの出た学者
風見鶏の館タツノオトシゴの家
のう三毛よ盲導犬を見て御覧
蟻たちよ三三五五と帰りなさい
流される雛よわたしもケア・ハウス
平成の埴輪マモルの宇宙服
来世紀もうにんげんの世ではなし
今日の暑も涼も天神祭かな
家康も上様領収証の僕も
羅漢さんには撫子を摘んできた
天下りしたばかりなるお元日
お元日戸締りをして飲みはじめ
老いらくの新年白い曼珠沙華
百人一首七十歳もお年頃
ふる里の水平線は志
砂時計目は耳よりもうたてけり
昼の酒恩師はいつまでも恩師

畏友寺尾俊平忌

拾得の箒寒山一周忌
新世紀葭のずいからのぞきけり
ベルリンを伯林と書き父恋し
新世紀汗をせぬ世がすぐに来る
みちのくの雪とりんごと黄なコート
宮城のお堀端行く黄なコート
御堂筋金の公孫樹へ黄なコート
聖堂へマリアに祈る黄なコート
屠蘇祝う酸素ボンベを傳かせ
リストラの見事な素首落としかも
席も変えない　酒も変えない
腕の無いヴィーナスの像と黄なコート
朱の社殿海の鳥居へ黄なコート
草千里馬上風追う黄なコート

自選集

緊急手術する医師の眼よ弟よ
ギリギリでしたと医師の眼が笑う
元気になって味がうすいと言うのです
退院をするハンサムになっている
リベンジはしないコロナが終わるまで

小島蘭幸

手八丁口八丁じゃ響かない
絵に描いた餅を政府は投げてくれ
パクパクと金魚も文句あるらしい
今日もまた歩幅を狭くするマスク
自粛中時計に付いた怠け癖

川上大輪

思い出を語る時間の増える歳
記念日が沢山あって恙なし
面白い話はいつも水面下
時々は荒野彷徨う夢を見る
死火山でないぞマグマを抱いている

北野哲男

紫陽花に雨降る　金魚の墓場にも
5時起床の金魚にもある時間割
お気に入りの昼寝の場所のある金魚
ペットショップの金魚が病んでいるようだ
在宅編集してます金魚侍らせて

木本朱夏

お隣とギクシャク国も拙宅も
句会に出たいテレビなど見たくない
お別れを言いたかったが家族葬
にんげんが臭う裏町なつかしい
ともだちに会いたいなあと独り酒

新家完司

首傾げ傾げ血圧測ってる
しあわせな家族見ててもつまらない
スニーカーなんて言うなよズックだろ
ちょっと疲れてちょっとひととき中ジョッキ
２０２０渋谷新宿月明かり

髙瀬霜石

湧きあがる拍手に生きている感謝
酢コンブの匂い昭和の紙芝居
簡単に頑張れと言う他人の口
エッセンス振って私の味を出す
ハードルを上げて鼓舞している私

竹治ちかし

前進を阻むコロナと熱中症
情熱へ水を差されている八十路
Tシャツが届き元気の湧くよわい
ひょっこりと浴室のぞくお月さま
退院も訃報も届くアラカルト

津守柳伸

発言ない議員の数よ白マスク
花も見ず君にも会えずとじこもり
もったいないなにもせずにいる日長
平生の暮らしが立派なとじこもり
何処へも出ない居間　桃源郷かも知れぬ

都倉求芽

嫌なもの見るなと視力弱り出す
新コロナいつまで続くぬかるみぞ
白いマスク野暮ったいなどいうメディア
曽祖母の存在感が軽すぎる
ウォーキング百引く七を称えつつ

西出楓楽

八月に六日九日十五日
夏休みでしたか八月十五日
ゲートルを洗った八月十五日
あの頃は玉音八月十五日
国の名が三字に八月十五日

仁部四郎

また飲みに行こうと言ってそれっきり
ライバルのピンチ見殺しにはできぬ
傷み出す頃に馴染んでくる帽子
戦場に散った先輩忘れまじ
先輩とハローワークで会いました

三宅保州

眼に見えぬ敵に自粛を強いられる
帽子にマスク声掛けられてはて誰だ
何かした訳でもないが陽が沈む
恐山　腐食している一円貨
師の色紙仏間で心経聴いている

福士慕情

除虫剤撒布トンボ蝶々少子化に
独り居の友へ自転車走らせる
花活けて枯れる姿も見届ける
ポジティブに・が午後の心は折れ曲り
老化した視界に美しい夕日

松本文子

八月へタイムスリップ原爆忌
ヘルパーは全人類ぞ地球病む
2メートル離れてここだけの話
驕るコロナよ久しからずと覚悟せよ
百までは生きる気概のスクワット

三浦強一

予定みな消え通院日だけ残る
旅行には行けず食事にさえ行けず
ステイホーム戦時の防空壕のごと
デパ地下を回り空振した試食
暖冬の後が寒くて突如夏

村上玄也

童謡になれず蝙蝠傘の鬱
波紋の中に残されていた指紋
人間の罪かアスベストの罪か
庶民とは達磨落しの最下段
放浪の旅から戻らない虹だ

森山盛桜

履きやすいように揃える朝の靴
使いやすいように並べる台所
荷物点検　出先で困らないように
うっかりの私を戒める呪文
「ようにように」と唱える生きやすいように

八木千代

初夏の窓からラッキーとアンラッキー
愛用の洗濯板と私の昭和
歩いた道に小さな足跡を残す
ふらふらよろよろコロナの世を生きる
外出自粛続く街に心に雨しとど

山本希久子

長いこと生かされました有がとう
これ以上長生きしたくない歳に
未だ生きるつもりで川柳を
チャンバラで勝ったことない日本人
へんてこな川柳でよし解るかな

板尾岳人

麻生路郎語録

芝居や映画を観て句を詠む作家がいるが、多くはそれを事件的に取扱うか、感傷的に詠んでいるのに過ぎない。作者はその劇の中に新しく人生を発見するのでなければ、その作品が第三者を動かすに足らない句に終ってしまうことを知らねばならない。

（「川柳雑誌」NO・325より）

句集の森

『麻生路郎選集―私達』

河村日満

妻と来て市場の中も歩かされ
通信簿意地がないにも程があり
働いてきた手大きく子に見せる
十二月金の出るのがよう目立ち
道草を食う蟻もおりほおえまし
見栄坊な僕だけ損をしてかえり
絵でカルタ取る児と春の留守居する
三度目の酔元日も昏れかかり
この人も師を呼び棄てに趣味を説く
予備知識仕込まれて出る座談会
焼香へ遅刻したのが先に立ち
死を悟る人の言葉の静かなり
母の日の母は黙って飯を炊く
病妻へある日はアチャコほどおどけ
酔うたんで言うんやないと念を押し

（昭和32年1月20日　発行）

温故知新

小出智子川柳集『蕗の薹』から

バーグマンの帽子

座りだこようやく弟子にしてもらう
思い出を大切にして老けられぬ
友達ととりとめもない楽しさで
お向いのおじいさんにも灸据えて
女一匹苦い言葉を噛みくだく
間違い電話そろそろ春がやってくる
ごはさんで願いましては新年に
洗濯をいっぱい出してよろこばす
天才とさほど変わらぬものを食べ
ときどきは数えてみようあばら骨
バーグマンのような帽子も被ずじまい
単純に美味しいものを食べに行く
短冊に小さな過去が書いてある
知らん振りできない傘を差してから
おばあちゃんを遊んでくれる篭のの鳥
アイロンを毎日掛けているところ

川上大輪選

生きてればポンコツだってへいっちゃら
家を出て世間の人になりすます
踏み出せば水たまりなど気にならぬ
むいてもむいてもらっきょうはらっきょう
いつからか生きてることが趣味特技
前へ進め二足歩行ができるうち

生駒市　饗庭風鈴

埋め戻す記憶が放つ火の匂い
雑学の袋の底で光るもの
悔いの手で掴む明日を生きる知恵
母からだ着信音がやわらかい
夏雲が見せる自慢の力瘤
まだ耳に残る昭和が駆けた音

岐阜県　喜多村正儀

円やかがええやん酒も人柄も
胸の奥ぐらりと揺らす笑みに逢う
常識の鱗を剥いだ師の言葉

池田市　上山堅坊

精一杯もがいた後の旨い酒
男ですヤバイ熟女が面白い
Aが好きBも好きだと片思い

大洲市　花岡順子

受付でまた試される記憶力
マシュマロの甘さは芯のない甘さ
幸せをたっぷりくれる母の膝
道連れになろうあなたも寂しそう
帰らない夜は包丁研いでおく
四面楚歌鬼と手を組むのも有りか

広島市　常國喜好

不器用な種にもきっと花が咲く
お遊びのつもりが今は終の友
こんな中縋る思いの五七五
幸せは危ういものと知るコロナ
空気にはまだ税金を掛けてない
好きですか嫌いですかで生きてゆく

三原市　笹　重　耕　三

椅子ひとつ開けて夫婦の日向ぼこ
コロナ禍へ自粛自粛という呪文
中国のマスクが偉そうに並ぶ
耐えるしかない大海の多数決
ふるさとの風を時どき抱きにゆく
父さんに似ているだけで嫌われる

米子市　妹　能　令位子

人の癖見つけて嗤う不仕合せ
ストレスの薬貰いに寄席通い
ムンクの絵無人の街で叫び出す
悪友と言われる程の器量ない
二人旅見て来た景色くい違う
インスタに映えて料理は冷え切って

大阪市　岡　田　恵　子

ひきだしに転がる恋の二つ三つ
ウイルスがとおせんぼする恋の道
喉元を過ぎれば恋はあっけらかん
思い出は流れる川の底の底
ソーシャルディスタンス内緒話はまた明日
梅雨空や不要不急で生きてます

府中市　岸　田　　武

然もあらん録画ばかりのテレビ欄
給付金だれにお礼を言いましょう
試されているんだ更に引きしめる
窓をみな開けっ放してみたりして
野仏の伏し目にマスクよく似合う
遊んでもいられないから草を引く

米子市　川　本　美津子

鏡見て貴女誰かと聞いて見る
性に合う田舎暮らしのお付き合い
適齢期勝手に延期する娘
なぐさめてくれる自然にする感謝
秒針の音つきまとう眠れぬ夜
うつな自分を作り笑いで慰める

神戸市　青　山　ひろし

巣ごもりで秘蔵の酒が顔を出す
行きつけへ客の戻りを聞くコロナ
開幕が遅れ新人老けてくる
トラキチも三連発は見飽きたり
サングラスちょい悪顔を作って見
体温計座右になったコロナの禍

松江市　山　根　邦　代

友の死を受け入れられず梅雨になり
おくやみの言葉さがして今日も暮れ
給付金待ってる間花でした
スゴモリを強いられ弱る足さする
梅の実が届いてうれし忙しさ
朝一で投句すませて深呼吸

黒石市　石澤はる子

生け花に揺れる心を見抜かれる
自分史に足りないものがありすぎる
どなたからも音沙汰のない誕生日
両耳をけしかけている噂好き
盃が一番好きな裏話

黒石市　北山まみどり

ぐらついた歯にしがみつく意気地なし
踏み出せぬ一歩が穴を広げてる
取れそうで取れない染みとにらめっこ
時々は手法を変えて粘りなさい
ほどほどの自己満足が栄養素

五所川原市　むらのひとり

自転車で駆ける生徒は夏の風
ゆっくりと根が這うように土地盗られ
栄枯盛衰 庭草を眺める
結ばずに紐が絡まる晩節へ
勝手だがかつての好しみ飼っている

横浜市　巌田かず枝

通学路色とりどりのランドセル
済みません頭につけて頼み事
不便な地もう慣れました二十年
衣替え捨てたいけれど捨てきれず
制服のようにエプロン着けてます

横浜市　長島亜希子

柄マスク気になり話上の空
トリアージされて逝くのはまっぴらだ
春用に買ったブラウス出番なし
吸い込まれて入る昭和の喫茶店
この町に子ども食堂要る格差

富士見市　中島通則

アベノマスク間に合いますか第二派に
切り抜いた新聞読んだ例なし
亡き友の焼いたお銚子形見分け
十歳の孫のタメぐちメール来る
レンコンの穴から覗く明日の運

静岡市　渡辺芳子

かざらない自分を生きる幸せよ
一人でも楽しむ事の出来る幸
もの忘れ許してもらう年を生き
何事もただありがとうで生きている
何も彼もなっとく出来る同期生

豊橋市　西郷紀美代

孫なのに会いたい時はアポがいる
失敗は成功の母堪えて見る
落書きに明るい色のない曇り
おやすみネ妻が寝てから見るテレビ
残された時間が変えた夫婦仲

奈良県　室田行久

麻酔切れ七転八倒見えぬ朝
看護師の微笑み痛み消すは嘘
激痛にありがとうすら口に出ぬ
動けない視覚聴覚フル稼動
便意にも激痛出口また封鎖

和歌山県　森下よりこ

コロナ怖い人間怖いと生きている
コロナ禍の自粛で脳も委縮する
もの言えば自慢話になる老女
ばあちゃんの湯かげん聞いたのは昔
マスクして自分を少し消している

和歌山市　倉橋悦子

電話口キャッチボールがよく弾む
巣ごもりに絵手紙の山よく喋る
エネルギー使い果たした店じまい
少しずつ捨てる勇気が身に付いた
曖昧でいいこともある世の流れ

和歌山市　西川千鶴

ウォーキング老いの歩幅の二人連れ
喧嘩して手荒く剥がす春キャベツ
積ん読が崩れかけてる梅雨の鬱
ハザードマップ私方向音痴です
芳香剤客間にあったトイレ用

京都府　北野クニオ

巣ごもりでテイクアウトで皆すます
給付金しびれ切らして待ってます
テレワーク慣れぬ授業ではかどらぬ
給付金うまく使えよマイナンバー
スーパーも入場制限マスク付き

八幡市　武田悦寛

いい子だねほめて育てる夏野菜
制御不能思考回路が二日酔い
久し振り太極拳が阿波踊り
プライドもやがて錆び付きスクラップ
ゆるゆるの紐にしてからよく眠る

大阪府　大浦福子

あなた色染まるつもりがわたし色
落ちてなお褪せぬ紅葉の心意気
晩成と言うがそろそろゴール前
老いて尚もうひと花と飲むサプリ
リハビリと米寿の母は鶴を折る

大阪市　降幡弘美

密密密いのちをかけてお買い物
誰一人つけていないぞあのマスク
どうしよう曜日感覚戻らない
自粛明け身体に残るナマケ癖
ウイルスと共に生きるさ上等だ

堺市　羽田野　洋介

無い知恵を絞ってみたがやはりダメ
おつかれさま言われてどっと出る疲れ
ライバルに花を持たせて油断させ
無観客これじゃ商売上がったり
その振りをまねたい人に出会わない

泉大津市　助川和美

何もする事がなかった日の疲れ
錆びぬよう自分磨きを続けます
ウイルスが突然奪う当たり前
国会に遅刻しないが寝てる人
乾杯はまだかな喉が待つビール

貝塚市　吉道あかね

階段で若さと老いが入れ替わる
春の服着て行かぬまま衣更え
巣ごもりで昨日も今日もふたりきり
聴力も視力も落ちて凪いでくる
六月の行事に梅と紫蘇を買う

河内長野市　穂口正子

同い年コロナけんちゃん連れ去った
決意してまずは歯医者と美容院
お互い様かなでも損した気分
子が有って夫婦なんとか綱渡り
死ぬまでは卒業できぬ母の役

河内長野市　渡邊修

テイクアウトごはん大盛気がねする
コロナコロナ息がつまれば新喜劇
卒業も入社祝いも飛んだ春
引きこもり三度も五度も食べている
秘密での年がうっかり干支でばれ

高槻市　三谷白黒

新聞はページを逆に読んでます
定年後ずっと自粛をしています
在宅で主夫できるようなりました
政治家の無策無力を知りました
十万円僕のものだと孫が言う

豊中市　荒木郁子

引き籠り友のメールに支えられ
お互いに電話でぼやく籠る日々
孫のため手作りマスク工夫する
宅配のおかずパックも飽きてきた
楽しみが散歩だけとは寂しいね

豊中市　貝塚正子

在宅勤務渋い上司が懐かしい
朝儀式検温もして元気です
揉み手してスーパー出たり入ったり
行く所ないが香水つけてみた
ステイホーム女は化粧手抜きする

宅配の印鑑押す手嬉しそう
旨いもの食べたら怒り治まった
アベノマスク鼻を隠せば口が出る
マスク越し目は口よりも物を言う
「お姉さん」に老婆数人振り返る

豊中市　齋藤　奈津子

絶望はしません生きてるんだもの
泣きますねこの世に生きていますから
梅雨煙る十三大橋独り行く
温かい雨捻くれ者にも降る
犯行を自白したよなポチの顔

豊中市　松田　蟻日路

ヒヨコから育てたという目玉やき
うるさいが貧乏平気といい女房
きっぱりと断る役はいつも妻
茶がぬるい何を怒っているのやら
問題はそばに女房いる不安

寝屋川市　岡本　勲

八十路前どんでん返しあろうとは
ちょっと油断したらあの世かも知れぬ
たられば を呟き斜線スケジュール
震源はコロナ余震がまだ続く
愚痴ぼやき一纏めしてシュレッダー

寝屋川市　川本　信子

比べると不足ばかりが見えてくる
バラの花棘を背負ってきる啖呵
終電に混み合う蝶とキリギリス
御仏の隣り合わせに潜む鬼
受け入れる器が無くて雑魚でいる

寝屋川市　廣田　和織

面会は禁止お礼も言えぬまま
ヘソクリなら多少ありますそんな顔
アクセルもブレーキも無い老いの恋
野良猫を飼うに思案の余命表
妻にかなわぬものの一つに目分量

神戸市　米田　利惠子

焼酎の2合で雲に乗る八十路
マスクした美人が増える新コロナ
人間の弱さ骨身にしみた春
親しんだ生活変わる令和2年
過疎の里十分過ぎるディスタンス

神戸市　近藤　勝正

自粛中誰にも会わず散る桜
エンゲル係数うなぎ登りの自粛中
看護師もできるものならオンライン
キャッシュレス大欠伸する貯金箱
宣言解除マスクと諭吉まだ来ない

神戸市　斎藤　隆浩

どの人も喜怒哀楽のないマスク
目に青葉心に沁みるやるせなさ
いつも来る鳩よあなたは誰ですか
信号は赤だおウチに帰りましょう
五月雨に心を濡らすひとりぼち

神戸市　田本古鈴

物忘れコロナのせいと言ってみた
やる気出しさっと立ったが目眩する
衣替え去年のサイズ腹締める
また干され幾度洗うの布マスク
言い訳はコロナのせいで全て済む

伊丹市　平井富夫

学友の名簿にはしる赤い線
ウイルスが一人カラオケ覗き込む
スリーサイズ今は嘆きのワンサイズ
同居する長所短所の嫁と妻
衣食住足りて進歩のない平和

小野市　田中辰夫

故里に谺の返る道がある
わが故郷やさしき星よ蛍舞う
少年も老いて戦火を語る夜
夢紡ぐ一会の縁の青い花
思いやりつなぎ合わせて絵を描いて

三田市　稲角優子

背に朝日つかのまの八頭身に
コロナから家族の絆より深く
古希もすぎ自然の中に身をゆだね
忘れかけマスクが届く遅すぎる
国会は責任転嫁のなすりあい

三田市　木村マユミ

足運ぶ今日も菜園元気です
世はコロナ続く三食疲れ気味
横になりラジオが友の至福時
夏日です黄砂案じつ布団干す
介護中金婚式はぜひ二人

三田市　辻開子

子に掛けるエール一言大丈夫
お試しのはずの彼だが五十年
安心が品切れしてるマスク棚
干し竿にカラー溢れる子育て中
来ぬ十万鰻重とったし服こうた

三田市　中山昭美

探しもの時間ばかりが過ぎてゆく
本棚の隅に萬札二枚ある
健康を主軸にかえた老いの坂
人生の長い階段八合目
外出の自粛解ければ梅雨の入り

三田市　馬場貴美江

今朝もまた目覚しいらず鳥の声
家庭菜園今朝も料理にそっと添え
盛り付けも昔大鉢今小鉢
よく笑う娘に孫も母に似て
古希迎え夫婦も猫もよっこいしょ

三田市　森　玲子

のど元を過ぎたか悩み忘れてる
凡人は無理せず身の丈わきまえる
心配がある日はかえって頑張れる
衣替え季節の気まま許せない
若者の髪型老いに嘆かわし

丹波篠山市　藤井美智子

三密の密が気になる春の闇
巣ごもりに孤独の闇が深くなる
コロナでも百花繚乱春の庭
巣ごもりで買い置き品も底をつく
こっそりとヘソクリ数えウフフのフ

西宮市　髙橋千賀子

生かされてやさしさ強さ試される
人生を程よく泳ぐ君の鰭
語らいの中にしみじみ人間味
真実を知っているから踏み出せぬ
便利さが邪魔することもある此の世

尾道市　小川道子

ブレーキを踏み間違えて老後フイ
傘寿過ぎ一人暮らしも悪くない
浮き沈みある筈なのに沈むのみ
手の平を握って開けば血は巡る
目閉じれば竹馬の友やマドンナが

尾道市　小畑宣之

おしゃべりヘマスク外せぬもどかしさ
築六十孫の元気へギシギシと
日曜大工夫の遺作も軋みだす
お祭り中止手持無沙汰の町内役
化粧決め今日の私が動き出す

竹原市　若年幸子

幸せもあなたの顔が横にある
見抜けない巧みに飾る口上手
きっかけを辿ればそこに師の影が
ゆっくりと私のペース暮れて行く
もう一度帰ってみたい父母の元

鳥取県　飯野菖子

食べ頃の西瓜カラスは知っている
手を合わせ不老長寿の水を呑む
失恋は人のことなら面白い
節くれた指喜怒哀楽をしっている
九十三杖はついても口は立つ

鳥取県　田中重忠

しゃぼん玉野原の色を抱いて飛ぶ
水溜まり雲を自由に遊ばせて
虹ですよ晴ればれとした顔で見る
もう仮面いらなくなった座を守る
自画自賛ひとりでウフフいい時間

鳥取市　大前安子

良い年の予感がしてた二月まで
弁当に紅差すようにミニトマト
おもてなし頑張り過ぎて食べ切れず
家ごもり結構性に合っている
諦めず希望はいつもポケットに

鳥取市　山野すみれ

遊んでる時は足腰痛くない
引き返す勇気ないまま迷い道
呆けたかな今言った事また言った
愚痴不満詰めた袋が破れそう
朝目覚め手足伸ばしてグーチョキパー

倉吉市　若松由紀子

晩酌は一日仕上げの潤滑油
好きな趣味版画夢中で彫り刻む
歳とると飾る言葉が出てこない
もったいない皿まで食べる癖が出る
芋食べて大きくなった世代です

境港市　藤原久直

ふわふわの泡もひと役生ビール
万緑の食べ放題を咀嚼する
乾杯のビールに溶ける蟠り
肩の凝る椅子を譲って窓際へ
暇つぶし暇な蛙とにらめっこ

安来市　原徳利

孫巣立ち洗濯竿に暇が出て
一息も二息もして畑する
後何年のんびりいくと決めました
アルバムを開けば時代変わってる
窓の外子供の声にホッとする

雲南市　永見安子

結局は独りで渡る丸木橋
一〇〇年後起きてみたいな新世界
生きて来た重み私の背も腰も
誕生日歳は一つでしわ三つ
長らえて退屈なのも感謝です

瀬戸内市　宮宅比佐恵

コロナ禍に手も足も出ぬ神仏
願いごとしないと決めた神仏
一人前バーコード付くレジ袋
頼もしい百円の傘俄雨
あと少しお世話様です免許証

美作市　岡本余光

松山市　大内せつ子

ババロアに白い噂が溶けてゆく
面取りにわたしらしさも消えてゆく
まちがいさがしばかり渇いた恋でした
風船の中身だれにも言いません
流木の罠にはまったミズスマシ

松山市　郷田みや

決めました割れたら捨てるペアグラス
ぼちぼちでいい黒鍵に触れてみる
街路樹のなんじゃもんじゃが騒がしい
冗談に気づかないまま裏返す
無理強いはしないクチナシ白く咲く

今治市　永井松柏

家系図のすぐそこにある地雷原
曲線を抱きしめている二十五時
つぶやきが阿鼻叫喚になる悲劇
ほどほどの幸せ駅へ徒歩二キロ
等距離を保ち平和な犬と猿

宮崎県　黒木栄子

電子辞書知識の宝庫手放せぬ
ひそひそのはずがいつしか弾み出す
山椒のほのかに今宵木の芽和え
ピリオドにボトル一本空にする
そこかしこコロナ恐れて閑古鳥

沖縄県　あらさくら

筆記力認知予防に効果増す
ごちゃごちゃも幸せならばいいんだよ
一杯の酒でまぎらす胸の内
移住者が増えてふるさと遠くなる
高齢でバランスを取るひざ小僧

佐賀県　真島久美子

二番手にいて隠せない獣臭
人ひとりおくる木魚の無表情
干からびたカエルは片想いだった
亡骸のように昨日のハイヒール
言の葉が中途半端な場所に落ち

唐津市　前田廣幸

癒された顔で不満の孫ばなし
通帳へ十万円の一夜宿
ハードルは最終章へ取っ払う
世界中ナイチンゲールの灯が点る
頭では未だ青春と血迷えり

弘前市　髙森一呑

うわの空妻の小言は続いてる
酒が好き雅号も好きで今日も呑む
狂ってるマスクマスクの雨嵐
正直に生きてコロナと共存す

仙台市　月波与生

ニセアカシアの蔭に目立たぬ男いて
踊子草眺め伴天連がころぶ
間違えてたんだ呼び方笑い方
さよならか またねか今日の終わり方

神奈川県　小田幸子

愛犬の月命日に九十五
シッポ振る天使のぬくもり胸に抱く
認知症越えてつながる人と犬
おとろえも大事な一こま人生の

横浜市　加藤佳子

予定表中止が続く鬱と鬱
宣言の解除を待てぬ繁華街
距離取って自分以外は感染者
ＹｏｕＴｕｂｅジムの代りに踊ります

栃木県　廣瀬良磨

一目ぼれどうやら僕は熱中症
動けない前後左右に夏の色
コロナ禍でタイムスリップしたくなる
熱帯夜に驚いている熱帯魚

東京都　髙岡弥生

ウイルスが活発だけど風邪引かぬ
新型はインフルエンザも忘れさせ
大学生一度も学校行けぬまま
小さすぎアベノマスクはどう使う

石川県　堀本のりひろ

我がメガネ時々すべて雲隠れ
会えたのに知らないふりの風でした
アロンアルファーも負ける婿夫婦
相合傘ゆるりゆるりと濡れそぼつ

名古屋市　冨田末男

出稼ぎの苦労知ってる足の裏
サイコロをポッケに入れて出す答
生き甲斐を広がりにする趣味数多
答出す自信持たせた知恵袋

江南市　脇田雅美

三億円外れ内心ホッとする
買ったはずの切符探しに乗り遅れ
エステかな妻の顔輝いている
肩書きに注がれる酒はうま味ない

豊橋市　小松くみ子

現金はうれしいですねマスクより
アベノマスク回収箱で泣いている
豆苗を育て最後は豆御飯
水やりのご褒美かしら朝の虹

奈良市　尾畑なを江

故里はいくつになってもジンと来る
食べたいなマンゴスチンの二つ三つ
簡単に終わるはずがと逆になり
ころんでも只では起きぬ意地をもつ

奈良市　仲西賛郎

旅行好きそんな気分になれぬ日々
娘より手づくりマスクうれしいね
体力の衰え感ず登り坂
隣の部屋何しに来たかまた戻る

生駒市　児玉規雄

ネコマンマ今でも好きな僕の妻
ビリケンも刺抜き地蔵もエアタッチ
厄落し落した場所が分らない
もう傘寿未だ傘寿と言える歳

和歌山県　三枝眞智子

自然界勝手気儘は許さない
朝の五時待ちかね散歩靴が鳴る
朝食が美味しくてまた肥りそう
あたり前の毎日暮らす果報者

和歌山市　北原昭枝

割り切ったつもりの思い深くなる
ゆっくりと噛めば味あり情があり
心太するりと心通り抜け
筆箱のエンピツが知る削りぐせ

和歌山市　定松宏枝

冷蔵庫チンして食べる物ばかり
とりあえず朝の体温日課です
満腹になった財布の給付金
高が五円されど五円のレジ袋

和歌山市　佐藤まき

感謝と敬意空に描いた五色雲
籠る日々思わぬ花火晴ればれと
自粛中体操三度お茶三度
タクアンを知らぬ子育つ新時代

和歌山市　鍋嶋澄子

絶景の旅番を観て弾んでる
ぬける空届け杉の木どこまでも
神棚の榊青々造花なの
メダカ食べた猫にあげない魚のアラ

和歌山市　福島一雄

梅雨空に夏の酷暑の牙を見る
ありがたい梅雨があってのうまい飯
趣味持てばそこそこ余生過ごせます
人間の奢り諌める新コロナ

和歌山市　まつもと　もとこ

国外へ逃亡できぬ布マスク
東京のカラスよどこへ飛んで行く
人間も同じアルコールに弱い
母のグチ聞いてうなずく親孝行

岩出市　村中悦男

コロナが怖い髪もしばらくナチュラル派
駅トイレ時計みながら妻を待つ
血液検査許容範囲が狭すぎる
問いばかり友へご無沙汰してる文

勝った覚えはない自分との勝負
自由になったら何もできない俺
マンネリをぼやくカレーの福神漬
深読みはしない一寸先は闇

大阪府　奥野健一郎

リハーサル無しのこの世の人生譜
ウイルスが本当の閉店させました
寂しさの坂をそろりと三回忌
唇の弾丸もどる三月振り

大阪府　髙木道子

梅雨近し燕は低し母強し
紫陽花の七色人の七変化
無秩序の揺れて咲く野の花が好き
ふれあいの温もり知らぬオンライン

大阪市　石田孝純

やっと来たマスク二枚て何だっけ
イヤフォンのLとRでまた迷い
重たげに頭かしげるあじさいや
受け取れば還暦仕様のクーポン券

大阪市　近藤風羅

日にあらた戦う今日の顔あらう
堂々と胸はるさきに道ができ
忖度に思いの丈がとけてゆく
旅立って気付いた父母の深い愛

大阪市　阪本秀子

せっかちな蝉だゆっくり鳴きなさい
夕立がひまわり畑なぎ倒す
枯れひまわり忘れものしたような顔
生の太陽いただいてます砂浜で

大阪市　柴本ばっは

口紅で程よく歳をカバーする
踏み出せば迷った心嘘のよう
控え目な野に咲く花の慎ましさ
悩み事夜は重たくのしかかる

大阪市　中村民子

悲しみをジャブジャブ流し明日を待つ
おいしいなニコニコ笑顔痩せません
痛いので膝があったの思い出す
観覧車ライトアップにほっとする

大阪市　中村峰子

人影がないからマスク外します
句のヒント見つけに今日も散歩する
肩書に拘っている過去の人
誰からも好かれ課長のままだった

大阪市　樋口眞

笑い声コロナも来ない我が家族
若い力今でしょうとデリバリー
鯉のぼり今年の風は泳げない
人の運努力無しでは見えて来ぬ

大阪市　前川善之

大阪市　松田　聰

コロナ禍をなめてはいかん手強いぞ
体力がおとろえましたテレワーク
待ちわびた普通の暮らしまだ先ね
この夏は手洗いマスク水補給

大阪市　森　廣子

コロナ禍に塗り潰された世界地図
一人沈黙オンザロックの三枚目
ポッペンを一人鳴らして見る仏間
かっこ良く蔦は白壁伸びて行く

堺市　楠井輝子

気まぐれの手の込んだおかずいらんで
金婚へ我慢くらべだふん張って
道たずねすぐそこですと遠かった
弱虫が勇者の顔になるお酒

堺市　古川光雄

外出時マスクしたかと妻叫ぶ
コロナ禍の中で医者行き気が引ける
池越えのあるショットには古ボール
年なれど小さく座る優先席

池田市　倉本一弥

飄々と毒ある言葉受け流す
冗談っぽく意地悪をいうあまのじゃく
古い箱に結婚前のラブレター
妻の小言背を向け舌を出して耐え

吹田市　岩口のぞみ

石けんで荒れた手になおアルコール
間に合わぬ仕事しながら五七五
リモートで飲んだらよけい人恋し
自粛後は想い巡らす夢旅行

寝屋川市　坂本ミヨノ

あの指輪欲しいウインド眺めてる
たわぬれで交際をした今の夫
洗髪でさわやか私厚化粧
くずひやり蜜の甘みがうますぎる

東大阪市　秀爷

人類の栄華を笑うコロナ菌
優等生天動説がお好きです
断捨離は過去の上司にさようなら
青春の挫折は無駄でなかったよ

枚方市　谷英也

心はずませ句作サラサラこの程度
カメラではせつない心写せない
人類に手洗い教示コロナ様
人生もいろいろあって立ち泳ぎ

八尾市　田邊浩三

コロナにはテレビCM呑み込まれ
笑ってはおれないコロナ時代の子
墓地に行くだけのようだが入れ歯替え
スクワット地獄を越える目的で

店員の笑顔をかくすマスク達
図書館の今日が期限と飛ばし読み
手を出して足も出た初回限定
髪薄れ脳薄れ憎しみ薄れ

八尾市　山川　寧

考えるもしも私が総理なら
勝手やな責任の無い外野席
コロナ騒動お陰で知った知らん事
何事も神の指図と心得る

兵庫県　太田　としお

いつの日も大したことはしてないが
何げなく過ぎてゆく日々耐え難し
柳友の信じたくないその訃報
柳友の遺稿こと更胸をつく

神戸市　石川　克美

春籠りセピア写真の花宴
持病五つ地蔵顔してコロナ避け
コロナ講釈聴こえる雑魚の吹き溜り
無観客球のひびきが透きとおる

神戸市　輿水　弘

どうしてる思った途端メール音
あれ誰やろ卒業写真ページ繰る
知らぬ間に半分済んだカレンダー
もう朝かよく寝たはずがまだ夜中

神戸市　櫻井　崇史

夜の街嫌われコロナ大暴れ
不要不急の用が無いので家に居る
店先でマスクしている招き猫
米中の茶番観ている大向こう

神戸市　松倉　正美

生きがいのペンがコロナでみだれだす
終息の願いを込めて鶴を折る
柳友と再会願うペンを研ぐ
おとなしい友が突然急所つく

神戸市　山根　弘華

ほめ上手ころりと生かすそのセリフ
稼いでも妻の浪費で胃をやられ
バッサリと人員整理物じゃない
曇らせる一言あんた自粛して

芦屋市　新阜　義明

コロナ禍も花鳥風月揺るぎない
誕生日祝いに届く検温器
テイクアウトも3日目で飽きがくる
3密を避けて紫陽花寺巡る

尼崎市　清水　久美子

デカバッグ ポイントカード踊らせる
悪政に異議も唱えず馬に為る
寝たふりに明日の段どり脳占める
バブル期の給与ボーナス今一度

尼崎市　寺嶋　恵美子

ホテルの灯りポツリとついて耐えている　尼崎市　山田厚江

何してるんヘリコプターがホバリング
ストレスがかかる人とは距離を取る
やかましい人は三日であきが来る　伊丹市　延寿庵野鶴

みぞおちの辺りで迷い解けて行き
明日のため今日の鎧を捨てて寝る
ふるさとを食べるリンゴの丸齧り
キャタピラの轍が語る脳日記　伊丹市　岡村風琴

絵蝋燭儚い命燃やし生き
寂聴法話明日へ生きる糧学び
充実のひと日を閉じる旅日記
張り詰めた空気が好きなシャボン玉　三田市　生田えい子

溜息もマスクに包む家の中
惚けるなと釘を打たれて針を抜く
髪洗ういつもよりかは丁寧に
死ぬよりもかかりたくないコロナ病　三田市　幸田厚子

夏野菜苗を一番買いに行く
農作業今年も美味い米準備
五月晴れ庭でパプリカ親子曲
かなしいがコロナの句しか出てこない　三田市　中山寅男

保護者会ブランド品が勢揃い
散歩道彼女が居るとポチが啼く
花束に囲まれるのももう間近
コロナ好き飲み屋カラオケ夜の街　宝塚市　岸田万彩

二波三波見えない津波出すコロナ
薄皮のスイカ漬け物には不向き
歩道橋涼しい風を期待する
怠慢に罪悪感のない老後　丹波篠山市　澤良子

雑草と今日も会話の根比べ
定年の我が身ムチ打つ重い腰
新緑の若い生命が背伸びする
世の動き止まると曜日いつだったっけ　西宮市　高瀬昭枝

茶の効果のどに優しく気もゆるり
戦いは泣いて勝ちます末っ子が
雑草が花と仲良くかくれんぼ
日暮れ時花に御飯の水上げる　三木市　山口ヨシヱ

しかたなく足踏みをする負の時間
端座してあちこちタイヤ軋む音
対峙してよしとしようか元気なら
シナリオを塗り替えている赤いペン

閉塞感一掃願い咲く花火
新ビジネスマスク商戦活気づく
大振る舞いうなぎ上りの国負債
五千歩をまずはこなしていい眠り

広島市　田桑恵子

捨て石になるには小さき肝っ玉
何もかも神に任せてするふて寝
絵手紙に注文つける筆不精
道の駅安近短の顔なじみ

広島市　松尾信彦

緊急事態解かれて甲羅干しをする
日本の太郎も花子も強かった
蟄居とや銭が貯まって困ります
お疲れの耳よマスクよレジェンドだ

竹原市　土井輝恵

連載小説ドキドキさせて裏をかく
テレビ嫌いが一人くらいは良いでしょう
男なら最期のさいごまで粘れ
安全な場所へ家族は入れたのよ

三次市　伊藤寿子

脳の錆落としてナンプレに挑む
夏のドリーム星空を浮遊する
終電車明日への助走かも知れぬ
玄関に昨日の嘘が落ちていた

山口市　中前幸子

死ぬことに触れて友から注意され
お隣りの嫁の根性見てしまう
食べ物に我慢出来ないこの病気
雑草の強さに負けて泣くばかり

鳥取県　下田茂登子

春一番砂丘令和の化粧する
アカシアの花咲く砂丘おとなしい
砂かぶり微笑み返す昼の月
コロナ禍のらくだは凛と客を待つ

鳥取市　上山一平

待ちわびた孫のラインで今日も幸
唄うたび心にしみる喜寿の声
銭もうけ仮装通貨で鬼ごっこ
情熱が失せると愛も鈍になり

倉吉市　伊藤嘉昭

お裾分け過分なもので返される
ルームミラー後ろの人は化粧中
横断にお辞儀で返すランドセル
役終えてほっと退職後の名刺

倉吉市　大羽雄大

背をむける未練の涙手でぬぐい
甲子園無念の中止嘆くなよ
身に余るうれしい事がありました
泣くよりも笑顔でいれば夜は明ける

倉吉市　堀かずこ

横のひと当たり前ではない出逢い
恋をすると食べたいほどにかわいくて
逆あがりできない子ほど優しくて
なにげない日常恵みだったんだ

松江市　相見柳歩

出ている杭のほうが正論かもしれぬ
父の日は何も起らぬここ五年
アナログの体温計を捨てられぬ
デジタルの体温計は情がない

松江市　中筋弘充

コロナ禍に負けてたまるかファンのため
コロナ禍に年寄り迷うカタカナ語
コロナ禍に愉快な句など詠めないよ
コロナショック心が塞ぐ喜寿迎え

出雲市　黒目ひでお

そうですよ君がいるから生きてます
鯉のぼりのウロコ数えて鳴くかじか
この沢で蛍と共に君を待つ
裏切らぬ花と野菜を趣味とする

益田市　篠原紋次郎

想い出に浸れるような雨の音
異議ありでこだわり過ぎた不精髭
穴二つ掘って疑心へ挑んでく
やっと凪しばらく声をかけないで

笠岡市　小野美那子

一つ花咲くたび記憶呼び戻す
爛漫のさつきが筆を走らせる
備忘録 亡父のくせ字が物申す
草ほどに伸びてみたいなこの背丈

津山市　髙橋由紀女

平等を知って居るのはグーチョキパー
モナリザの視線斜めに追って来る
時計にはブレーキバックギアが無い
リラックス世界共通大欠伸

今治市　渡邊伊津志

お線香コロナ無縁とゆるやかに
歯みがきをしている間に句を忘れ
雨待ちの安田の川の若鮎ら
庭に咲くサクラは鳩の落としもの

高知市　三谷松太郎

残り火よボクに時間がないのです
ギャンブルの闘志コロナに奪われる
身の丈に合ったランクで咲かす花
幸せな仮面をつけるクラス会

阿南市　小畑定弘

ありがとう手縫いマスクに文添えて
自粛して今日も明日も知恵競べ
この話三度も聞くよ子に言われ
高速路マスク忘れのUターン

沖縄県　禱モモト

沖縄県　宮　すみれ

どしゃぶりの一日重くしなるバラ
今朝の風ざわつく葉にもへそを曲げ
老木が袖をひろげて風なごむ
あのお方パラパラマンガで通りすぎ

福岡県　本田　さくら

地球変だいつかこわれる予感する
世界中コロナと戦いつ終る
人種差別米に抗議が世界中
久しぶり教師と子等の声をきく

唐津市　岩崎　實

貼りぐすり太もも二枚手首一
貝汁とぎょうざ夕食舌つづみ
花々の色香に止まり蝶が舞う
手招きを受けたあの日のあのしぐさ

大阪市　宮本　千恵子

オンライン不登校児が救われた
アベマスク小顔になれば使います
朝ドラで再会したよ志村けん

（前月分）神戸市　奥田　宗光

距離感に慣れてきました二メートル
巾着に詰まってるのは君の嘘
うっかりとマスク外せばノーメイク
旨いはず賞味切れそうな納豆
こだわりの味をくずさぬ父ゆずり
方言を芸に生かして生きている
久しぶり亡父が夢で叱ってる
また一つ悔いを重ねて陽が沈む
飴玉が左右のほっぺ昭和の子

（前月分）大阪市　宮本　千恵子

ゴミ増えてカラス喜ぶ自粛の日
ウーバーイーツ難波の町を直走り
恐怖心尖ってネット攻撃す

（前月分）弘前市　髙森　一呑

第44回　全日本川柳2020年秋田大会はコロナ感染症拡大により誌上大会に変更となりました。

題と選者（各題２句）

「歌　う」　大石一粋　選
「好奇心」　矢沢和女　選
「発　見」　いしがみ鉄　選

投句料　１０００円
投句締切　８月１０日　当日消印有効
投句先　〒530−0041
大阪市北区天神橋２丁目北１−11−905
電話　06−6352−2210
（一社）全日本川柳協会　宛

英語 de Senryu⑭

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

別離の言葉に　深酒しなさんな

"Don't devote yourself to drinking."
she says
and she leaves me

情痴の果てのひとり飯炊く

the satisfaction
his sexual desire
he boils the rice alone

---

devote oneself to ～　一身をささげる　*drinking*（過度の）飲酒　*leave* 去る　離れる
satisfaction 満足　達成　*sexual desire*　性的欲望　*boil* 炊く　*rice* 米　*alone* 一人で

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句㊹ チャップブック

海外のハイク・センリュウ大会に出かける時には、私は必ず自分のハイクチャップブック *(haiku chapbook)* を持参します。チャップブックは元々「呼び売り本」と云われ、主に英国でチャップマンと呼ばれる売り子が街角で声を上げて販売した小冊子のことを指します。中身は通俗読物や、宗教的な物語、詩歌です。パンフレットを重ねたものと云えば想像できると思います。海外の詩人（ハイク・センリュウ詩人のこと）は、自分の作品をチャップブックにして、名刺代わりに贈り合います。私の手元にはチャップブックが500冊程あります。ハイクやセンリュウの短い小さい詩をイメージして、豆本のようなチャップブックもあります。

日本で俳句や川柳の句集と云えば、結社の顔を示す立派な句集が多いですが、海外には結社のような文学集団はありません。ハイク・センリュウの同好会に入っていても、詩人の詩想は独立しています。経験を積んでいても初心者でも、ハイク・センリュウ愛好家として、各詩人の作品を尊重します。みんな気楽にチャップブックを出します。チャップブック専門の出版社もあるほどです。私が所持している一番古いチャップブックは米国の詩人 *Robert F. Mainone(USA 1968)* の *This Boundless Mist* です。その中の彼の作品を一句紹介しましょう。

this morning/ wild geese, too/ are part of the storm

日本語の訳をつければ、（今朝がたは鴨も野分の内にあり）といった風でしょうか。3-3-5の11音節の短さです。

誹風柳多留一二篇研究 86

小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男・山田昭夫
石川道子
清博美

735 **ほれるかくと茶をくらつて居**

細井 浅草寺境内には、俗に二十軒茶屋といわれる水茶屋が軒を並べていたが、集客のために競って美女を置いていた。男一般でもよいが、主役は矢張り懐の寂しい浅黄裏であろう。あわよくはという助兵衛心から、もう一杯、もう一杯とお茶を何杯も飲んでいる水茶屋族を馬鹿にした句で、いかにも天下泰平ののどかな風景である。

二十人美女を地内へおんならべ　安四信3
十九間ゝ程ハ浅黄でおつふさぎ　安八天2
二十けんさいけんもなく茶をくらひ　拾二29

清 賛。

736 **だれぞが首を切りなよとだつきいひ**

細井 肘王は殷の始祖から数えて二十八代目になるが、朝政には見向きもせず、日夜遊宴に耽っていた。そこへ来た妲己が九尾の狐が化かしてきたとも知らず寵愛し、言われるがままに残忍なことをした。もともと妲己は狐の径なので、罪なき人を殺させたり、妊婦の腹を割かせたりして喜んでいた。その一齣。

むやくのせつしやうたのしむうつくしさ　安九仁4
あれ首が落チたときさき能きげん　安五官2
妲妃が笑ひ民間を皆泣せ　一三二29

清 賛。

737 **きりくくばれ師走だぞく**

細井 年末には歳暮の祝儀として搗きたての餅を親戚やお得意先、近隣、知友に贈る習俗があった。江戸では鏡餅だった。年末で忙しい時であるし、お届け先も多いので「師走だぞ。まごまごしていないでさっさと配って来い」と丁稚に言いつけている家長。

おそなへのとつかへこするいそかしさ　一五34
重箱へ二ツ入れるいそかしさ　安七天1
さつくとくばれと渡すかゞ餅　五13

伊吹 賛。一緒に配り歩いて指図しているともとれる。

清 賛。家長と丁稚と特定せずとも、

738 **ふきぬきで堀へこられた義理でなし**

細井 昔は羽振りがよかったが、遊び過ぎて零落して、肌着をつけずに一枚の着物を着ているという吹貫（吹抜け）の身形では、かつては散々利用した山谷堀へは来られた義理ではない。

ふきぬきで通るかまへの地ぬし也　拾一〇10

きぬきのやろうこくうにいきをいゝ　安六智5

借金の渕とハ見へぬ三谷堀　三八38

清　賛。

739　**りやうし仲間へ入り候とどらがふみ**

細井　勘当したどら息子から「漁師仲間へ入りました」という手紙が銚子から届いた。やれやれ、これで根性を入れ換えて立ち直ってくれればよいのだが、とは親の願い。

鰯よる浦へ息子をぼいこくり　哲二14乙

いたわしやむす子てうしのそつに成　一一9

不孝の罪て鰯引く天の網　二六15

清　賛。

740　**かゝとで巾着を母ハ度〳〵切ラれ**

細井　「踵で巾着を切るよう」は不可能なことのたとえ。諺苑。同様なたとえに、「きんたまをくわえて腰をのすよう」というのがある（『俳説ことわざ辞典』）。

甘い母親は到底あり得ないような道楽息子の大嘘にひっかかって、まんまと巾着銭をせびりとられるのだ。

お袋をおどす道具ハ遠ィ国　初8

母おやハもつたいないがだましよい　初36

清　賛。

741　**下女がさかるでかみ合イがたへぬせ**

細井　「煩悩の犬は追えども去らず」という諺があるが、相模下女は男出入りが烈しいので男どもの争いが絶えない。それを雄犬が雌の取り合いで噛み合っているようだ。と言ったもの。

一匹の相模に男すが五六疋　七六16

清　賛

742　**気に成て負ると内義たゝき付**

細井　お内儀がその気になって勝負をかけたが、負けてばかりなので、悔しくて腹立ちまぎれに札を毛氈の上にたたきつけてしまった。松の内の家庭内での「めくりカルタ」の点描。

御しんぞをはぎたいといふ奈の内　安五梅2

清　賛。

743　**下女が色兄さんよバりにくい事**

細井　本当の兄でないのは見え見えな男のことを「兄さん、兄さん」と読んでいる小面憎い下女。

兄さんとしやれてせなあにあひに出る　明人仁6

清　賛。

744　**ゑゝ坪へぶちまけて行夜そばうり**

細井　夜鷹蕎麦は風鈴蕎麦とも言われていた。客は多種多様だったが。なんと言っても数をこなせる上得意は賭場の入たちだ。今夜も沢山売れたが、それを博奕用語を使って「いい坪へぶちまける」と表現したもの。

夜そば切立聞をして三声よび　初29

お勝ならもつとあがれと夜そはいひ　七8

清　賛。

245　**させそうな身ぶりで弟子がやたらふえ**

細井　三味線か小唄の仇な女師匠の色っぽい仕種につられてあわよくばという不心得野郎の弟子入りで門前市をなすという大盛況。しかし……。

三みの弟子七尺さつてなめたがり　二二3

清　賛。

愛染帖

新家　完司　選

（投句290名）

喜寿近く小百合との差が開き過ぎ　羽曳野市　宇都宮ちづる

（評）今年75歳を迎えたとはとても見えない吉永小百合。若い頃は「小百合ちゃんとは少しの差」と自信を持っていたのだが…。

ブランドのコップ並べて一人住む　高槻市　安田　忠子

（評）食器棚にはティファニーやエルメスやジバンシー等、ピカピカ輝いているが使うのは一つだけ。優雅で清らかで少し寂しい。

三角になれば変人ばかり来る　倉吉市　牧野　芳光

（評）「義理をかく、人情をかく、恥をかく、これで三角」は漱石の言葉だが、「気難しい人」でもある。変人と変人はウマが合うのだ。

胃薬と眠剤だけはいりません　三田市　尾﨑　一子

（評）何でも美味しく食べてグッスリ眠れてお通じもよろしい。快食快眠快便そのもので胃薬と眠剤は不要。百歳までバッチリだ！

哀しみを顔に出せない深海魚　寝屋川市　廣田　和織

（評）犬や猫や馬などは豊かな感情をもっている。鳥や魚も表現は苦手だが「哀しい」という想いぐらいはあるのではないか。

ゼラチンが微妙に効いたラブレター　和歌山市　まつもともとこ

（評）ゼラチンの主成分はコラーゲン由来の蛋白質。主な用途はゼリーやマシュマロ等。好みはあるが、ラブレターには不向きかも。

友だちはあの世へ僕はキャバクラへ　岡山市　丹下　凱夫

（評）麗らかな日和ばかりで、別嬪と旨い酒が溢れているあの世。阿弥陀籤に当たって呼び出しがかかるまではキャバクラで我慢だ。

七桁の金を使った犬が逝く　三田市　丹羽　美恵

（評）七桁とは百万円。タイニープードル等ではそれ位のがいるらしい。愛犬を亡くした哀しみもさることながら、お金も惜しい。

生活様式変えても女房古いまま　奈良市　辻内げんえい

（評）コロナ禍以後は「新しい生活様式を」と言われているが、生活の真ん中にいる奥さまが古いままなのはいかんともし難い。

リモートじゃ読むのは無理ね空気感　大阪府　大浦　福子

（評）三密を避けるためにリモートワークが工夫されているが、微妙な空気感などは読めない。やはり人と人は向き合うのがベスト。　越谷市　久保田千代

目薬をさして朝から用はなし　生駒市　児玉　規雄

何時までも見ていて飽きぬ蟻の列　奈良県　渡辺　富子

あちこちのゴミが何とかしろと言う　松山市　郷田　みや

迷わずに入れて欲しいとゴミ袋　神戸市　奥澤洋次郎

何でかを知らず毛虫はつぶされる　豊中市　池田　純子

キャッシュレスいずれお札もアンティーク　大阪市　平賀　国和

獣から見れば地球は人間禍　鳥取県　門村　幸子

さわやかな五月読経の声通る　広島市　岸本　清

筍の頭見えるが余所の土地　桜井市　安土　理恵

別居しようって言ってた人が「ごはんまだ」　枚方市　丹後屋　肇

恐竜展ヒト科の前途見る想い　大阪市　横山　里子

さ迷うてみたくて降りる知らぬ駅　美作市　岡本　余光

核の傘たんと支払うリース料

宝塚市　岸田　万彩
ハルカスの影日時計にする阿倍野

大阪市　笠嶋　惠美
自転車は相棒ですが無口です

奈良市　米田　恭昌
チラシ激減たまに見るのは家族葬

五所川原市　むらのひとり
知りすぎた二人の暮らし薄味に

三田市　村田　博
さて如何に料理しようか腹の虫

札幌市　三浦　強一
忖度が言わせる然りごもっとも

大阪市　小野　雅美
CTで見るとちっちゃな肝っ玉

南あわじ市　萩原　狸月
前歩く人のくびれと見比べる

佐賀県　真島久美子
簡単に痩せられたのは二十代

尼崎市　清水久美子
海馬から消えた記憶を探す辞書

大阪市　高杉　力
保育所の入所決まって共稼ぎ

尼崎市　清水久美子
饅頭を一緒に食べる人誑し

大阪市　高杉　力
未亡人ならばロックに生きなさい

尼崎市　清水久美子
ワサビだけわざわざ買いに行かされる

尼崎市　清水久美子
主義主張違えど夏は大ジョッキ

尼崎市　清水久美子
姑が逝って一国一制度

尼崎市　清水久美子
マスクして紅も入れ歯も忘れがち

寝屋川市　川本　信子
朝イチのメール一行「生きてるか」

大阪市　内田志津子
一病とすったもんだで生きてます

松江市　石橋　芳山
歯ブラシのヘタリ私になっている

八王子市　川名　洋子
一目惚れした時の目が欲しくなる

尼崎市　山田　耕治
ハイチーズ後ろで背伸びしています

豊中市　きとうこみつ
鼻の穴に人差し指はいいサイズ

堺市　奥　時雄
メルカリで今の流行サーチする

岡山県　田中　恵
塩漬けの株も目覚める乱高下

鳥取市　副井ゆたか
横綱も畳のヘリに蹴躓く

鳥取市　副井ゆたか
閉じ籠もり脳細胞もネンネする

鳥取市　副井ゆたか
鉛筆がつっかい棒になっている

鳥取市　副井ゆたか
巣籠もりを出ての世間は眩し過ぎ

大阪市　津村志華子
ゴミ出しと趣味の予定で曜日知る

大阪市　津村志華子
無病息災効きすぎました長寿箸

笠岡市　藤井　智史
昔むかしの服着て平気九十四

笠岡市　藤井　智史
ゴミの山一番上に居るワタシ

笠岡市　藤井　智史
禁帯出シールを妻に貼っておく

和歌山市　土屋起世子
ちょっとだけ寂しい暮らしちょうど良い

鳥取県　斉尾くにこ
補聴器と眼鏡マスクに堪える耳

弘前市　髙瀬　霜石
朝陽のなかへ「スーパーはくと」一号車

唐津市　仁部　四郎
群れないで生きろとコロナの伝言

岡山市　大石　洋子
病院で友だちに遇うお前もか

土佐清水市　辻内　次根
斎場で同期の臨時幹事会

貝塚市　吉道あかね
ダンコンの世代と言われ赤くなる

府中市　岸田　武
右向いて左向いたら日が暮れる

豊橋市　西郷紀美代
老人になる経験を積んでいる

豊中市　水野　黒兎
歳の順に死んでゆくのも恐ろしい

藤井寺市　太田扶美代
不和なのは倅の味方した不徳

塩竈市　木田比呂朗
どれが何のパスワードやら縺れだす

大阪府　米澤　俶子
付かず離れずは私の好きな距離

国民の証しのようにマスク着く

事情あるのか裏側見せぬお月さま

藤井寺市　鈴木いさお

偏西風に乗って黄砂とコロナ菌

大洲市　花岡　順子

ウイルスが境界線を突破する

豊中市　藤井　則彦

春眠へパンチかませた新コロナ

香芝市　大内　朝子

コロナ菌人の暮らしの模様替え

奈良県　安福　和夫

コロナ禍が生んだ生き方再発見

仙台市　月波　与生

自粛してひとり遊びが上手くなり

大阪市　奥村　五月

この歳で金とコロナに悩まされ

東大阪市　北村　賢子

別別にテレビ見てます逃げてない

三田市　福田　好文

三密をかたく約束してデート

岡山県　藤澤　照代

二メートル愛のささやき聞き取れぬ

堺　市　坂上　淳司

二メートル離れて妻の影踏まず

横浜市　加藤　佳子

ビップにも10万円は支給され

大阪市　平井美智子

給付金出たので今日は上にぎり

大阪市　古今堂蕉子

今行けばさぞ歓待の温泉場

鳥取市　田賀八千代

雰囲気を読まずにできるテレワーク

大阪市　石田　孝純

仮病での休み取れないテレワーク

沖縄県　あらさくら

ふれあいもできぬウイルス憎らしい

東京都　川本真理子

声たてず手を振り合ってお辞儀して

男鹿市　伊藤のぶよし

満月に似るコロナ太りを笑いあう

防府市　坂本　加代

定年後不要不急のものばかり

河内長野市　藤塚　克三

自粛中サブリここぞとコマーシャル

岡山県　髙岡　茂子

コロナに負けず庭に紫陽花咲き競う

大阪市　坂　裕之

我慢することに馴れたら出不精に

大阪市　柴本ばっは

コロナ禍以後すっかり歳が増えました

倉吉市　大羽　雄大

コロナから目によく入る県外車

富田林市　片岡智恵子

探知犬すごい活躍コロナでも

鳥取市　永原　昌鼓

我が町はコロナも攻めて来ぬ田舎

大阪市　田中　廣子

願い込め花火でコロナふっとばせ

米子市　妹能令位子

夫婦仲ステイホームがジャッジする

大阪市　磯島福貴子

倦怠期我が家とっくにディスタンス

京都市　都倉　求芽

家出るな新聞テレビお茶昼寝

神戸市　山根　弘華

自粛して一日すごすテレビ前

大阪市　井丸　昌紀

自粛してじわじわ増えた酒の量

大阪市　津守　柳伸

骨密度低下自粛のツケが来る

八幡市　今井万紗子

巣ごもりで笑える種もとうに尽き

広島市　松尾　信彦

蟄居の身大きな顔のウイルス禍

羽曳野市　徳山みつこ

そっぽ向きながら知人と立ち話

海南市　小谷　小雪

イケメンのフェイスシールド邪魔である

大阪市　樋口　眞

地下道を避けて地上を遠回り

香芝市　山下　純子

三密を避けて登った山は密

堺　市　内藤　憲彦

ウイルスもモデルチェンジで生き残り

三木市　山口ヨシエ

ウイルスも仲間に入れてあすの詩

岡山市　永見　心咲
ジバングとブランドの服大あくび
鳥取市　前田　楓花
ハンガーに吊るした服が出番待つ
西宮市　緒方美津子
得した気分使わぬままのリバーシブル
今治市　渡邊伊津志
見せる芸隠す芸でもある作句
沖縄県　禱　モモト
句を込めたキーホルダーの守り神
鳥取市　倉益　一瑤
夫も子も聞いてはくれぬ私の句
堺　市　村上　玄也
巣ごもりの友へ川柳しませんか
富田林市　山野　寿之
駅裏の男のロマン酎キープ
三田市　北野　哲男
百薬の長のラッパを聞く酒場
尼崎市　永田　紀恵
酒二合限度らしいね泣き出した
米子市　竹村紀の治
ひとり酒ハテサテ今日は何曜日
堺　市　矢倉　五月
カルテからそろり顔出す缶ビール
三原市　笹重　耕三
ワイン飲みながらサブちゃん聞いている
奈良県　長谷川崇明
ビール良し冷酒なお良し枝雀聞く

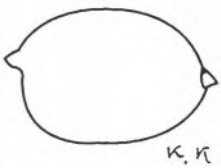
河内長野市　梶原　弘充
細胞に陽気なビール注いでやる
安来市　原　徳利
500ミリ二本ご飯が入らない
八幡市　武田　悦寛
酔いながら不器用な過去眺めてる
米子市　成田　雨奇
濁り酒呑んで心が澄んでくる
高槻市　松岡　篤
少少と念を押されて酒の許可
河内長野市　森田　旅人
免許返納酒は飲むべし歩くべし
和歌山市　北原　昭枝
千鳥足ゆれて家路は忘れない
松原市　森松まつお
メリットは測り知れない酒である
大阪市　栃尾　奏子
ダクトから経営理念漏れている
熊本市　杉野　羅天
鳩三代名付けられたり庭平和
唐津市　岩崎　實
黒揚羽庭のめぐりについてくる
鳥取市　山野すみれ
たこ焼きの丸さが今日は中の上
寝屋川市　伊達　郁夫
旅終えてまたちっぽけな人になる
岡山県　山縣のぶ子
スクワットまだ迷惑は掛けられぬ

鳥取市　上山　一平
湧き水の抹茶いただく夏が来た
茨木市　細田マキコ
柿若葉末は茶の葉か寿司の葉か
大阪市　藤田　武人
とんとんのリズムに合わせ踊るネギ
豊中市　上出　修
今が旬甘い響きにまたメタボ
和歌山県　森下よりこ
おばあちゃんになればまちがいなくやせる
唐津市　坂本　蜂朗
遺産分け済めば実家に寄り付かず
松山市　大内せつ子
野良猫の去勢の証右の耳
鳥取市　岸本　宏章
乃木坂とAKBはどう違う
大阪市　谷口　義
中途半端なまま病気も治り
大阪市　江島谷勝弘
内緒です三万もする本を買う
米子市　池田　美穂
止め時をお互いさぐる御中元
松江市　栂瀬みちを
願い事ないが賽銭つい投げる
鳥取市　岸本　孝子
お賽銭もっともっとと落ちる音
生駒市　飛永ふりこ
一言を思いとどまるのも修行

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句363名）



「浅　い」　水野黒兎　選

傷口は浅いと他人だから言う　鳥取市　倉益　一瑤
柳歴は浅いが年は食ってます　岡山市　永見　心咲
老人になってまだまだ日が浅い　貝塚市　吉道あかね
浅緑しずくが光る雨あがり　大阪市　宇都満知子
プライドが傷は浅いと言わせてる　大阪府　大浦　福子
浅漬の旨さに辿り着くグルメ　出雲市　竹治ちかし
浅漬けの胡瓜パリパリ初夏の音　豊中市　貝塚　正子
浅漬けがこんなに旨い二日酔い　越谷市　久保田千代
浅い傷たくさん負って強くなる　大阪市　平賀　国和
浅い傷なのに心の皿割れる　岡山県　藤澤　照代
浅葱色新選組はニューモード　堺　市　奥　時雄
不始末のお詫びの礼が浅すぎる　大阪市　川端　一歩
金利ゼロおっとそれより預金ゼロ　弘前市　髙瀬　霜石
家ごもりいつの間にやら夏茶碗　豊中市　池田　純子

「浅　い」　鴨谷瑠美子　選

取り繕うほど透けてくる浅い智恵　枚方市　藤村　亜成
出会いから日は浅くとも知己の友　西宮市　髙橋千賀子
とりあえず傷は浅いと言っておく　尼崎市　藤井　宏造
不始末のお詫びの礼が浅すぎる　大阪市　川端　一歩
知ったかぶりの天狗の鼻はすぐ折れる　松山市　栗田　忠士
傷口が浅いうちにと畳む店　羽曳野市　藤原　大子
浅からぬ仲だツンデレ派手なツン　堺　市　澤井　敏治
何冊もの辞書で補う浅い学　大阪市　宮崎シマ子
浅いまま静かなままで老いの恋　堺　市　矢倉　五月
一晩で忘れる恋で助かった　大阪市　榎本　舞夢
退院日浅い感謝で恥じる今　羽曳野市　磯本　洋一
目立たないように浅瀬で群れている　三原市　鴨田　昭紀
浅い色重ね重ねて夫婦色　神戸市　山口　光久
浅はかで一徹だった今にして　大阪市　田中ゆみ子

浅知恵に乗ったばかりに底が無い　大阪市　柴本ばっは
浅知恵が表面だけをなぞってる　堺市　村上　玄也
窓際で浅い知恵出ししがみつく　河内長野市　藤塚　克三
浅知恵の埋め立て作業捗らず　美作市　岡本　余光
右脳には浅知恵ばかり溜めている　河内長野市　森田　旅人
侮るべからずオバチャンの浅知恵　奈良市　大久保眞澄
未経験の若さが生んだあさい思慮　堺市　遠山　唯教
見回してマスクを浅くする夏日　箕面市　中山　春代
ポケットが浅くて秘密守れない　和歌山市　古久保和子
化野の浅き夢みし忍冬（すいかずら）　今治市　永井　松柏
転た寝の浅い夢にも父と母　藤井寺市　鈴木いさお
浅すぎる読みにいつしか左遷の地　宮崎県　黒木　栄子
やや浅い人の距離感ちょうどいい　大阪市　降幡　弘美
くるぶしのあたり恋愛未遂中　大阪市　栃尾　奏子
糸切り歯キラリ浅瀬の躍動美　河内長野市　村上　直樹
目立たないように浅瀬で群れている　三原市　鴨田　昭紀
身の丈の浅瀬でつつがない余生　岐阜県　喜多村正儀
浅瀬から深みにはまる恋の罠　香芝市　大内　朝子
浅い川渡れず生きた蝶の夢　三田市　稲角　優子
浅い眠り地震台風コロナ風邪　熊本市　杉野　羅天
ふかぶかと座らなかった母の椅子　富田林市　中村　恵
雑学の椅子に浅ぁく腰下ろす　三田市　北野　哲男
浅瀬には浅瀬のくらし藻が戦（そよ）ぐ　藤井寺市　太田扶美代

転ぶたび傷は浅いと自己暗示　札幌市　三浦　強一
浅からぬ縁と言われて逃げられぬ　上尾市　中村　伸子
上辺だけ百も承知の美辞麗句　奈良県　安福　和夫
浅い傷沢山負って強くなる　大阪市　平賀　国和
浅いと思い飛び込んだよね昭和の子　三次市　伊藤　寿子
馬鹿にした川の浅瀬に泣かされる　西予市　西田美恵子
軽傷で済んで良かったくるま事故　唐津市　山口　高明
浅知恵を駆使する苦吟亦楽し　美作市　岡本　余光
深浅を超えたところが悟りなり　羽曳野市　三好　専平
浅からぬ縁を辿って行く余生　三田市　村田　博
博学の人程浅学と謙虚　堺市　坂上　淳司
交際は浅いが決意変らない　和歌山市　松原　寿子
言葉尻にこだわるほどは深くない　倉吉市　牧野　芳光
傷浅いうちにと売った株上がる　大阪市　大川　桃花
浅い傷女房はなめてくれるかな　唐津市　仁部　四郎
妻想う眠りの浅い一人旅　豊中市　藤井　則彦
言い訳をすればするほど底浅い　枚方市　山口弘委智
パフェ二つとっても浅い恋でした　岡山市　工藤千代子
浅い付き合いだけど心に残る人　堺市　源田八千代
ホールインワン決まった浅いゴルフ歴　枚方市　丹後屋　肇
浅知恵が物知り顔にさせている　神戸市　敏森　廣光
大丈夫覚悟したより浅い傷　奈良県　長谷川崇明
浅かった深い本心読めぬまま　大阪市　内田志津子

慣れすぎた浅瀬に乗り上げる迂闊　三原市　笹重　耕三
浅瀬しか付き合い出来ぬ人見知り　米子市　池田　美穂
お節介すぎて浅瀬で溺れてる　和歌山市　倉橋　悦子
人の世の浅瀬に溺れとつとつと　三木市　山口ヨシエ
始めから逃げる気浅く腰掛ける　大阪市　大川　桃花
浅学を揺すれば底が透けて見え　明石市　糀谷　和郎
おはようが家族の溝を浅くする　尼崎市　藤井　宏造
浅瀬だけ歩いたことが悔やまれる　神戸市　近藤　勝正
浅みどりパッチワークの山つつじ　八尾市　山根　妙子
経験の浅さをカバーする真面目　羽曳野市　藤原　大子
浅かった縁を思う虹のいろ　和歌山市　北原　昭枝
浅はかな料簡隠すサングラス　海南市　小谷　小雪
縁浅い母子でしたね千切れ雲　河内長野市　穂口　正子
浅からぬ出会い木馬が回り出す　西予市　黒田　茂代
遠浅で広い世間を泳ぐ日々　三田市　九村　義徳
傾聴の奥浅学の悔いばかり　富田林市　山野　寿之
負けた日の浅い眠りのままひと夜　四條畷市　吉岡　修
三毛の欠伸もらい微睡む白い午後　大東市　小川賀世子
投了に悔いを残した浅い読み　南あわじ市　萩原　狸月
浅はかな私を叱る影法師　神戸市　山崎　武彦
銀行の静かに浅くかける椅子　鳥取県　斉尾くにこ
深まらぬ議論に小石投げてみる　生駒市　響庭　風鈴

浅はかさ見破られても笑み返す　芦屋市　新阜　義明
読み浅く又もや妻の思うつぼ　鳥取市　山下　凱柳
まどろみのなか亡母の声がしたような　羽曳野市　徳山みつこ
一杯のジョッキで癒える浅い傷　三田市　堀　正和
地図にない老いの浅瀬でもがいてる　奈良県　渡辺　富子
消しゴムをやたらに使う浅い智恵　堺市　柿花　和夫
広く浅く首を突っ込む好奇心　箕面市　出口セツ子
浅漬の旨さに辿り着くグルメ　出雲市　竹治ちかし
プライドが傷は浅いと言わせてる　大阪府　大浦　福子
記憶力浅瀬が多く流れ出る　河内長野市　辻村　ヒロ
この頃のわたし浅瀬でもがくシャチ　大阪市　古今堂蕉子
老人になってまだまだ日が浅い　貝塚市　吉道あかね
バイエルの上巻までのピアノ歴　鳥取市　奥田　由美
浅はかで振り回されるお人好し　大阪市　中村　峰子
つき合いは浅いがツーと言えばカー　松原市　森松まつお
遠浅の海の向うにあなた待つ　岸和田市　宮野みつ江
浅はかな知識の惑うオンライン　高槻市　初代　正彦
浅智恵で虚勢はってる私です　箕面市　酒井　紀華
まだ服欲しい悩みごとならまだ浅い　東大阪市　北村　賢子
話上手広くて浅い知識持つ　羽曳野市　宇都宮ちづる
浅知恵をつつしむ口が固くなる　寝屋川市　森　茜
先生は深い浅いと表現し　伊丹市　平井　富夫

浅はかな言の葉人を追いつめる　西宮市　緒方美津子
浅い軽い緩い余生いいじゃない　倉吉市　大羽　雄大
浅知恵を繋ぎ合わせた泥の縄　和歌山市　西川　千鶴
浅知恵をそれも有りだと言う余裕　大阪市　原田すみ子
即決が出来ず動けぬ浅い沼　松江市　石橋　芳山
記憶力浅瀬が多く流れ出る　河内長野市　辻村　ヒロ
さらさら浅瀬 君と素足になりました　桜井市　安土　理恵
雑魚たちが一番信じている浅瀬　京都市　都倉　求芽
浅はかな思考回路にアメンボウ　佐賀県　真島久美子
浅い縁でした戦死の遺骨抱く　貝塚市　石田ひろ子
遠浅のきらめき父母のいる彼岸　橿原市　居谷真理子
浅はかな夢をつないで日が暮れる　和歌山市　喜田　准一
バイエルの上巻までのピアノ歴　鳥取市　奥田　由美
遠浅の月なら万華鏡に入れ　仙台市　月波　与生
消しゴムをやたらに使う浅い知恵　堺　市　柿花　和夫
遠くまで浅いと思いこんでいた　八尾市　村上ミツ子
浅い傷いっぱい作り湯に浸る　岡山市　工藤千代子
大洪水起こした普段浅い川　和歌山市　佐藤　まき

秀　句

争いは浅い知識の中にある　鳥取市　夏目　一粋
喝采を浴びて根っこが浅くなる　松山市　柳田かおる
たとえ浅い傷だとしても春はまだ　八幡市　今井万紗子

考えが浅いといつも怒られる　大阪市　降幡　弘美
貧乏性ソファーに浅く腰掛け聞く小言　大阪市　井丸　昌紀
ほどほどに浅く腰掛け聞く小言　八幡市　今井万紗子
雑魚たちが一番信じている浅瀬　京都市　都倉　求芽
傷口は浅いと他人だから言う　鳥取市　倉益　一瑤
浅過ぎるポケット知識こぼれ落ち　大阪府　米澤　俶子
付合いは浅いが酒は深い仲　堺　市　羽田野洋介
浅学のお陰話題に事欠かぬ　犬山市　関本かつ子
浅学非才けど政界の記事を読む　吹田市　太田　昭
付き合いは広く浅くでケセラセラ　大阪市　阪本　秀子
縫い代の浅い男ですぐほつれ　富田林市　中村　恵
意気込んで跳んでつまずく浅い溝　高槻市　島田千鶴子
浅学の智恵を補う電子辞書　岡山県　藤澤　照代
投了に悔いを残した浅い読み　南あわじ市　萩原　狸月
浅学の大臣A4が頼り　札幌市　小沢　淳
浅い海けれど油断が命取り　鳥取市　夏目　一粋
即決が出来ず動けぬ浅い沼　松江市　石橋　芳山
三途の川の浅瀬を瀬踏みしておこう　香南市　桑名　孝雄

秀　句

浅はかな思考回路にアメンボウ　佐賀県　真島久美子
浅瀬でも泳いじゃならぬ酔っ払い　松江市　中筋　弘充
浅い智慧思慮するページ愚痴に成る　東大阪市　西村　哲夫

「招　く」

（投句　２４４名）

松岡　篤　選

石佛の笑顔が招く里の道　横浜市　菊池　政勝
突然に招かれた客宴仕切る　江南市　脇田　雅美
お招きを頂きなんておべんちゃら　堺　市　羽田野洋介
招待の思案に暮れる熨斗ぶくろ　大阪市　津村志華子
幸招く手相と言われ明日を待つ　河内長野市　落葉　ふみ
空席を埋める招待券もらう　岡山県　藤澤　照代
移り香が波瀾を招く朝帰り　三田市　野口真桜子
ご招待オンラインですあしからず　高槻市　島田千鶴子
一強の思いあがりが後手を踏む　堺　市　内藤　憲彦
二歳児がカモンカモンと爺を呼ぶ　岡山市　永見　心咲
招かれた上座の席が面映ゆい　和歌山市　北原　昭枝
人間の驕りが招く新コロナ　奈良市　米田　恭昌
列島に大雨招く化石賞　大阪市　平賀　国和
招待の欠にコロナの名を借りる　倉吉市　大羽　雄大
招いたら序列で悩む祝い事　札幌市　小沢　淳
グルメではないがたまには友招く　大阪市　宮崎シマ子
親切に対応しすぎ誤解生む　大阪市　坂　裕之
負けもあるだからマージャン招かれる　四條畷市　吉岡　修
深緑の森に招かれ深呼吸　羽曳野市　藤原　大子
ふるさとへ帰って来いと柏餅　松山市　奥田　忠士
招待の酒で重荷を負わされる　三田市　谷口　修平
蝶招く姉の遺した鉢の花　米子市　後藤美恵子
誘い球駆使し招いた恋ごころ　枚方市　山口弘委智
平服でどうぞと書いてあったのに　大阪市　平井美智子
主賓にと招かれ高いものにつき　三田市　堀　正和
悔い残る誤解招いた軽いギャグ　神戸市　松倉　正美
優しい声で招いてくれるのは詐欺師　大阪市　森　廣子
軽口が災い招く四・五日後　橋本市　石田　隆彦
その招き火の粉を浴びる覚悟いる　大阪府　大浦　福子
招かれた席で魂胆見え隠れ　東大阪市　佐々木満作
ユーモラスに爪を振ってる潮招き　堺　市　坂上　淳司
三世代揃って渡る胸のバラ　和歌山県　三枝眞智子

佳　句

咲いたのになぜ来ないのと拗ねるバラ　橿原市　居谷真理子
矢印の通り都会へ出た息子　南あわじ市　萩原　狸月
悪友は遊びに来いと休肝日　西宮市　緒方美津子
招かれた訳があったと後で知り　堺　市　村上　玄也
国境で招き合ってる揚羽蝶　羽曳野市　吉村久仁雄

人

招かれざる客に出番を待つ箒　堺　市　澤井　敏治

地

平服でと招きエルメスで迎える　大阪市　古今堂蕉子

天

さわやかなやる気を招く新刊書　奈良県　渡辺　富子

軸

招かれて付けたリボンに位負け

「散　歩」

（投句　２４０名）

松　原　寿　子　選

オペ終わり散歩楽しい膝の皿　鳥取市　奥田　由美
這い這いに戻らぬようにする散歩　富田林市　山野　寿之
散歩して違う角度の世間知り　丹波篠山市　澤　良子
おろおろとマスクが散歩する世相　豊中市　水野　黒兎
三千歩マスクはずせる道選って　橿原市　居谷真理子
徘徊を散歩と老いが意地を張る　大阪市　藤田　武人
マスク越しウインク交わす散歩道　堺　市　澤井　敏治
てのひらのテントウ虫とする散歩　香芝市　大内　朝子
ステイホーム運動不足散歩する　和歌山市　上田　紀子
あの人に逢うときめきのスニーカー　神戸市　山崎　武彦
専門家散歩の仕方まで教え　大阪市　古今堂蕉子
生きがいの半分は散歩の時間　海南市　小谷　小雪
所詮風　夢の世界を散歩する　土佐清水市　辻内　次根
熱中症寸前散歩から帰る　奈良市　大久保眞澄
居る場所を確かめるため歩く道　東京都　川本真理子
散歩するついでにちょっと墓参り　弘前市　髙瀬　霜石
徘徊と間違えられました散歩　藤井寺市　鈴木いさお
散歩にはマスクの要らぬ道探す　三田市　堀　正和
散歩して元気になって見せますよ　倉吉市　山中　康子
進まないペンに散歩を誘われる　貝塚市　石田ひろ子

最後まで残った趣味が散歩です　大阪市　髙杉　力
散歩道犬までマスクさせてはる　大阪市　榎本　舞夢
シグナルが無くて流れる地下散歩　丹波篠山市　酒井　健二
私を詩人にさせるポプラ径　三田市　上田ひとみ
句会なら一万歩でもへっちゃらさ　大阪市　江島谷勝弘
堂々とマスク外して散歩する　鳥取市　岸本　宏章
手応えを感じ散歩に精を出す　米子市　中原　章子
お散歩の途中でオペラ歌手になる　佐賀県　真島久美子
さあ歩け妻の愛情痛過ぎる　唐津市　坂本　蜂朗
四季の彩愛でて公園散歩する　弘前市　福士　慕情
缶ビール片手に唄う遊歩道　鳥取市　谷口回春子
歩いてるうちに心が凪いでくる　大阪市　平井美智子

佳　句

やり遂げて夕陽を抱いている散歩　奈良県　渡辺　富子
御夫婦で散歩が趣味で地獄耳　唐津市　仁部　四郎
二拍子に強弱つける杖の音　宝塚市　岸田　万彩
日々散歩できて元気に生きていく　大阪市　坂　裕之
大木のいのちに触れる散歩道　大阪府　米澤　俶子

人

たんぽぽが心の棘を抜く散歩　豊中市　松尾美智代

地

散歩して宇宙のパワー浴びに行く　大阪市　平賀　国和

天

散歩の「さ」言えば小犬がしっぽ振る　豊中市　きとうこみつ

軸

地図辿り心の散歩して京都

初心者教室

題 ― 仕掛け

高瀬霜石

これを書いているのが、6月上旬。

この「川柳塔　8月号」が、皆様のお手元に届くのが、8月上旬。

青森県の8月といえば、ご存知「ネブタ祭り」だが、4月にいち早く中止を決定。

僕の住む弘前市の「ねぷた祭り」は――青森市の、企業が主体の華やかなネブタとは違って――町内単位で制作・運行する地元に根差した、ネブタに比べれば地味な祭りなのだが、この夏は青森市に呼応して、中止と決めた。

6月上旬の今、8月のコロナの状況をとても想像できない。日本全体が終息状況に向いつつあるのか。はたまた、緩みが過ぎて、第2波、第3波が押し寄せ、再度「緊急事態宣言」が発令されているのか？ 大体、僕が生きているのか？ でも、これを読んでいるあなたは大丈夫ですね。おめでとう。

①いつものように、まずは上と下を入れ替えてみる。何故入れ替えるのか？ それは勿論、句をよりドラマチックにするためだ。

（▼が原句。▽が参考句）

▼あらい熊下手な仕掛けに裏をかく　えい子

テレビで見たりするけれど、あらい熊がその辺にいるんだ。ビックリ。

▽下手くそな仕掛けを笑うあらい熊

▼文化祭壁の後ろに仕掛け人　(高)弥生

▽裏方がほんとの主役文化祭

▼ボワロ解く死のからくりに息をのむ　風鈴

▽息をのむボワロが謎を解いてゆく

▼サプライズ緻密な仕掛けあってこそ　秀爺

▽綿密な仕掛けがあってサプライズ

▼色仕掛けその誘いには負けそうで　義明

「色仕掛け」とはまた古めかしい。ニュースでたまに見る「ハニートラップ」。僕もアレには、100％引っ掛かるだろう。仕掛けがあれば、「誘い」はいらない言葉。カットし、シンプルに。しかも大げさに。

▽負けそうだまた負けそうだ色仕掛け

▼仕掛け花火でもいちど見たいあの滝を　ゆき

よりドラマチックに仕上げるには、

▽もいちど見たい仕掛け花火のあの滝を

▼夏祭り夜空を焦がす仕掛け花火　マユミ

下六がどうも。ここはあえて上を重くして、

▽仕掛け花火が夜空を焦がす夏祭り

▼腰膝は出掛ける前にもう悲鳴　弘

この句も、上が重くなっても、

▽出掛ける前に悲鳴あげてる腰と膝

②「色仕掛け」の句もそうだったが、余分な言葉を大胆にカットして、よりシンプルに。

▼炊飯器予約忘れることが増え　勝正

▽予約また忘れたままの炊飯器

▼フィナーレはナイアガラ滝夏祭り　通則

「ナイアガラ」とくれば、「滝」は不要。

▽フィナーレはさあナイアガラ夏祭り

▼お見合いで真逆を演じゲットした　(樫)良子

あえて全部を言わない（報告しない）。そうすれば、よりドラマチックに。

▽お見合いの席で真逆を演じきる

▼コロナ罠パチンコ店へ人の波　アキコ

ンー、これだと単なる報告。自粛要請に従わなかったので、批判が多かったパチンコ店だが、ここは視点を変えて、パチンコ店の経営者の目線で詠んでみる。

▽コロナ様様パチンコ店は人の波

▼このトイレ仕掛け多くてうろたえる　不二夫

不二夫さん。お気持ち、よーく分かります。でも、ここは、言いたいことをグッとおさえ「うろたえる」をカット。言い切らない。

▽新しいトイレ仕掛けが多すぎる

▼裏をよみ仕掛けたはずが返り討ち　のぞみ

「仕掛け」があれば、「裏をよむ」はいらない。シンプルに。

▽仕掛けたはいいけど返り討ちにあう

▼30K過ぎ一気に仕掛けギア上げる　厚　江

▽30K過ぎて一気にギア上げる

③この句想で（この場面で）、この言葉（単語であれ、助詞であれ）が最適だろうか。

▼地球号揺れてコロナという仕掛け　令位子

発想はとてもいいのだが、焦点が絞れていない。せっかく「地球号」と「コロナ」の組み合わせを見つけたのだから。

▽地球号揺れるコロナという波に

▼人形に命吹き込む指のタコ　眞智子

この句も、せっかくいい句想なのに「タコ」が残念。だって、美しくないでしょうが。

▽人形に命吹き込む指の先

▼目をこらすマジックショーの種明かし　閑

もう1歩踏み込んで、舞台を楽しむ。

▽笑っちゃうマジックショーの種明かし

▼引っ張ると仕掛けの罠が解け出す　(森)廣　子

▽引っ張るな仕掛けの罠が解け出す

▼摘果作業豊かな秋の仕掛け人　一　平

作業しているのだから「仕掛け人」カット。

▽摘果作業豊かな秋を待つばかり

▼人生の仕掛けがさせた途中下車　くみ子

ちょっと手の入れ過ぎか。失礼。

▽道草の楽しさ知った途中下車

○は佳句。◎は優秀句。

○パンデミックまるで戦争起きたよう　ひでお

○正直ネあなた詐欺師にゃなれないワ　蟻日路

○あの人が褒めてくれたら要注意　寧

○これで良し手ぬかりはなしでも不安　千　代

○仕掛けとも知らずまんまと落ちました　千賀子

○仕掛けられた喧嘩ひたすら逃げて勝つ　(加)佳　子

◎夫婦にも監視カメラがいる時代　(澤)良　子

◎今のうち古い手帳は捨てておく　崇　史

今回の卒業生は2人。1人目は、神戸市の松倉正美さん。正美さんは、リズムも整い、しっかり地に足が付いた作句力の持ち主。これからは、そこから1歩踏み出して、あえて別な角度からの作句に挑戦して欲しい。

○仕掛けたり仕掛けられたりラブゲーム　正　美

○見え見えの手品のネタもご愛敬　正　美

◎うっかりと罠に掛かって半世紀　正　美

これはこれで、勿論いいのだが、この句は受け身（被害者）。個人的には、「しっかりと罠を仕掛けて半世紀」とかの方が、痛みが自分にあり、より川柳的であると、僕は思う。

もう1人の卒業生は、豊中市の齋藤奈津子さん。今まで卒業していなかったのが不思議。ひょっとして、とっくに卒業していたのに、また投句してましたか？とても新人とは思えない。句に落ち着きがある。つまり、心に余裕があるということ。遅すぎた卒業です。

○タイマーを仕掛け忘れた朝ごはん　奈津子

この句想はわんさかあった。あったが、こんなに素直にきれいにまとめたのは彼女だけだ。誰でも書けそうだが、実はそうではない。

◎ミシン出しいよいよマスク縫う準備　奈津子

いいですねえ。タイムリーですねえ。

○カップ麺お湯を入れたらご来客　奈津子

この落差が面白い。卒業おめでとう。

「仕掛け」予告では、居谷真理子担当でしたが、都合により霜石に代わりました。

川柳塔鑑賞

同人吟　古久保　和　子

―7月号から

日めくりを破る昨日の音がする

糀　谷　和　郎

昨日はもう過去と、けじめをつけて次のステップに挑む意欲が伝わりました。作者の生きる姿勢の力強さを感じます。

鉛筆をナイフで削る雨の音

辻　内　次　根

スイッチ一つ、指一本で何でも動かせる時代に、鉛筆をナイフで削って集中力を高めているのでしょうか。アナログ人間の時間の使い方も、案外心豊かにしてくれそうです。

一心に夢追いかけてまだ傘寿

藤　井　則　彦

夢は追いかけるもの、捕まえてしまうと消えるものだと思います。傘寿とは言わず、卒寿、白寿とまだまだ追いかけて下さい。心意気に拍手を送ります。

かすり傷だったか御飯もう美味い

原　田　すみ子

物事は考え方次第、立ち直りの早いのは、常に前向きの姿勢で立ち向かっているからでしょう。

マヨネーズしぼり出したら句になった

山　縣　のぶ子

句は考え過ぎると欲が出て、自分を見失ってしまう事があります。何気ない日常から生まれた句は共感を呼びます。

反省はするが後ろは振り向かぬ

石　田　ひろ子

失敗をばねに立ち上がる、前向きな姿勢に作者の心意気を感じます。

一日の余白いとしむバスタオル

安　土　理　恵

充実した一日の終わりに見つけた自分だけの時間。充実に労ってあげましょう。

千年の恋をひもとく閉じこもり

西　口　いわゑ

外出も控えなければならない昨今、一冊の本の中へタイムスリップして遊ぶのも、また一興。

原石を転がすダイヤとも知らず

小　野　雅　美

知らないことは良い事です。知ってしまうと邪心が生まれて進めなくなります。物の価値観はその人次第でしょう。

生きがいの重荷下してよく転ぶ

栂　瀬　みちを

満たされると油断が生じることが世の常、まだまだやる事があるからこそ、平穏無事を実感するのでしょう。

愛なんてペットショップで売ってるよ

居　谷　真理子

ペットブーム、人は何を求めているのでしょうか。人間同士の愛は何処へ行ったのでしょうか。

唇にメロディー指先に毒牙

栃　尾　奏　子

現在の世相に斬り込んだゾクッとする

一句です。今こそ、絆を大切にしませんか。

約束を想い出そうとせぬ小指

太田　扶美代

誰でも一度はあったはずの甘い思い出も、時とともに風化。劣化が進んで行くのは仕方ないこと、小指に新しい約束をさせてあげませんか。

この僕に待つ人がいるボランティア

小沢　淳

人のお役に立てることに喜びを持っている作者の姿勢に頭が下がります。

スティホームこんなしんどいことだとは

丹下　凱夫

世間の状況によりのスティホーム。外があるから内がよいと実感されたのでしょう。

のんびりと畑で土と会話する

伊塚　美枝子

土に話しかけながら、美味しい野菜や花を作る。豊かな時間を過ごしている作者は羨ましい限りです。

アルバムが記憶の扉ノックする

九村　義徳

誰でもアルバム整理に時間がかかる原因が判明しました。納得の一句。

広告にもたれて走る市営バス

山東　日出男

空席ばかりの昼間の市営バスが、何のために走っているかが解ったような気がします。

前髪も切った水着も用意した

田中　ゆみ子

準備万端、これでカナヅチとは言わせません。

まだ足が気の向くままについて来る

田中　恵

行きたい所へ自分の足で行ける幸せは、何物にも代えられません。元気な足に感謝して、時々は足湯で癒してあげたらいかがでしょうか。

次から次身辺整理拍車掛け

榎本　舞夢

随分ため込んだものだと、自分に呆れながら、エイ、ヤッと思い切って整理、すっきりと次のステップへ。まだまだやりたい事は沢山ある。自分の一生を後悔しないために。

老化だと思わず進化だと生きる

片岡　智恵子

もの事は考え方次第、進化と考えれば次に打つ手は沢山あるはずです。前向きの作者の姿勢に勇気を頂きました。

一日の長さに耐えている金魚

平井美智子

人間界はコロナ感染症で外出もままならず、一日を持て余している人も。金魚も自粛に耐えているのでしょうか。

長電話「ところでマスク足りてるか」

中山　春代

行列しても手に入らなかったマスクが今や投げ売り状態です。あの騒動は一体何だったのでしょうか。

只より高い物はないマスク拾万円

谷口　義

アベノマスクも給付金拾万円も、結局は私たちの税金なんですって。

阪急電車喧嘩のように擦れ違う

古今堂蕉子

ハハハ　電車を擬人化して傑作。

水煙抄鑑賞

―7月号から

米田恭昌

幸せはそのあたりだとナビの声

廣田和織

「そのあたり」だと言うナビの無責任さが面白い。考えてみれば幸せとは人それぞれ思い方で、ナビの言う通り今現在の暮しが幸せなのかも知れない。

ユニークと言われ思わず苦笑い

花岡順子

私も経験している。変わってると言われると何かムッとくるが、「ユニークやね」と言われると、まあいいかと納得してしまう。きっと苦笑いしながら。

目が覚めて生きているぞとただ嬉し

室田行久

闘病中の作句に頭が下がる。大手術の後麻酔から覚めて、「ああ生きていた」と実感されての一句でしょう。まだまだ生きられて川柳を楽しんで下さい。

目で笑いマスクの下で毒を吐く

降幡弘美

本当の笑顔に会えぬマスク顔

中山昭美

この二句の目は笑ってはいるが、本当の笑みではない。作り笑顔です。特に一句目は無気味です。目は口ほどにものを言うと言いますが、マスクの中ではきっと赤い舌を出しているか、ひょっとして毒を吐いているかも――これは怖い。

食い倒れの大阪沈んでいる姿

柴本ばっは

グリコのネオンでお馴染の道頓堀界隈の賑わいも、自粛中はさすがに静寂で沈んでいたが、解除後少しずつ元に戻りつつある中で、この九月にはふぐ料理の老舗「づぼらや」が閉業、コロナ倒産です。また昭和がひとつ消えていきます。

葬式も結婚式もオンライン

前川善之

コロナ禍による休校休社もオンラインやテレワークに随分救われている。やがて結婚式、葬式もオンライン化されるかも。この句に、時の流れに翻弄され戸惑っているアナログ派の心を垣間見る。

粋な科白祖母がしびれる時代劇

米田利惠子

遠山の金さんが桜吹雪を散らすお白州の場面か、赤城山での国定忠治の名場面だろうか、おばあちゃん共々時代劇ファンにはたまらない。因みに私は今も赤城山の忠治の科白は空で言えます。

話題つきぬコロナコロナで立夏過ぎ

仲西賛郎

桜も相撲も高校野球も見ずに、家に閉じ籠り、解除され外に出てみたら早や梅雨の入り、コロナに振り回されてました。

美人にドキドキ僕の血まだ赤い

上山堅坊

まだ恋ができそうときめきが止まぬ

中前幸子

長寿、健康の秘訣は昔から常に異性を意識し、恋心を忘れない事と言われています。お二方いつまでもお元気で。

長寿社会まだまだ八十路光ります

谷英也

日本人の平均寿命男81歳女87歳が最新の報告。英也さんは八十路、私は八十路も半ばすぎ、各自へのエールとして拝読しました。頑張ろう―無理せんと。

追悼

海老池　洋さん

伊達郁夫

すらっとした長身。ステッキ片手に、背筋をピンと伸ばした、正に英国紳士の出で立ち。そのお姿が目に浮かびます。4月28日、突然の訃報に接し驚きました。

ご子息からの伝聞では、ずっとお元気のところ、4月15日急変されたとのことです。洋さん宅とは、ご近所で、よくご夫婦で散歩されていました。ほほえましいお姿でした。よくバス停でお会いして句会に同行させていただきました。私にとっては、川柳の教師であり、尊敬する大先輩です。

川柳の門を叩いた頃、「郁夫さん君は川柳の筋はまあまあだけど、川柳活動の目標を持たないと駄目だ」と言われました。この言葉が今でも耳から離れません。

枚方市川柳教室・ねやがわ川柳・パナソニック電工松寿会等ご一緒のご縁を頂き、時に触れ、川柳談義を教わりました。洋さんは川柳談義を始めると、熱が入り、長時間にわたり川柳の自説を続けられました。私の川柳の糧になり、教科書になりました。

昨年末、枚方市から千葉市に移られてからも本社句会。松寿会等に投句され、お元気の様子と喜んでいました。まだまだ教えて頂くことがあったのに…。

柳歴は、平成3年　NHKカルチャー教室に入られ、平成5年　川柳塔同人になられました。そして、平成9年　一路賞。平成12年　路郎賞準優秀作1席賞。平成29年　檸檬賞と次々に大賞を受賞されました。

パナソニック電工松寿会では、大御所的存在で、その威容に圧倒されました。ねやがわ川柳では、殆ど毎年、年間賞を取られ、その偉業にただただ感服していました。〝川柳の大輪が落ちた〟正に、その感があります。

私の心に残る洋さんの句を選びました。

偶然も神のシナリオかも知れぬ
俗人も詩人にさせる夕紅葉
親孝行した気にさせる墓参り
モナリザの微笑は苦笑かも知れぬ
花いっぱい咲かせ幸せそうな土
人間を監視カメラは信じない
下積みの石に涙の跡がある
躓いたらあかんと女嬉しそう
円空の刻む仏に母の慈悲

洋さんの最後の句

ダイヤより光る十指という宝
終焉の美学と思う花吹雪

洋先輩本当にありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。安らかにお眠りください。

合掌

『麻生路郎読本』余滴 (59)

路郎の「川柳人協会」⑦

桒原道夫

昭和12年に勃発した日中戦争が長引く中、近衛文麿首相は新体制運動を推進するために、昭和15年10月に大政翼賛会を結成した。新体制運動とは、挙国一致の戦時体制の確立を目的とした国民組織運動である。

川柳界においては、内閣情報局・大政翼賛会文化部後援のもとに、昭和15年12月19日、東京で「日本川柳協会」が結成され、大阪でも昭和16年2月2日に大阪支部が発足した。一言でいえば、「日本川柳協会」は、戦争を遂行しようとする国策に協力するものだった。その「日本川柳協会」に、「川柳人協会」の路郎は参加しなかった。

堀口塊人は、「昭和川柳」昭和16年4月号に「大阪柳界の全國的意義」を発表し、「日本川柳協会」に参加しない路郎のことにも触れている。それに対して、「川柳雑誌」同年5月号で、高鶯亜鈍（川柳塔同人・藤村亜成氏の御尊父）が、3ページにもわたる痛烈な反論「川柳仁義　堀口塊人に告ぐ」を寄せている。塊人の文章を紹介しながら、それに対する亜鈍の反論を見ていくことにする。

〈各地に川柳協會が結成せられ、府縣を單位とする川柳家の團結が固められて行くのは同慶の至りである。わが大阪に於ても着々この全國的な動向に歩調を合せすでに創立せられたる、日本川柳協會大阪支部を中心として種々の打合せが行はれて居るが、未だ具体的に報告するまでには至つて居ない。事務的に見て大阪は地方の一府縣にすぎないが、川柳的に見れば全國の中心地である。しかも量的に中心たるのみならず、質的にも全國柳界の指導的立場にあると言つても過言ではあるまい。〉

これに対する亜鈍の反論。

〈日本川柳協會大阪支部の場合、全國的な動向と歩調を合してゐる様を、さもイソ〳〵と嬉しさうに語つてゐるが、量、質共に全國の中心地であり、經濟的にも全國に冠たる柳誌を持つ大阪の川柳界が假令（たとい）、事務的にしろ、東京本部の指令を何故仰がねばならぬか、これも可笑しい。塊人にして、それ程自信もあり、矜恃を持つなら、何故大阪に於てこそ、事務的に日本川柳協會本部を創らないのか、手取り早く言へば、既に麻生路郎氏が、數年前今日あるを豫測して――かどうかは知らないが、その名も川柳人協會を創立し、全國的柳人の組織を持つた事を御存知なきや。柳界の中心が大阪にあると信ずるなら、此の翼賛文化組織に既存の川柳人協會を發展解消せしめての日本川柳協會を大阪に打ち建てる可く、努力を何故しなかつたか、塊人も川柳人協會の名譽會員であるなら、それを先づ最初に考へて然るべきであつた。東京の雀郎や三太郎等の本部の指令を難有（ありがた）がつて受けねばならない大阪の川柳人の間抜けさ加減に愛想が盡きるのは路郎氏ばかりではありませんぞ。〉

塊人の文章の続き。

〈職業の川柳家をもつて任ずる麻生路郎氏を主幹とする「川柳雑誌」はその異色ある編輯ぶりをもつて知られて居る。主幹が職業川柳家である事は、必ずしも川柳そのもの、質的向上を意味するものではない。

生活の爲の廣告主、生活の爲の後援者に對する氣兼等によつて、文學的には反つて惰(ママ)落する場合すらあり得ると思ふ。然るに、路郎氏はこの至難なる道に、よく善處せられ、職業川柳家として質的向上に努力せられて居るのは敬服にたへない。〉

これに対する亜鈍の反論。

〈當り前の話である。敬服するもせぬも、路郎氏が職業川柳人になつて墮落すれば寧ろ不思議であり、もと〳〵柳界の墮落を革進(ママ)し掃蕩する爲に、雄々しくも日本に（世界に）唯一人敢然と川柳職業人を宣言したのである。川柳職業人を玄人と見、でないものは一切素人とみた場合、双葉山が墮落すれば角力取も横綱もオヂヤンだし、將棋の木村名人が墮落しても、アカンやうに、一旦その道の職業人（專問(ママ)家、生活者）路郎氏が墮落でもしたら、川柳で絶對に生きてゆけない、眞劍なものがある事を知る可きである。（中略）塊人の如く、別に會社員といふサラリーマンのやる川柳だつたら、＊1「昭和川柳」が、「番傘」を飛び出して以來の意氣込みもどこへやら、○○川柳やら、○○川柳やら、それから生活川柳がどうしたのか忘れてしまつて、＊2「龍」や「赤煉瓦」の愛想つかしを受ける程無節操でもあり、不仕鰆(ふしだら)でもあり、明かに川柳道の墮落で、それでも晝日中(ひるひなか)大きな顔をして歩きもし、書きも出來るのである。それが素人故に通りもするのだ。尙廣告主や後援者の氣兼ねから文學が墮落する場合もあるといふ、懸念も亦全然ない事も御承知願ひたい。川柳職業人は、川柳に熱心でさへあれば氣兼ねも、へつたくれもないのである。双葉山は角力に熱心であり、強くさへあれば、後援者にも協會にも氣兼ねする必要は全然ない。後援者が墮落さすのではない。墮落さす後援者は本當の後援者ではないからである。そこで廣告者の氣兼ねといふことだが、それは職業川柳人にとつては、やはり氣兼ねも糞もないわけだ。作家、横光利一や山本有三が仁丹の廣告に氣兼ねして、小說を書きますかね。それから彼らの文學と仁丹とどんな關係がありますかね。たゞ路郎氏の場合、川柳職業人であり、且つ營業雜誌である「川柳雜誌」の經營者であるといふ兩方を一つの身に持つ混同さから塊人が、たま〳〵生活の爲の廣告主に對する氣兼ねと言つたとすれば、少しは判らんでもない。然し川柳の雜誌で、「川柳雜誌」以外の營業雜誌も亦これ全國に（世界に）一册も無いのに、墮落する場合もあり得るといつた比較も、例も成り立ちはしないではないか。

而も、雜誌經營者として、雜誌の體裁、宣傳、賣行等考慮に入れる事は、その經營の收入の大部分を占める廣告主に對する思惑をするのは當然である。だからと言つて、「文藝春秋」や「改造」や「主婦の友」の執筆者が墮落する等は考へられないし、從つて雜誌そのものゝ內容が墮落する事もあり得ない。廣告など入れたら雜誌の品が落ちる位にしか考へない、ポケット・マネーを出し合つて出す坊ちやん連中の同人雜誌みたいなものと同列に論じて貰ひたくない所以である。大體さういふ思考のもとに塊人が餘計な心配をしてゐるとすれば、それが小兒病的と言ふのである。〉

＊1　塊人は、岩崎蟬古(がじゅう)、加賀破竹、永先芽十(ひぐらし)、宮田夕蜩(せんこ)等と昭和10年6月「番傘」同人を辞し、翌月「昭和川柳」を発刊した。

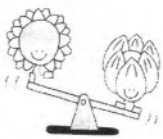
＊2「龍」は岩崎蟬古、「赤煉瓦」は八尾緑波等の柳誌。

（次回に続く）

（投句222名）

長かった自粛生活にも一応めどがついて、とは言っても不安はどこまでも拭えないけれど、出かける必要が生じたりすれば、やや足元が軽くなっている自分に気付きます。川柳の教室なども六月からはぼつぼつ始めるところも出てきました。大会や句会が再開される日もそう遠くはないと楽しみにしています。

では、ナビをどうぞ。



巣籠りの時間潰しも種が尽き　大阪市　内田志津子

（評）何か月も家に籠っていると、あれもやったしこれも済んだ、さあ、次は何をやろうかしらと考えるのも大変です。

経済と命が天秤にかかる　朝霞市　前田　洋子

（評）非常事態宣言が長引けば当然のことながら経済に多大な支障をきたし、かと言ってコロナは怖いし、ああ。

水を抜く池から逃げた鯉のぼり　大阪市　奥村　五月

（評）池の水を全部抜くテレビを見るとびっくりするような魚が出てきたりしますが、鯉のぼりとはすごいですねえ。

ご冗談　私の方が美人です　鳥取市　永原　昌鼓

（評）どなたと比べられても負けませんよ、この自信はウラヤマシイです。美人とはオールマイティーですもの。

若いだろまだ靴下を立ってはけ　大阪市　髙杉　力

（評）こんなことが出来なくなるとは想像もしなかったのに。確かに靴下を立ってはけばヨロヨロ致します。

友達も体重だけは明かさない　黒石市　北山まみどり

（評）親しき中にも何とやら、という訳で聞けないことや言えないことがあるのです。ウフフ。

恋なんてこんな感じね無重力　明石市　糀谷　和郎

（評）恋の句を軽やかに詠まれるとはステキですね。エッ、創造だけだって、でもステキ。

競うのをやめる輝き出してくる　大阪市　栃尾　奏子

（評）誰かと競い合っているうちは余裕も無いものです。オンリーワンに気付けば後は輝くのみ。　鳥取県　斉尾くにこ

良心は5キロ背徳心2キロ

（評）引き算をしてもまだ良心が3キロも多い。良かった，と安心しきれないのは人の心の移ろいやすさのせいかも。　羽曳野市　吉村久仁雄

爺ちゃんは本気だ勝ちを譲らない

（評）心優しい爺ちゃんも、今日ばかりは何時もと違うみたい。何がこんなにまで爺ちゃんを本気にさせたのかしら。

※

弘前市　稲見　則彦
わたし達仮面夫婦と呼ばれます
唐津市　仁部　四郎
奥様を今更よそとくらべても
橿原市　居谷真理子
お日様がこぼれて蕾ノックする
三田市　堀　正和
マスクせず遊んでみたい遊園地
米子市　八木　千代
モネ・ゴッホわたしの中の水よ火よ
三田市　谷口　修平
薬だと思って飲んでいるお酒
尾道市　小川　道子
灰汁抜きをしたら私でなくなった
笑面市　出口セツ子
経済重視すると命が軽くなる
弘前市　髙瀬　霜石
現実はクール　上がらぬぼくの株

長野県　丸山　健三
延期ですいや中止だと聞こえたよ
男鹿市　伊藤のぶよし
笑うたび心がスーと軽くなる
大阪市　森　廣子
どの花もみんな綺麗で淋しがり
尼崎市　近兼　敦子
あなたよりきっと私の方が好き
弘前市　福士　慕情
一兎を追う一兎に的を絞れない
大阪市　江島谷勝弘
元気だな　きっと真上に太陽が
松山市　大内せつ子
軽くなったのみんなに愛をあげたから
鳥取市　倉益　一瑤
その位置で私の長所見えますか
尼崎市　清水久美子
自己主張し合う割には馬が合う
大阪市　古今堂蕉子
重みない援助でしたわマスク様
豊中市　上出　修
文春砲大臣の椅子吹き飛ばす
鳥取市　山下　凱柳
パッと花咲く妻に芽が出ぬ亭主
尼崎市　藤田　雪菜
シーソーが過去と未来を行き来する
大洲市　花岡　順子
ヤジロベエまだ修正のきく傾斜
松山市　柳田かおる
新しい恋ですキープ・ディスタンス

三原市　笹重　耕三
家ごもり解けてゆるゆるにさせる
大阪市　平井美智子
二メートル空けて縄跳び鬼ごっこ
岡山市　永見　心咲
路郎忌は父の命日ですかしこ
仙台市　月並　与生
菜食主義だからバランスがいいの
大阪市　石橋　直子
半袖のTシャツですむ季節好き
松山市　郷田　みや
太陽の重さ測ってみましょうか
鳥取県　竹信　照彦
旬の無い野菜で調理するテレビ
佐賀県　真島久美子
井戸を掘る話は遠い遠い国
防府市　坂本　加代
日本の歴史の奥に蓮の花
東大阪市　北村　賢子
生きるとや自分自身の根比べ
河内長野市　山岡冨美子
勝敗は言わないおんな対おとこ
大阪市　田中ゆみ子
シーソーに乗せたらあかん妻と母
箕面市　酒井　紀華
ヒマワリも蓮も好きです二重奏
高槻市　松岡　篤
五十年太郎と花子共白髪
今治市　永井　松柏
結局は正義の目方売りをする

東京都　川本真理子
それぞれの生き方　それぞれの重み
大阪市　小野　雅美
顔上げて話を聞いてあげるから
神戸市　冨永　恭子
この立場逆転する日近そうだ
生駒市　飛永ふりこ
ついついとチャームな君に乗せられる
豊中市　藤井　則彦
テレワークか出社するかと迷う朝
池田市　上山　堅坊
飾るもの笑顔のほかはありません
三田市　尾崎　一子
不況禍でスーパーマンになるチャンス
大阪市　岩崎　玲子
体重の増減ばかり妻平和
米子市　後藤　宏之
人間が軽いからほれこのとおり
石川県　堀本のりひろ
図書館は文人たちのゆりかごに
松山市　宮尾みのり
今が旬女盛りに歳は無い

10月号発表
(8月15日締切)

(平本　霧石人　画)
柳箋に2句

川柳塔社各賞選考規定

① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年10月に表彰する。

② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。

③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。

④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。

⑤ 二賞の選考委員は、その任期中は賞の対象としない。

⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、下記の通り定める。

⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。

⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ5句ずつ選出した10句中から主幹が決定するものとする。

⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。

（備考）

この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成二十七年から実施するものとする。

二賞選考規定

① 路郎賞　川柳塔欄の入選句から5句

川柳塔賞　水煙抄欄の入選句から5句

昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、**8月10日必着**で本社宛郵送する。

② 第一次選者は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長とする。各賞15編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（5点）、第二席（4点）、第三席（3点）、第四席（2点）、第五席（1点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。

④ 第二次選者

本社関係　主幹・理事長

地方関係　【4】＝ブロック　（11）＝選者数

【東日本】（2）北海道・東北・関東・信越・北陸・東海

【近畿A】（4）大阪

【近畿B】（2）滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山

【西日本】（3）中国・四国・九州・沖縄・海外

合計13名

地方関係の選者は、適宜交代制を取り、均衡をはかることにする。

⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に6ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

令和二年　二賞選考委員

第一次選者（5名）

小島　蘭幸・新家　完司・川上　大輪・木本　朱夏
西出　楓楽

第二次選者（13名）

本社関係（2名）

小島　蘭幸・新家　完司

地方関係　【4】＝ブロック　（11）＝選者数

【東日本】（2）北海道・東北・関東・信越・北陸・東海
三浦　強一・金子美千代

【近畿A】（4）大阪
江島谷勝弘・籠島　恵子・鈴木いさお・平井美智子

【近畿B】（2）滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山
大久保眞澄・山田　葉子

【西日本】（3）中国・四国・九州・沖縄・海外
鴨田　昭紀・松本　文子・川﨑ひかり

昨年九月から今年八月の間に誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いのないようにお願います。

令和二年　各賞選者

愛染帖賞　新家　完司

檸檬賞　水野　黒兎　鴨谷瑠美子

一路賞　初代　正彦　久保田千代

各地柳壇賞　藤村　亜成　山本希久子

116

お墓参り

信仰の自由については、日本国憲法第二十条で保障されていますので、「墓など無意味」と言う人がいても誹謗できません。しかし、「亡くなった人の魂は存在するか否か」等という難しい話は別として、近況報告や愚痴や悩みを聞いて貰うなど、お墓を心の拠り所としている人もたくさんおられます。

墓建てておく仏壇買うておく　小島　蘭幸
名を名乗るほどではないが墓建てる　寺川　弘一
デハ、晴雨兼用の墓でも建てよか　奥室　数市
メイド・イン・チャイナおむつも墓石も　福西　茶子
茶を入れて夫婦に墓地を買う話　矢野幸二郎
懐に重たい墓の見積書　隠岐耕四郎

先祖伝来の墓が近くにあればいいのですが、永住すると決めた所が墳墓の地から遠く離れていると、近くに墓を移すか、新しい墓を建てたいと思うのは懐に余裕が出来た証。

墓の素材は風雪に耐えられるように「石」が一般的ですが最近は中国からの輸入品が安くて人気があるようです。まあ、精密機械でもないのでご先祖も我慢してくれるでしょう。

墓参り息子まかせの盆の入り　都倉　求芽
決めかねる思いもあって墓参り　太田扶美代
おみくじは大凶墓参りをする　夏目　一粋
花買って行ったお墓に花があり　中村まどか
バスの時間に合わせて終わる墓参り　塚越　育子
墓参りもう帰るのと言われそう　北田のりこ

お墓参りに出かける時期は、亡くなった人のご命日とか、春と秋のお彼岸、そして一番多いのが「お盆」です。しかし、ご先祖さまは墓から外出して不在ということはありませんので、お参りする人の都合に合わせても構いません。怠けて出かけないのではなく、「仕事が忙しくて…」という理由なら、ご先祖さまも許してくれるでしょう。

次世代を預ける孫と墓まいり　竹山千賀子
墓花のほおずき揺らすのは仏　木見谷孝代
殴られた恩師の墓を撫でて来た　武井　猛
わたくしを美化するために墓まいり　土屋起世子
お盆ですお墓の前で待ち合わせ　山田のり子
行く所ないとき墓へ行ってみる　井本　清山

殴られた恩師の墓を殴りに行ったのではなく「撫でてきた」のは、恩師の想いが今頃になって胸に沁みてきたのでしょう。

特に「行く所がない」ときにはパチンコや競輪競馬よりもお墓がいいでしょう。そして、帰りには美術館か図書館に寄れば、身も心も清々しく充実した一日になります。

子どもたちが遠く離れて、後を継ぐ意志がなければ、いずれ墓は荒れ放題になるだけです。菩提寺と相談の上で丁重に「墓仕舞い」をするのもご先祖への務めでしょう。

墓参り来る人みんな高齢者　多田　雅尚
親不幸の息子と詫びる親の墓　中堀　優
この墓に居ないとしても掃除する　鹿田まさお
立派でも他人の墓は拝まない　内田　喜重
あらかたの墓はこの世に忘れられ　白石維想楼
千の風吹かなくなって墓じまい　浅川和多留

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。　編集部

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

桜の葉かけ蒲団して眠る餅　一雄
上げ底で我がもの顔の土産菓子　昇
肩の荷を忘れて帰るバスツアー　起世子
浅はかな夢をつないで日が暮れる　准一
バス停に小さな母が見えてくる　菜摘
浅からぬ縁を育むバス旅行　かず子
こつこつと浅瀬で積んでいる小石　八重子
新しい空気と喋り出す花野　美枝子
翔びながら模索している着地点　純子
アクセントつけて暮らしをリフレッシュ　宏枝
レタス剥ぐ若い自分が見えるまで　ひろ子
乗客がゼロでも定時発のバス　保州
経験の浅さをカバーする熱意　敏照
時刻表バスにはちょっと荷が重い　よしこ
詮索はしません興味ありません　知香
バス一台遅らせて見た八重桜　あき子
悠久の刻をしだれている桜　明子

エブロンのポケットにある浅い知恵　昭枝
浅学の乏しい語彙に四苦八苦　まき
散り際の美学桜に教わろう　富香
来年を夢見て自粛する花見　日出男
浅学非才口先だけの名誉欲　智三
桜咲く方程式を解くように　幹子
耳の痛い話は椅子に浅く掛け　俶子
重い足ひきずり戻る現住所　理恵
夕焼けを乗せて家路へ急ぐバス　和子
エリートがこの浅知恵を借りに来る　当代
花吹雪臥せてる母の窓も春　眞智子
焦る気へ風雅になれと散る桜　悦男
コロナ自粛母の浅漬け人気増す　義泰
まどろんで行く末のこと考える　彦弘
他人さま傷は浅いと言うてくれ　ダン吉
山間の足になってるバスが来る　康則
リビングに活けた桜で花見する　珠子
子の巣立ちそっと見送る深夜バス　千鶴

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

ウエディング君はスタート僕ゴール　隆樹
古希過ぎて一気に進む物忘れ　初枝
戦争と平和一気に読む若さ　則彦
悔しさはオウンゴールの一点差　のぶよし
定年へやっと落ち着く椅子がある　黙人
都会暮らし息子一気に大人びる　真由美
平熱の証拠に今日も計る熱　柳子
だんだんと無口になって老二人　ふさゑ
飛ぶ鳥も飛べぬ鳥にもある宇宙　劦

ひと息にのみ込む酒に明日がある　花峯
新コロナ暴れた果てに金を吐く　きよし
うっかりとゴール見逃しふたまわり　孝子
五月晴りんごの花がいとおしい　京子
慌しい気持ち鎮める手酌酒　重虎
神様は多忙カメラが凝視する　霜石
ゴールまで走り続ける片思い　洋子
一気呵成引くに引かれぬ天王山　一呑
亡妻が待つ津軽の風になるつもり　風来坊
せかせかをぬる燗にして明日はあす　和香子
割り勘になると慌しい小銭　慕情
シナリオを一気に変えたコロナ菌　美鈴
終息のその前に今日どう暮らす　規子
切手はる行き着く先は子の背中　ひとし
任せなさいゴールキーパーですアタシ　吹喜
このままでゴールできるか白マスク　ちづ子
太陽に負けぬイジメになど負けぬ　龍馬
コロナ禍で一気に増えた難解語　ひろ

川柳塔わかやま吟社　小谷　小雪報

塩まいた位で逃げはせぬコロナ　佳子
一つまみ塩が味付け左右する　紀久子
ひとつまみ塩を効かせて引き締める　准一
遠足はやっぱり母の塩むすび　俶子
ひきしめてみる人生の塩加減　寿子
塩飴を舐めて今夏を乗り切ろう　夕胡
塩ふって霞ヶ関の灰汁を出す　八茶
見えぬ敵どう防いだらと世界中　文代
同じ傷心に響くものがある　あかね

難民のテントに響く呱々の声　保州
一日中コロナコロナと鳴り響く　よしこ
晩学へ響く足跡手繰り寄せ　徑子
シンバルを打つ一瞬のタイミング　愿
コロナ禍は大仏のくしゃみだろうか　小雪
幻の拍手が響く無観客　紀子
家事万端嫁にゆずって楽隠居　タカ子
苦労して握ったバトンひびだらけ　晶子
スムーズに渡らない季節のバトン　日出男
代々のバトン令和を通過中　大輪
しゃあないなDNAは変えられん　知香
バトンタッチ絵を塗り替えた子の時代　冨美子
ライバルのバトンはきっとブランドだ　ほのか

竹原川柳会（広島）　**古田比呂子報**

被らねばならぬ波なり受けて立つ　寿子
風さやか花と対話の風を吸う　鬼焼
便利さが作る幸せ不幸せ　宣之
温存をしておく最後の切り札　昭紀
新聞が薄過ぎないかステイホーム　育子
イノシシの残りいただく木の芽和え　夢香
ステイホーム苺ほおばる皆笑顔　歩美
野辺送り桜吹雪を見せる母　慶子
怠け癖直ぐに慣れてるこわさ知る　汎美
人恋しく郵便受を二度三度　栄香
ゆっくりと畑仕事をする自粛　白狐
亡夫亡父母みんな笑っている仏間　厚子
梟の頭ぐるりと賛否問う　輝恵
家ごもり花壇の花と濃密に　淑子

お稲荷さん散歩コースへ入れておく　幸子
人間を試すかコロナ治まらず　敬子
談合をしたのか渡り鳥の群れ　貞子
二歳天使たんぽぽ綿毛吹いている　千代美
買う物が思い出せない道の駅　規代
むっとして出れば真紅のボタン咲く　弘子
がんばらなくていいよというエール　比呂子
洗濯は済んだ十時のお茶にする　笑子
十万円オレにもあるの五歳聞く　史子
いっぱいになったこころとこころとりかえる　五歳　ちか
ステイホーム無精を誰も咎めない　蘭幸

川柳塔唐津（佐賀）　**仁部　四郎報**

レンゲ田へ園児遊ばせ転び合う　蜂實
三十年溜めてきた句の呻き声　高明
違うレジ通って買い溜め成さる女　四郎
山海の珍味知事会売りくらべ　廣幸
未だ雛伸び代有りと胸を張る

川柳塔すみよし（大阪）　**古今堂蕉子報**

髭剃って髪整えてプロポーズ　いさお
ゴキブリのひげは異常で恐ろしい　勝弘
礼儀作法こだわる人の無精髭　昌紀
可愛い子牛乳飲んで白い髭　ミナ子
運かける髭は剃らずに伸びるまま　大子
暇だから妻の髭見て剃ってやる　舞夢
久々のカラオケだ声枯れるまで　まつお
簡単に枯れていくのかこの地球　芳香
枯渇した脳に枝雀の十八番集　里子

村上玄也選

ひらめきは深夜に湧いて風に散る　恭子
脚光はなくても路地に咲くすみれ　純子
マスク二枚家族会議に諮ります　夢香
脳回路空回りして名が出ない　美津子
異議なしとイエスマンらが声を張り　大鯰
背広着てネクタイ締めて家に居る　正子
来し方の苦悩が滲み出る背中　（藤）則彦
ファスナーと喧嘩している試着室　勝美
直感はひとりよがりに気付かない　薫
問われても即答できぬカタカナ語　（福）正彦

佳句地十選　（7月号から）

安土理恵選

お誘いが有れば浮かれるまだ卒寿　節子
合言葉達者でいようまた会おう　峰子
こんにちはマスクの中は笑顔です　（大）よしみ
督促の手紙に一句添えてある　義泰
悲ない暮らしを願い窓開く　（藤）美智子
生真面目な鉛筆今日は今日を書く　紀華
終息を祈る姿で豆の花　（冨）恭子
始まりはどうあれルビコンを渡る　芳山
追伸にバラの見頃をさりげなく　和子
正直な日記に鍵をかけておく　紀子

ひこばえの芽吹きに枯れ木安堵する　(矢)五　月
天敵の前に枯れ木の僕が立つ　久仁雄
枯れるように天寿まっとう祖母の顔　廣　子
十年後見ているような枯れ落ち葉　晴　雄
欲捨てて見事に枯れて無味無臭　萠
百歳にもなれば爪から枯れてくる　シマ子
ああ傘寿まだ末枯れぬ心意気　満　作
自粛せよ経費が過大デメリット　小枝子
友達がたんと出来たよ五七五　さくら
見返り無視命を削る救命医　宏　造
子が二人今では逆に親育て　日の出
巣ごもりの素顔に減らぬ化粧品　たかこ
外出自粛守って減った無駄づかい　福貴子
メリットは自由デメリットは孤独　満知子
下積みの長さメリットだったかも　克　博
メリットは密にならない過疎の村　民　子
溶け込んで上手く世間が回りだす　裕　之
食レポは肉を一口溶けました　直　子
溶け合うてまあるくなった角砂糖　寿　之
ちびちびと舐めて冷菓が雫する　久美子
お美しいなんて言われてとろけちゃう　ばっは
とろとろになるまで煮込む嫉妬心　雅　美
鉄溶かすほどの恋から半世紀　篤
嘘重ね張ったバリアが溶けていく　志津子
わだかまり溶けたさいなことやった　ダン吉
わだかまり酒に溶かして手を結ぶ　俊　雄

川柳ふうもん吟社(鳥取)**山下　凱柳報**

青空に背中押されて主婦多忙　真智子
夢を押す母の笑顔に救われる　孝　柳
医者の検査的中しないこと願う　振　作
丁寧な二円不足の判子便　野　蒜
山勘がピタリと当たる一夜漬け　加代子
月日たち妻が居直る椅子の位置　桐　子
押し花に二十の夢が残ってる　千賀子
マイナスの方へ的中して困る　鐘　旭
居直ってみても妻には勝てません　みつ子
峰打ちが父の愛だと今気付く　喜　明
三密を避けた夫婦に隙間風　天　翔
押せ押せでまっすぐ来たが悔いはない　紫　陽
白羽の矢的中したぞ嫁決まる　享
的中の馬券ポケットふくらませ　蟹　郎
この金は俺の稼ぎと捨て台詞　茶　人
押し洗いすれば私も灰汁がでる　房　江
肩書の取れた背中を風が押す　三千代
一歩前押されドラマが始まった　稲佐嶽
的中はしてほしくない負の予感　節　子
ぴったりと雨の予感が当たる旅　千　代
居直って聴く生きること死ぬる事　重　忠
嘘だけはつかない物干しの軍手　賢　吾
輝いた時もあったとひとり言　八千代
居直ってスーダラ節で生きてゆく　一　瑤
三才に抜いてごせいや選者様　凱　柳

川柳同友会みらい(鳥取)**吉田　陽子報**

平和の塔へ私が折ったツルもいる　恵美代
春キャベツ刻む俎板リズムカル　亜　矢
山は笑って森林浴に来いという　和　代
違和感も無くばあちゃんになっている　みどり
かぐや姫か満月待って姉は行く　美恵子
俎板の鯉の覚悟はできている　章　子
墓仕舞いメディアの風に耳澄まし　菜　美
追いかけてきたのは枯れ葉だけでした　節　子
母逝って姉妹の絆崩れだす　真　帆
今は今懸命の汗悔いは無い　安　子
柱にはなれず添え木のままでいる　健二郎
来る人も去る人もみな宝物　一　眸
口軽いタンポポだからデマを蒔く　八　重
幸せは三歩あとから付いてくる　陽　子
うかうかと夕日に付いて行くなかれ　観　洋
物言わず大地潤す春の雨　れい子
軽い嘘潤滑油ではないですか　ダン吉
貴方とは同期でいつも吠えている　美　羽
思い遣る気持ち免罪符となるか　游　子
高齢化防ぐワクチンないものか　公　弘

南大阪川柳会　松岡　篤報

遅刻してバケツ両手に立つ廊下　博
遅刻する人でないから胸騒ぎ　亜　成
マスクして応援なんて気が乗らん　修
つぶやきが自粛続きで愚痴になる　克　己
つぶやきもよく聞いている母の耳　一　歩
つぶやいて怒りを少し和らげる　大　子
つぶやいた不満枕が聞いている　弘　子
ぎりぎりの装具で守る医療の場　妙　子
健診票飲むか飲まぬか悩ませる　国　和
ぎりぎりまで我慢母から助け舟　シマ子

婆ちゃんもマスクをすれば美人さん　歌留多
今日の気温スマホで調べ服を決め　ルイ子
こんなご時世せめてマスクのお洒落せん　楓　楽
野を行けばみすゞの詩に逢いました　志華子
ステイホームさてこれからを考える　憲　彦
三密に窓に向きあい二人膳　純　子
遅刻には縁なく目下自粛中　柳右子
掌に言いわけ書いておく遅刻　敏　治
遅刻やでアベノマスクはまだ来ない　直　子
同情をされたらあかんタイガース　篤
ぎりぎりでやりくりをした春財布　通　江
締め切りの間際で閃いた一句　いさお
ギリギリの暮しの中でする自粛　ひさ乃
ぐっすりと眠って明日に行くつもり　峰　子
父殺め母も殺めて子はいない　昌　紀
完走の汗に何度もありがとう　ダン吉
私よりチャランプランが出世して　勝　弘
辛抱は一人じゃないよ世界中　よしみ
重傷者多数苦渋のトリアージ　満　作
目の前の噴火雑念まで飛んだ　ばっは
コロナ禍に耐えた案山子の独り言　郁　夫
四月もう要らんさっさと経ってくれ　東　風
コンベアーに乗る毎日が黄昏る　柳　伸
銃声がまだ聞こえます世界地図　あや子
地球にも大きなマスクコロナ余波　弘委智

川柳茶ばしら（愛知）　関本かつ子報

物忘れ元をたどって思い出す　雅　美
解除後もまだ届かないアベマスク　遡　行
水色を青と言います晴れた空　まみ子
骨密度年相応という不安　美千代
潮騒に浜の子どもが戯れる　三樹夫
ガラケーの刑事が走る古ドラマ　かつ子

ブラザ川柳（大阪）　穂口　正子報

登りつめ賭マージャンで幕を引き　正　子
棚田の美稲穂がゆれる苦心作　求
リタイヤ後家事は分担主婦やめた　景　子
財を成し手づかず老いて認知症　政　夫
久々の登校の列にぎやかに　千枝子
宅急便回覧板もまず除菌　清　乃
登り窯温度を睨み寝ずの番　一　彌
啖呵きり言った言葉に悔い残り　和　代
信楽の緋色に燃える登り窯　克　三
ただ一県岩手コロナをくい止める　修
感謝して返す時期だね免許証　悦　夫
大声も内緒もできず身がまえる　五　月
たんぽぽに一句作れとくすぐられ　園　子
巣立つ孫初出勤はテレワーク　弘　光
一生を了えて輝く空の星　淳　司

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

冷蔵庫扉を閉める回し蹴り　美　緒
すっきりと財布の中も五月晴れ　紀の治
ごほうびに自粛疲れのお休みを　汪
狭い家大きな子等がウロウロと　瑞　枝
町中はにわとりを飼う場所もなく　美　草
人恋しスティホームはうんざりだ　美　穂
マスクして目だけ笑ってご挨拶　多美子
我慢がまん戦後生まれが試される　宣　子
笑顔ですその一言に感謝する　菜　々
テレビ好き総理小出しに記者会見　雨　奇
ウイルスと共存するも人の知恵　恵　子
海潜りタイやヒラメと踊りたい　久　直
自粛してメールテレビで日が暮れる　治　代
共に老い温泉へ行く友となり　日枝子
ほとんどをマスクに隠し若くなる　令位子
コロナから教わりました住み心地　博　毅
仏さんにさっきのウソをお詫びする　宏　之
今はこの手縫いのマスクこそ宝　千　代
飲む喋る新年会が懐かしい　俊　久

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

予定表白紙のままに梅雨に入る　春　代
千代紙を折って彩りある暮らし　則　彦
取り置いて結局捨てる紙袋　奈津子
短冊に願いはひとつ収束へ　純　子
やめるかと言われりゃむきにやめません　一　弥
取りやめて命拾いの船の旅　郁　子
言い訳はやめて静かに笑っとく　堅　坊
外出やめ積ん読の山やや崩れ　黒　兎
再会もハグなくお辞儀日本式　正　子
再会の嬉しさコロナ忘れそう　桂　子
暇な夫何度もポストのぞいてる　順　子

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

鬼瓦見下ろしている鯉のぼり　(北)哲　男

世の中に歌があるから救われる　稠民
猫に言うおまえ飼い主なめてんやろ　善輔
父の日だ文句あるか昼の酒　剛
誰だっけ見分けがつかぬマスク顔　重男
雑草と今日も会話の根比べ　良子
さようなら名残を惜しむパンダさん　喜弘
日々生きて我が人生の歴史見る　照代
六月の綺麗な風はまだ吹かぬ　(長)哲夫
コロナ禍が一八〇度暮らし変え　美智子

長柳会(大阪)　辻村　ヒロ報

女にも卒業どきがあるのです　ヒロ
明日より今日が一日若いから　秀子
霜柱踏んで登校懐かしい　敬二
孫巣立つ柱の傷をおきみやげ　弘美
休眠の脳に休めは死ねのこと　光弘
バースデイうれしくもない老いの坂　ゆき
魚の目が今日も散歩の邪魔をする　由夏
雁首を揃え謝るお偉方　たけし
苦も難も肩寄せ耐えた意地絆　三和子
時々はぶつかり合うも家族です　千代
主婦業に卒業ないがそれも糧　福子
プロポーズされないままにダイヤ婚　澄子
春うらら蛹の私蝶になる　ふみ
さあやるぞ掛け声だけで腰あげず　隆明
喜寿傘寿祝うゴールは白寿越え　靖博
子の帰省好物作る台所　幸子
妻からのブロックサイン受けて立つ　純風
介護した方が疲れて先に逝く　隆彦
ABC予想じっくり見てもわからない　旅人
逆らわず愚痴を聞いてる留守電話　登美子
そわそわと披講待ってる自信作　淳司
込められた願いが磨く百度石　和代
手作りのマスク姿に惚れ直す　由子
在宅勤務ずる休みだと誤解され　洋二
恐いのが女房の他にいてました　正博
慌てずにゆっくり戻せ自粛まえ　孝
自粛にも慣れた寂しさにも慣れた　和子
もう決まり今年の漢字自粛だね　規之
コロナ怖し罹患者弾く世が怖い　おくみ
ナウシカの世界の如く新コロナ　邦夫
ステイホーム続きお出かけしたい靴　正美
コロナなんかに負けるものかと楠若葉　直樹
ウイルスにお国事情を覗かれる　孝代
大切なのは何かとコロナ突き付ける　ともこ

岩美川柳会(鳥取)　山下　節子報

きょろきょろとする運転手叱りつけ　重忠
珍しさきょろきょろするなはずかしい　弘六
六十年飽きぬお酒を飲む遊び　完司
小遣いを持つと風船玉になる　一瑤
齢老いて遊び仲間がありがたい　美恵子
使わずにあげた小遣い持ってた祖母　たぬ
夕焼や小遣いいらぬ野良が好き　菖子
どこを見るカエルきょろきょろ俺を見る　幸安
短刀の利く声は喉より腹で出す　茶子
百回が十円だった肩たたき　真理子
のど元を過ぎてわかった人の味　振作
喉までも出てる言葉を引っこめる　雅女
居酒屋が休業よけい喉が鳴る　彰夫
小遣いが欲しいと言わぬ顔に出る　千代
喉から手が出るほど欲しい給付金　凱柳
鐘一つ笑い飛び出るのど自慢　一平
指間から砂をこぼして城つくる　蟹郎
自粛され大人の遊ぶ場所がない　節子

川柳塔さかい(大阪)　内藤　憲彦編

会者定離じっと我慢をした涙　唯教
豊作の風が吹いてる千枚田　蕉子
我慢したことが肥やしになっている　さくら
我慢強い僕を時には褒めてやる　堅坊
我慢強くポストコロナの策を練る　憲彦
我慢と言う苦痛が人を鍛えます　光雄
手に受けて降って来たなと小糠雨　五月
節ぶしが疼く明日は雨だろう　いさお
いよいよ雨期しっかり呼吸屋久の森　ばっは
雨粒が涙の痕を消してくれ　雅明
篠つく雨に決断を迫られる　俶子
うつらうつら夜来の雨とラジオ聞く　みつこ
こぬか雨袈裟切りにして飛ぶ燕　ひろ子
あいまいが嫌い白黒つける妻　瑠美子
あいまいに見えてしっかり筋通す　朝子
使途不明金揉めてはりますご夫婦で　としお
あいまいな返事へ氷鳴るグラス　みつ江
迷ったら薬は飲んだ事にする　妙子
中途半端なやさしさ人を傷つける　扶美代
にっこりと頷きノーと言っておく　雅美

ステイホーム晴読雨読ふえる酒　敏治
雨上がり音符の様な葉のしずく　佳子
一年生傘も合羽もドラえもん　志津子
鳥の声今朝は静かに雨の音　満知子
表札にお礼を言って雨宿り　和夫
赤い傘赤い雨靴お出迎え　舞夢
夕立にぴたっと止んだ蝉時雨　八千代
やばくなるといつも政権体かわす　憲
やっぱりね言い出しべえがたのまれる　敬子
矢面の医療現場を扶け合う　満作
やがて秋威厳を持って立つ案山子　美津子
山盛りのイチゴの愚痴を炊いてジャム　ゆみ子
山寺に生きざまを問う旅の果て　時雄
遣り甲斐が命の炎焚きつける　進
野合だと言われようとも多数決　玄也

西宮北口川柳会（兵庫）　緒方美津子報

三両目いつもベレーが揺れている　公輔
出来ぬこと増えてやさしくなって行く　一徳
神さまは少し私に手厳しい　敦子
百越えて生きる命の応援歌　哲子
あの賛辞ジョークだったといま気づく　求芽
米中のどちらが先に音を上げる　翔
給料袋に昭和の父の汗の跡　真桜子
広島で大阪市電まだ走る　正和
容赦ない老いのスピード物忘れ　りこ
やむを得ず出かける車山笑う　(福)弘子
再手術向かう列車に一人乗る　千代
友と逢う送ったあとに気づくこと　つな子
厳しさに耐えて人間しゃんとする　野鶴
人はみな極楽行きの切符買う　伯備
兵馬俑どれも戦の顔を持つ　哲男
途中下車しろと囁く鬼がいる　武彦
何となく二人の仲がぎこちない　勝弘
ばあちゃんは電車の中でも正座する　宣子
本物と気づいた君も偉かった　いわゐ
そっとしておこう二人はもう大人　恭子
スティホームで回数券が期限切れ　淳
直線が引けるまだまだ惚けてない　野薫
結婚という超難問が解けません　廣光
大好きな川柳あってまだ枯れぬ　堅坊
徳俵あって倒産まぬかれる　弘委智
陰でそっと見守っている鬼上司　洋次郎
気づいて忘れ気づき直して生きてきた　和宏
どん底を支えた母の広い海　紀華
皆マスク誰が誰だかわからない　利子
東北の息吹新たなリアス線　千賀子
何もかも必然だった私たち　ひとみ
気づいた時はもう散っていたサクラ　宏造
「橋渡るな」一休さんの頓智好き　邦男
爺さんのスパルタ今は宝物　正彦

川柳藤井寺（大阪）　太田扶美代報

星が降る山に散骨友眠る　一歩
アルバムを開けばそこにファンタジー　久仁雄
あと少し酸っぱさ足せばいい女　みつ江
ファンタジーの世界へ誘うジブリ作　ちづる
夏バテ知らず祖母の梅漬けらっきょ漬　ゆみ子
六角堂夕陽抱いたまま暮れる　弥生
三杯酢少し酸っぱい倦怠期　ひろ子
海中散歩蛸になりエイになり　みつこ
同じこと酸っぱく言うて嫌われる　キーキー
なよ竹で十五夜怖いかぐや姫　ばっは
母になるよろこびレモン丸齧り　俶子
お別れに二人で飲んだレモンティー　シマ子
大丈夫か酸っぱい匂いしてるけど　まつお
甘酸っぱい古いアルバムセピア色　こみつ
無人駅母が小さくなっていた　ダン吉
少々の余白へ大根膾など　美代子
きっと幻想僕がトップに立っている　かずお
恋をした数だけ酸っぱさが残る　瑠美子
満天の星が奏でるファンタジー　いさお
鼻が利く梅酒飲み頃来る息子　喜代子
ファンタジー老女の胸を去来する　扶美代

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

我が家ではマスク外してのびのびと　風露
伸びるのは爪髪皺で背は縮む　龍枝
久し振り背丈伸びたよ友よりも　さちこ
ダメ総理延命術は断トツだ　次男
延びるなよコロナ解除の夜明け待つ　恭子
延びたソバ文句は言わず食べている　けいこ
早寝して鯛釣りに行く午前四時　石花菜
案内にこれが最後と同期会　野蒜
荒波を北へ向って泳ぐ父　隆昌
マスクして岬の虹に会いに行く　宣子
地図を見て行った気分のこの時世　玲子

後戻りせぬ鍵持って行く根性　日出子
天国の門がすんなり開くかなぁ　萩江
すんなりと読めぬお経とアラビア語　重忠
片足ですんなり立てば二重丸　祐子
すんなりと地区の総会こんなもの　茂夫
分からず屋のけてすんなり事はこぶ　康子
免許返納すんなりと認められ　大鯰
すんなりと握りこぶしを洗ってる　美知江
新型コロナすんなり収束夢だった　道春
すんなりと着れていたのにコロナ前　恵子
鼻ぐりを引かれ無理やり前を向く　麦青
牛乳で焼酎の毒中和する　完司
高値にも目潤ませてる牛の市　雄大
牛歩でも前に進めば未来ある　瑞子
大切な家族同様牛がいた　智恵子
つながれた牛は尻尾でハエを追う　由紀子
売られ行く牛の涙を忘れない　酔芙蓉
行く場所の無い時畑で大文字　照彦
牛乳を飲んで育った戦後っ子　鬼一

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

会えずとも句報で浮かぶ皆の顔　英三
笑わせてぐっと泣かせる新喜劇　真理子
こだわりは風がほどいた柿若葉　武彦
ぐっと来たドラマ私の過去に似て　多津子
三密をぐっと濃くする天邪鬼　歌留多
非常食注文しては常食に　多美子
ステイホーム雑学多く詰めこんだ　きらり
詰め込んだ胸のパットにある秘密　時子
応援が母の夜食に乗ってくる　㈱玲子
感染が怖く座席は詰められず　敏昭
支え合いウイルス消える刻を待つ　ヨシエ
書類整理結局場所を詰めただけ　忠子
掃除無用雑多の趣味の置き処　求芽
一波乱あって絆がぐっとまし　洋志
青春を一緒に走り詰めた距離　弘委智
コロナ禍であまる玉ねぎ袋詰め　ふりこ
詰めるだけ詰めてみたいな万札を　勝弘
白桃の香りを詰める生産地　肇
ぐっときたらあとは押すだけ恋心　美津子
板さんのプライド詰めたお弁当　正彦
小さな旅心に水をやってます　美智代
捨てられぬ昔を詰めたダンボール　希久子
ハングリーになると自分が見えてくる　則彦
なぜだろう時間あるのに片付かず　㈱玲子
手料理であなたをぐっと引き寄せる　千鶴子
宿題を遺して逝った横田さん　英旺
岩も穿つ聡太の詰めの鋭さよ　黒兎
パセリ噛む幸せの音今日も聴く　野鶴
その話ぐっとくるけどダメはダメ　見清
まだやれる自分に送る応援歌　堅坊
楽しみがたんと詰まっている手帖　耕治

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

塩と酒飲むな減らせと医者の妻　五月
やさしさに触れていのちの灯を点す　星雨
あの世とや皆んな互角に仏さま　志華子
たっぷりの愛で待ってた横田さん　義昭
こんな時だから笑顔を忘れまい　朝子
働いた証塩吹く作業服　博
減塩の食卓わびし病み上がり　俊雄
老いの身に塩は毒だがめちゃ旨い　堅坊
米中に苦言いう人いないのか　一歩
苦い湯を何度も飲んだ飲まされた　勝弘
ホームランエヤータッチのお出迎え　満作
以前からハグもタッチもしていない　賢子
軽快なタッチで描く平和の絵　弘委智
ミスタッチ徹夜の資料全部消え　克己
ビリケンさんなでなで禁止エアタッチ　福貴子
春は花夏は緑の道を行く　正彦
まあなんとふたりのんびりゆっくりで　ひとみ
夫婦げんか互角と悟る五十年　麗
実力は互角人気で2位になる　久美子
強情と偏屈ふたり五分と五分　直樹
安倍と麻生世間知らずはほぼ互角　廣光
頼む方も断る方も嘘を吐く　洋志
叱るには孫の笑顔が明る過ぎ　郁夫
顔半分見せず節約化粧代　榮子
悲しみにふたすることを止めました　峰子
久しぶりカタカナ弾むランドセル　信子
仏さまの手加減らしい生きている　修
一桁の感染少し笑顔出る　ルイ子
戦させぬため座り込むおばあたち　正
仰ぎ見る富士のお山も雲マスク　宣子
今日もまた断捨離してるウイルス禍　和夫
鬱の字が書けた青空を飛びだし　満知子
地球儀をいじるとヒト科の罪と罰　肇
医療現場がんばる姿手を合わす　万紗子
千手観音マスクする手はどれですか　野鶴

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田川柳会	15日(土) 14時締切 時間・騒ぐ・うっかり・ヒーロー	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19　中岡香代
川柳ねやがわ	16日(日) 14時締切 席題・忙しい・会計・教室 自由吟	寝屋川市民会館 京阪寝屋川市駅から徒歩15分 または京阪バス市民会館前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳藤井寺	16日(日) 14時締切 ガラス・怪しい・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303　鈴木いさお
南大阪川柳会	17日(月) 18時30分締切 仕度・うずく・ばたばた・雑詠	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901　松岡　篤
豊中もくせい川柳会	17日(月) 13時50分締切 半端・泣く・細かい・自由吟	豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳さんだ	18日(火) 13時30分締切 財布・速い・メダル・寝る・自由吟	キッピーモール（JR三田駅前） 〒669-1545 三田市狭間が丘5－10－19　谷　祐康
川柳塔すみよし	22日(土) 14時15分締切 大胆・転がす 恐しい話（読込み不可）	住吉区役所内　住吉公民館　2F 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山三幸川柳会	22日(土) 13時15分締切 名前・戦争・タオル	和歌山商工会議所　4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの市民川柳会	23日(日) 14時締切 試練・洗う・やすらぎ・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳ふうもん吟社	23日(日) 13時から 自由吟・風船・しっかり・痛い 席題	県民ふれあい会館　4F　鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
川柳塔みちのく	29日(土) 17時締切 力・割る・油	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」℡0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
八尾市民川柳会	休会	〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳たちばな	休会	〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造

★「緊急非常事態宣言」は解除されましたが、各地句会の変更が予想されますのでご承知ください。

８月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	７月末締切ました 砂漠・決める・あっ	奈良市立中部公民館　４F 奈良市上三条23-4　近鉄「奈良」駅④番出口　徒歩５分 〒633-0054 桜井市阿部787　安土理恵
城　北 川柳会	１日（土）14時締切 休む・もたもた・良心・自由吟	旭区老人福祉センター　３F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
倉　吉 川柳会	１日（土）14時締切 杉・どちら・聞く・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟　社	１日（土）13時30分締切 「嫉妬・妬む」・のろのろ・貼る 「閃く・ひらめく」	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－１　相見柳歩
川柳大阪	８日（土）14時締切 しばしば・虫・日暮れ	メトロ・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
川　柳 とんだばやし 富柳会	８日（土）14時締切 近・塞ぐ	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ 200 m 〒584-0064　富田林市不動ヶ丘8-31　山野寿之
六　甲 川柳会	８日（土）投句会 鈴・ドラマ・やがて・散る 自由吟	誌上句会 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔 打　吹	８日（土）13時30分締切 火・抜く・よろよろ・席題	倉吉市上灘町９　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－３　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
川柳塔 さかい	８日（土）締切 負い目・厳しい・骨・折句：い・た・こ	投句句会に変更
川柳塔 わかやま 吟　社	９日（日）14時10分締切 兼　題＝朗らか・断・スイカ 課題吟＝技	和歌山商工会議所　４階　和歌山市西汀丁３６ 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
西宮北口 川柳会	10日（月）投句締切 水車・狂う・帽子・重い 自由吟	投句句会 投句先：　〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830 福田正彦
ほたる 川　柳 同好会	11日（火）13時30分締切 劇・防ぐ・短い	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根２－４－１　水野黒兎
川　柳 あまがさき	11日（火）14時締切 準備・波・さばさば・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ　２階 阪急武庫之荘駅南へ５分 〒661-0953 尼崎市東園田町３－49－５　藤井宏造
あかつき 川柳会	14日（金）14時締切 しつこい・球・砂漠・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第１ビル２F） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分（道路向い側へ） 〒543-0013 大阪市天王寺区３－６　木村ビル２階 あかつき川柳会

柳界展望

▽新誌友紹介△

西宮市　高瀬　照枝
紹介者　高橋千賀子

東広島市　古川　雄一
紹介者　小島　蘭幸

浜松市　中田　尚

次回常任理事会
近日開催予定。

―新同人紹介―

松倉正美（まつくらまさみ）

―楓楽・霜石・真理子推

季刊『川柳展望』

A5版、152頁。誌代 4,960円（年間）
☆見本誌進呈いたします。

〒567-0009　茨木市山手台4－6－3－101
TEL　072－649－5226
FAX　072－649－5226
川柳展望社

句会部よりお知らせ

川柳塔本社９月句会は、下記の要領で誌上句会といたします。
皆さまのご投句をお待ちしております。

記

『川柳塔』８月号に投句用紙を同封します。
（未読の方は川柳塔社事務所までご請求ください。）
投句締切　８月３１日（月）消印有効
入選発表　『川柳塔』11月号
投 句 料　１０００円（切手不可）

兼　題	「逃げる」	藤井　智史　選	（岡山県）
兼　題	「どうも」	久保田千代　選	（埼玉県）
兼　題	「ざっくり」	三宅　保州　選	（和歌山県）
兼　題	「たわむれ」	真島久美子　選	（佐賀県）
兼　題	「再　生」	新家　完司　選	（鳥取県）

（各題２句出し）

問い合わせ・送り先

〒543－0052　大阪市天王寺区大道１－１４－１７
花野ビル２０１　川柳塔社
TEL 06-6779-3490

２０２０　文化祭吹田市民川柳大会

日　時　**９月27日(日)　午前９時30分開場**
各題２句連記　投句締切　10時30分

場　所　吹田市文化会館　メイシアター３階
レセプションホール
阪急千里線阪急吹田駅西出口すぐ

宿　題
「刻　む」　鈴木　かこ　選
「駄　目」　中岡千代美　選
「連想吟」　栃尾　奏子　選
「すてき」　西　美和子　選
「　命　」　森中惠美子　選

会　費　１５００円（秀吟賞・大会誌呈）

★文化祭参加（夏休みに親子で川柳を作りましょう）
宿　題　「昼寝」「勝手」「困る」各題３句までを１枚のハガキに９句まで書いてお出しください。（**締切　９月５日**）郵便番号・住所・氏名・電話番号・大人、子どもの部と明記

送り先
〒565-0851　吹田市千里山６-６３-１０　坂本晴美まで
TEL０６-６３８４-２４６６

★食事会（カラオケなし）
希望者は９月１５日まで申し込み

会　費　４５００円

主　催　**吹田市　吹田川柳会**

（コロナ感染症拡大により　誌上大会に変更する場合があります）

編集後記

★われもひとも千手観音
阿波踊　　薫風

★令和2年はコロナ感染症に明け、コロナで折り返した。感染者は世界で一千万人を超え、収束の見込みはまだない。喉に刺さった小骨のようにコロナが抜けない日々が続く。同人、誌友の皆さま、お元気ですか。在宅編集も4か月目に入った。遅滞なく本誌をお届けできていることを喜びたい。

★月間「波」は新潮社発行の月刊誌。一年購読で千円。連載あり、対談あり、書評あり、コラムあり、130ページとコンパクトながら中身は濃い。8月号特集は「コロナ禍を暮す」だった。しまった、先を越された。私もいずれ特集を組みたいと思っていたのに・・・。

★料理研究家の土井善晴さんの寄稿を紹介したい。「この新型コロナ感染症は、歯止めがかからなくなってしまった新自由主義という経済活動にブレーキをかけろという、地球の警告ではないかと思うようになりました。チャンスを与えてくれているように思ったのです。ウイルスは生命体としての地球の免疫力の働きかもしれないなどと、考えていました」。

★世界的建築家の隈研吾さんの文章も示唆に富む。「今回のわれわれを襲った疫病は、この都市、建築の一貫した流れ、すなわち大惨事の後に、より強く、より大きなものへと進化するという流れを繰り返すだろうか。僕は何か根本的に違うことが起きたような気がするのである。もう強く大きくしようとは誰も考えない気がするのである。強く大きなハコに閉じ込められてきた、われわれのライフタイル自体が、全否定されたように感じられるからである」

★10月に予定されていた川柳塔まつりは誌上大会に変更されました。表紙裏をご確認ください。

（朱夏）

□コロナ禍の中で、電子化された『川柳雑誌・川柳塔』の中から『川柳雑誌』の創刊号から終刊までに発表されている麻生路郎師の全句を一応集約した。まだ、零れていないか、もう一度創刊号から繙き、この際『川柳雑誌』のすべてを読もうと決意し、一日一冊、約四五〇日かけて読破するつもりである。

□繙いていると、先人の井上剣花坊氏、阪井久良岐氏と六大家が柳論や選者として登場し、木村半文銭氏や鶴彬も登場している。また、西田當百氏、野口雨情氏など多数の書簡も公表され、本社句会には水府氏も紋太氏もたびたび出席されていることが分かり、コロナ禍でも、面白く楽しく、興味津々の日々を送っている。「電子化」は、みなさまのお力でできたものですから、是非、繙いて大いに学んではいかがでしょうか。

（勝弘）

ひとこと

シテキスト

長年朗読ボランティアをしていましたが、本や広報を録音する時のモニターを経験すると、どうしてもラジオ等の読み間違いやアクセントが気になります。

なるべく知らぬふりをしようと思いながら、今言わないとこの人は一生間違えて読むかもと心配になります。でも指摘をする時には「番組内での訂正はいりません。次回から参考にして下さい」と添えました。中には丁寧にお礼のメールを下さる方もあります。

最近の私は他人事（ひとごと）を（たにんごと）と間違える人の方が多くなったような言葉にはなるべくふれず、人名・地名のように明らかなミスだけにシテキスト発動を心掛けています。

（中村　伸子）

作品募集

10月号発表（8月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　西出楓楽選
愛染帖（2句）　新家完司選
檸檬抄「エール」（2句）　石橋芳山・古今堂蕉子共選
インスピレーション・ナビ（2句）　大西泰世選
一路集（2句）「まつり」　山崎武彦選
「困る」　田中天翔選
初歩教室「拾う」（3句）　高瀬霜石担当
初歩教室「拾う」は11月号発表

11月号
檸檬抄「したたか」
一路集「　幅　」「追　う」
初歩教室「都　合」

お知らせ

本社8月句会は誌上句会として開催、7月31日締切りました。発表は10月号です。コロナ感染症にマスクの放せぬ夏です。熱中症にもご注意下さい。

本社9月句会は誌上句会です
詳細は川柳塔8月号101頁参照
投句締切日8月31日、発表11月号
兼題「逃げる」「どうも」「ざっくり」「たわむれ」「再　生」

川柳塔柳箋

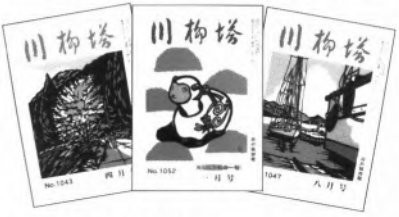
3冊　送料共 1,000円

事務所あてお申し込み下さい。

定価 八百円（送料100円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）

二〇二〇年（令和二年）八月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七 花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替 〇〇九八〇―四―一九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL（06）4800―3018
FAX（06）4800―3028
E-mail：bikenart@ea.mbn.or.jp

令和一年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一一九号　川柳塔　八月号　定価　八百円（送料　百円）

オニザキの プレミアムロースト
つきごま
杵つき製法の「すりごま」
袋を開けた瞬間に広がる、香ばしい薫り。舌と記憶にしっかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくするゴマを作りたい、真っすぐな想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと無く引き出した、オニザキの自信作をお届けします。
株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉
医療法人社団　湯川胃腸病院
消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設
大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－8